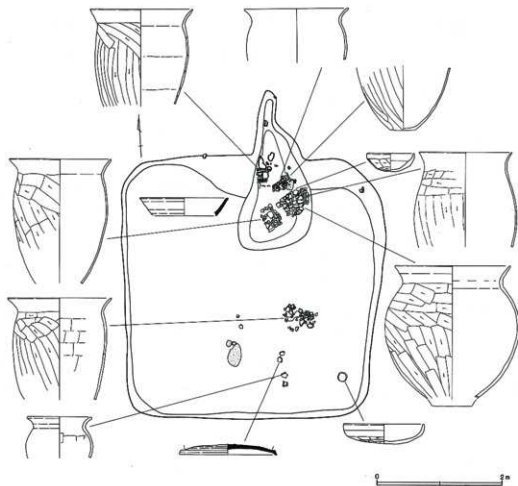


- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 1層 明褐色土、砂質でしまりは弱い | 8層 焼土を多量に含む |
| 2層 黒色土を基調とし、ローム粒子を若干含む | 9層 炭化物粒を多量に含み、焼土粒、焼土塊を含む |
| 3層 褐色土を基調とし、黒色土粒とローム粒を含む | 10層 黄褐色土、焼土粒、炭水化物粒を多量に含む |
| 4層 3層土にローム粒を多く含み、ローム小ブロックも含む | 11層 黒色土、焼土粒を含む |
| 5層 2層土に焼土粒を含む | 12層 貼り床、ロームに炭水化物粒、焼土粒を若干含む |
| 6層 5層土より焼土粒及び小塊を多く含む | |
| 7層 6層より焼土粒の含有率が高い | |

0 2m

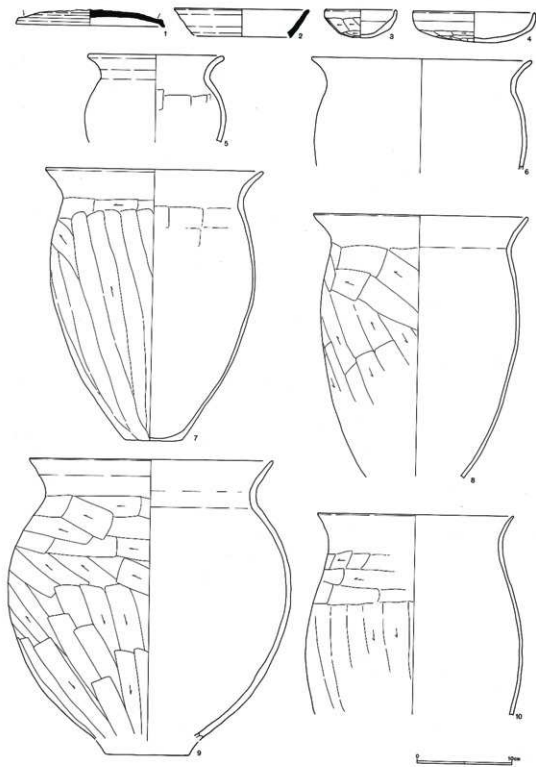
第256図 第4号住居跡



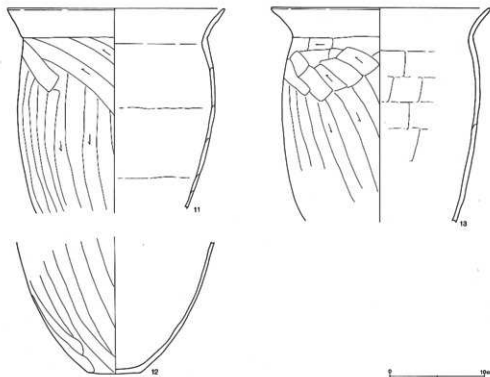
第257図 第4号住遺物分布図

る。北壁の中央部よりやや東寄りにカマドを設置しており、カマドの燃焼部は大きく、煙道部も細くなり比較的長くなる。床は貼床で平坦面を呈するが、南東方向にやや傾斜する。掘り方は凹凸面が著しく、住居跡の南半分において顕著である。覆土は貼床を合わせて12層が確認されているが、カマド部分を除けば基本的には4層である。1層は砂質でしまりの弱い明褐色土、2層はローム粒子を若干含む黒色土、3層は黒色土粒子とローム粒子を含む褐色土、4層はロームブロックを含む褐色土である。12層の貼床層は厚い所では30cm前後を測り、ロームブロックの他に炭化物、焼土粒子を含んでいる。

遺物はカマド内から集中して出土している。1は須恵器蓋で、口径15.7cm、器高1.7cm、1/6残存。口縁端部を斜め下方に屈折させ、頂部につまみを付ける形態であるが、つまみは残存しない。体部中位より上はヘラケズリ調整を施している。焼成は良好で灰色を呈する。2は須恵器環で口径14.2cm、器高3.0cm、口縁部1/4残存。焼成は良好で灰色である。3は土師器の小型環で、口径7.6cm、器高3.0cm。短い口縁部はまっすぐ立ち上がり、体部は丸い。口縁部内外面はヨコナデ、体・底部



第258图 第4号住出土土器 (1)



第259図 第4号住出土土器 (2)

は細かい単位でヘラケズリ調整を行なっている。焼成はやや不良で黄橙色。4は土師器坏で、口径13.0cm、器高3.2cm。口縁部は緩やかに内彎し、口唇部を丸くおさめる。口縁部外面から体部内面はヨコナデ、底部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整を行なう。焼成はやや不良で橙色。5は土師器小型甕で、口径14.4cm、残存高9.1cm。頸部は「く」字形に屈曲し、口縁部は外反しながら開き、口唇部は丸くおさめる。胴部は大きく張り出ししている。頸部外面から内面はヨコナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面ヘラナデ調整を施すが、風化が激しく明瞭ではない。明褐色。

6～12は土師器甕である。6は口径23.3cm、胴部径22.5cm、現存高11.4cm。にぶい橙色。風化が激しい。7は口径23.1cm、胴部径21.7cm、底径6.0cm、器高28.5cm。にぶい橙色。8は口径22.7cm、胴部径21.0cm、現存高27.5cm。橙色。9は口径25.8cm、胴部径29.9cm、現存高29.4cm。明赤褐色。10は口径20.7cm、胴部径22.9cm、現存高20.9cm。にぶい橙色。11は口径22.9cm、胴部径20.9cm、現存高21.0cm。橙色。13は口径23.2cm、胴部径21.0cm、現存高22.5cm。橙色。12は胴部下半から底部のみ残り、底径5.5cm、現存高13.8cm。橙色。形態の特徴は、9が頸部を直立させて口縁部を外反させ、胴部は張り出しが強く、中位に胴部最大径をもつ球形を呈するが、その他はほぼ同じく、頸部が緩やかに屈曲して口縁部が外反して開き、胴部は張り出しが弱い。いずれも調整は頸部外面から内面はヨコナデ、胴・底部外面はヘラケズリ、胴部内面はヘラナデを施している。

3. 包含層出土の遺物

四反歩遺跡北地区の包含層からは、量は少ないが縄文時代から中・近世の遺物までが出土している。特に、土器は縄文時代早期の破片が多く、石器も縄文時代のもが多く出土している。石器は製品が少量で、大半は剥片類と破砕礫である。

(1) 出土土器

第1群土器 (第260図1～第262図46)

縄文時代早期の土器群を一括する。

第1類土器 (1～11)

燃糸文系土器群を一括する。1は肥厚する口唇部が若干内彎気味に開く器形を呈し、口唇部上端を平坦に整形する。燃糸文施文後に口唇部を整形しているものと思われる。原体は細密な燃糸Rである。細砂粒を含むが緻密で、暗赤褐色を呈する堅緻な土器である。2は角頭状を呈する口唇部がやや内彎気味に立つ器形を呈する。燃糸文は口唇部からやや間隔を開けて施文しており、細密の原体Lを帯状というよりも粗雑に間隔を開けて施文する。器面整形は粗く、指頭整形痕も残されている。胎土に長石類の砂粒、小礫を多く含み、橙褐色を呈する。3は丸頭状に肥厚する口唇部が開く器形を呈し、口唇部下から細くてやや間隔を開けた燃糸Rを施文する。口唇部整形は燃糸文施文後、全面に施される。石英、長石類の砂粒を多く含むが、堅緻な土器で、暗赤褐色を呈する。4は器壁が厚く、若干肥厚する口唇部が立つ器形を呈する。燃糸文をやや間隔を開けて施文し、原体は燃りが緩く節が延びたRである。

5は板状でやや丸みを帯びた角頭状口唇部がやや開く器形を呈し、口唇部下に無文帯を設けて条線文を施文する。条線文土器は絡条条線文で、口唇部下から施文するが、施文後口唇部を整形するため、口縁部にも磨消の無文帯が形成される。内外面とも良く研磨されており、胎土に白色粒子を多く含むが緻密な土器で、明橙褐色を呈する。6はやや肥厚する角頭状の口唇部が開く器形を呈し、口唇部下から条線文を施文する。口唇部整形は条線文施文後行われ、条線文は絡条条線文である。胎土に暗赤褐色の粒子を含み、橙褐色を呈する。7は肥厚する丸頭状口唇部が開く器形を呈する無文土器で、胎土に細砂粒を多く含み、赤褐色を呈する堅緻な土器である。8は丸頭状口唇部が立つ器形の小型の土器で、頭部に若干の窪み帯が巡る。

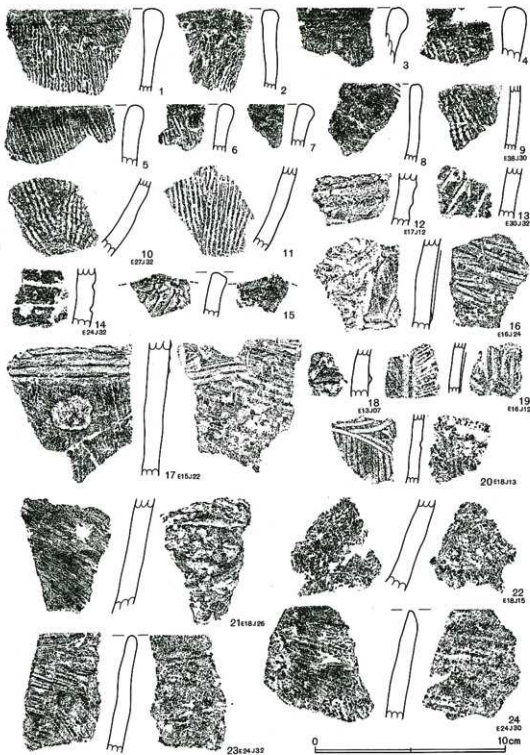
9は胴部破片で、縄文RLを施文する。純粋な胎土に近く、明赤褐色を呈する緻密で堅緻な土器である。10、11は底部付近の破片で、10はやや太い燃糸Rを、11は細密なRを施文する。

第2類土器 (12～14)

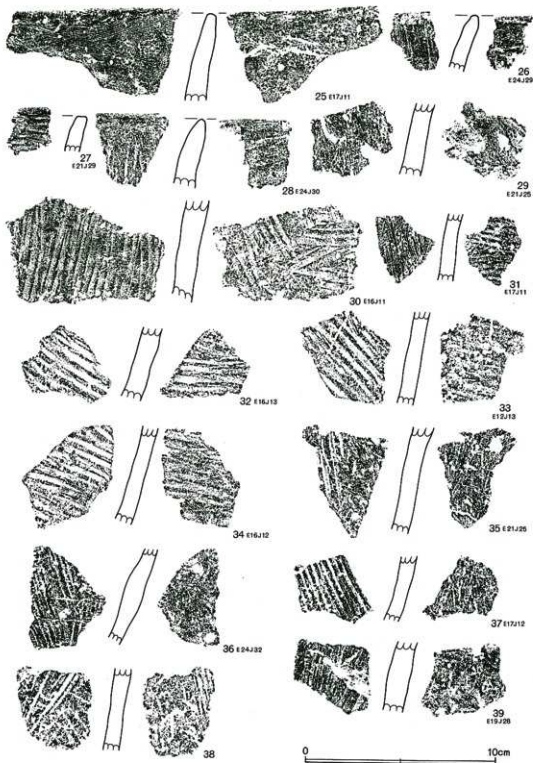
沈線文系土器群を一括する。12は砂粒を多く含むざらついた器面に凹線状の沈線文を施文するもので、13、14は細い単沈線文を斜位、横位に施文するものである。いずれも細砂粒を多く含むが堅緻で、赤褐色を呈する。

第3類土器 (15～46)

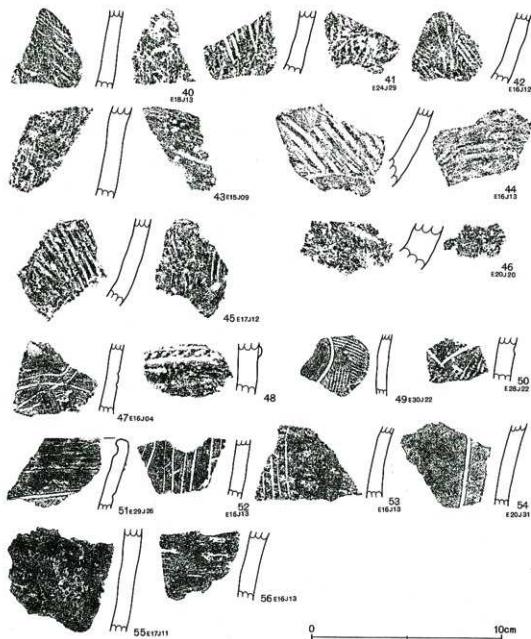
条痕文系土器群を一括する。15～18は細隆起線文のみを施文する土器群を一括する。15は口縁部



第260図 グリッド出土土器 (1)



第261図 グリッド出土土器 (2)



第262図 グリッド出土土器 (3)

破片で、口縁部に斜位に垂下する細隆起線文を等間隔に施文する。繊維を若干含み、橙褐色を呈する。16～18は胴部破片で、16は横位の細隆起線文で文様帯を区画し、それに向けて斜位の細隆起線文を垂下させる。17、18は横位の細隆起線文を配している。いずれも繊維を少量含み、擦痕状の条痕文を施文する。19は細隆起線文の縦位区画内に、集合の細沈線文を充填施文するものである。表面は条痕文が磨消されるが、裏面には明瞭に残る。20は沈線文のみで区画及び充填文を施文するも

四反歩遺跡北地区

のである。浅い沈線文であるが、区画内には曲線のモチーフを施文する。繊維は少ないが、砂粒を多く含む。

21～46は条痕文のみを施文する土器である。21、22は器面整形に擦痕文を施すものである。繊維を殆ど含まず、白色粒子、片岩類の砂粒、小礫を多く含む。23～28は内外面に条痕文を施文する口縁部破片で、23は丸頭状を呈し、24は外削状の整形が施される。25～27は角頭状口唇を呈し、28は先細りの口唇部が開く器形を呈する。29～43は胴部破片で、44～46は底部付近の破片である。条痕文は比較的太く、明瞭に施文するものが多く、繊維はあまり含まない傾向にある。

第II群土器 (第262図47、48)

前期の土器群を一括する。2点出土している。47は半截竹管の平行沈線文でモチーフを描出する、沈線文系の諸磯b式土器である。48は刻みを施す浮線文を持つ諸磯b式土器である。

第III群土器 (第262図49～56)

後期の土器群を一括する。いずれも堀之内II式である。49、50は沈線文の曲線文区画内に磨消縄文LRを施文する。51は口縁部破片で、口縁部の隆帯文が剥落している。52～54は深鉢形土器の胴部破片で、縦位の多条沈線文を施文する。55、56は無文の胴部破片である。

(2) 出土石器 (第263図1～第265図35)

石鏃 (1～4)

1、2、4は黒曜石製、3はチャート製で、1が平基、4が凹基の石鏃である。3、4は先端部を欠損し、2は未製品である。

搔器 (5～7)

5は頁岩製の剝片の1辺に、細かな調整剝離を施している。6は自然面を残す縦長剝片を横に使用するもので、刃部に粗い剝離を施す。7は円刃を呈し、打面を残す。

打製石斧 (8～17)

8は両面に大きな剝離痕を残す分銅形石斧であり、後期の所産と思われる。9、10は短冊形で厚身の石斧であり、10は刃部を欠損する。11～17は片面に自然面を多く残す石斧で、調整剝離は礫表側から行われる部分が多い。早期の条痕文期に特徴的な石器である。

礫器 (18～25)

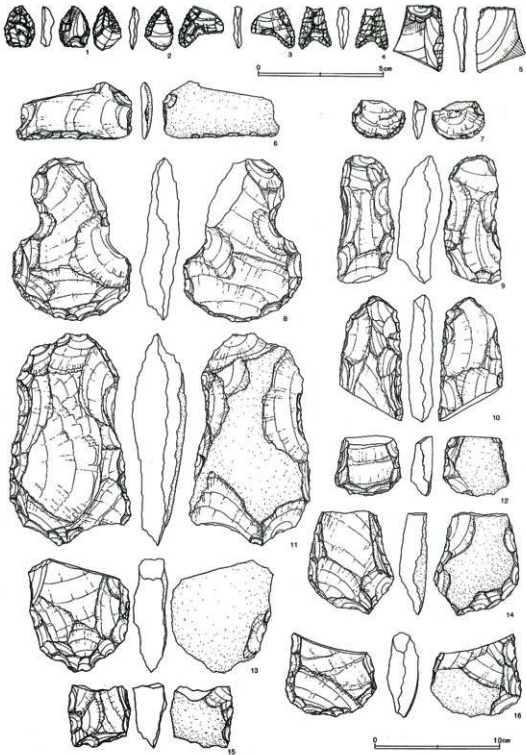
いずれも刃部の厚い礫器で、18～21は周縁部から剝離を施す石斧状を呈し、礫斧と呼ばれるものである。22～26は礫の端部に片面から粗い調整剝離を施すもので、24は1側縁、22、23は上下の2側縁、25、26は3側縁から剝離を施す。

磨石 (27～31)

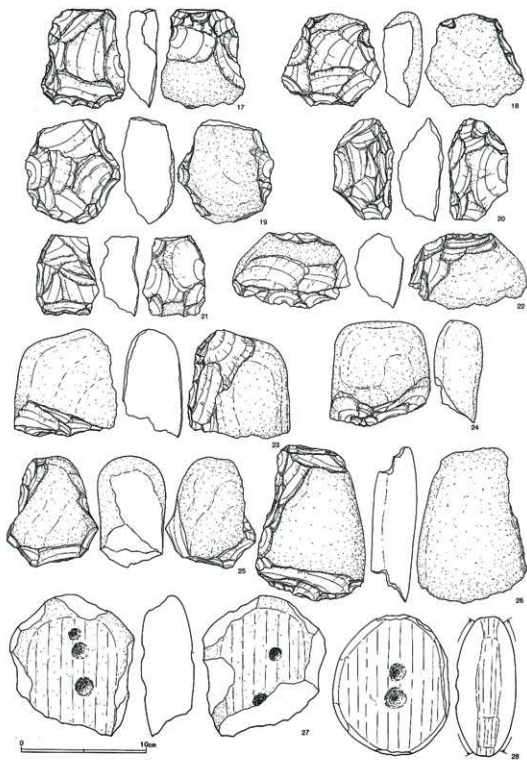
27～29は両面を使用し、窪みを持つものである。30、31は片面のみ使用される。

スタンプ形石器 (32～35)

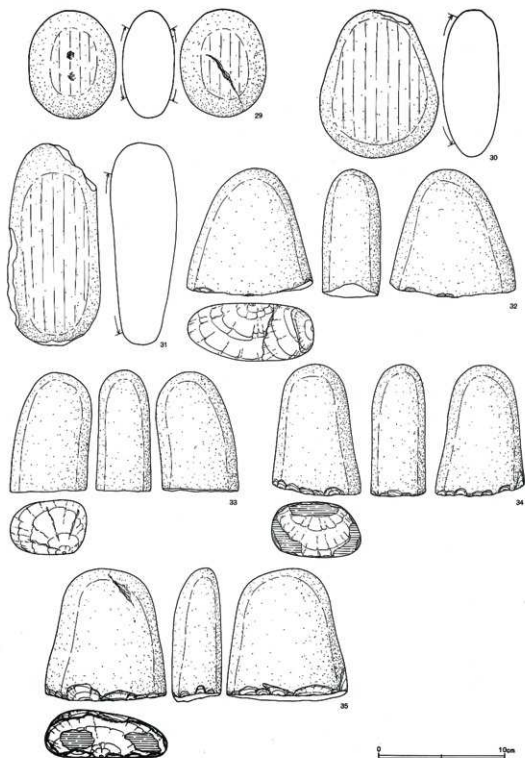
側縁部に調整加工を施すものではなく、34、35に底面からの細かい剝離痕がみられ、底面に明瞭な使用痕がみられる。32の底面は2方向からの調整剝離を施す。



第263図 グリッド出土石器 (1)



第264図 グリッド出土石器 (2)



第265図 グリッド出土石器 (3)

第1表 石器一覧表

図版番号	器 種	出土地点	石 質	長 さ	幅	厚 さ	重 さ
7-2	石 槍		フォルンフェルス	171.0	20.0	12.0	44.9
7-3	石 槍	F2J0	フォルンフェルス	54.0	20.0	9.0	12.5
7-4	石 槍		チャート	35.0	17.0	8.0	6.3
7-5	石 槍		フォルンフェルス	52.0	20.0	7.0	6.0
7-6	尖 頭 鏃		チャート	36.0	14.0	6.0	3.2
8-7	有舌尖頭鏃		チャート	27.0	12.0	4.0	1.0
8-8	有舌尖頭器		安山岩	31.0	15.0	4.0	1.6
8-9	石 槍		安山岩	102.0	33.0	12.0	34.2
8-10	打製石斧	F12J24	砂	9.1	4.0	29.0	108.0
13-1	鏃 器	SX1-7	フォルンフェルス	71.0	89.0	40.0	330.2
13-2	鏃 器	SX1-11	粘板岩	107.0	74.0	29.0	35.7
13-3	磨 石	SX1-33	閃緑岩	91.0	84.0	48.0	500.4
13-4	削 片	SX1-28	チャート	84.0	46.0	21.0	41.9
19-1	石 鏃	SX2-829	黒曜石	15.0	14.0	2.0	0.3
19-2	石 鏃	SX2-611	チャート	17.0	14.0	3.0	0.4
19-3	石 鏃	SX2-812	黒曜石	21.0	13.0	5.0	0.9
19-4	石 核	SX2-359	チャート	46.0	30.0	20.0	24.6
19-5	打製石斧	SX2-349	フォルンフェルス	89.0	68.0	31.0	204.6
19-6	局部磨製石斧	SX2-346	フォルンフェルス	97.0	51.0	28.0	183.2
19-7	スタンプ形石器	SX2-96	砂 岩	89.0	54.0	31.0	181.1
19-8	スタンプ形石器	SX2-345	閃緑岩	114.0	81.0	41.0	568.9
19-9	磨 石	SX2-380	閃緑岩	130.0	95.0	48.0	808.5
19-10	砥 石	SX2-177	閃緑岩	165.0	66.0	33.0	475.2
20-5	スタンプ形石器	PIT2-15	閃緑岩	67.0	46.0	38.0	547.2
20-6	磨 石	PIT2-12	閃緑岩	52.0	54.0	42.0	407.9
20-7	磨 石	PIT1-6	砂 岩	46.0	24.0	16.0	47.2
20-8	スタンプ形石器	PIT2-13	閃緑岩	78.0	55.0	35.0	491.5
27-1	石 鏃	SX5-83	チャート	18.0	10.0	2.0	0.4
27-2	鏃 器	SX5-24	フォルンフェルス	83.0	68.0	42.0	198.7
31-1	磨 石	SX6-S-2	閃緑岩	82.0	70.0	35.0	284.6
31-2	磨 石	SX6-フタド	閃緑岩	80.0	45.0	20.0	60.7
35-1	スタンプ形石器	SX7-93	砂 岩	107.0	67.0	48.0	353.1
35-2	スタンプ形石器	SX7-1	閃緑岩	85.0	66.0	46.0	379.3
35-3	磨 石	SX7-86	閃緑岩	104.0	90.0	47.0	600.9
35-4	磨 石	SX7-67	閃緑岩	90.0	70.0	41.0	334.7
35-5	磨 石	SX7-88	閃緑岩	91.0	80.0	50.0	461.5
35-6	磨 石	SX7-3	閃緑岩	105.0	81.0	45.0	539.7
35-7	石 皿	SX11-70	閃緑岩	279.0	214.0	50.0	4,400.0
36-8	石 皿	SX7-74	閃緑岩	249.0	175.0	60.0	4,340.0
42-2	掻 撈	SX8-125	粘板岩	66.0	59.0	22.0	70.7
42-3	スタンプ形石器	SX8-25	閃緑岩	87.0	47.0	46.0	331.1
42-4	鏃 器	SX8-19	フォルンフェルス	60.0	83.0	37.0	271.0
42-5	鏃 器	SX8-35	フォルンフェルス	82.0	108.0	50.0	578.9
43-6	磨 石	SX8-54	閃緑岩	86.0	60.0	34.0	262.6
43-7	磨 石	SX8-24	閃緑岩	105.0	71.0	40.0	345.6
43-8	石 皿	SX8-44	閃緑岩	152.0	118.0	46.0	1,260.5
43-9	石 皿	SX8-38	閃緑岩	82.0	167.0	32.0	505.5
43-10	石 皿	SX11-34	砂 岩	241.0	176.0	58.0	2,950.0
43-11	石 皿	SX11-80	閃緑岩	230.0	133.0	42.0	2,080.0
44-12	石 皿	SX8-140	砂 岩	307.0	253.0	111.0	10,500.0
63-1	石 鏃	SK37-11	チャート	27.0	15.0	5.0	2.1
63-2	石 鏃	SK37-19	黒曜石	17.0	11.0	2.0	0.4
63-3	打製石斧	SK24-11	フォルンフェルス	157.0	104.0	33.0	581.8
63-4	打製石斧	SK31-3	フォルンフェルス	77.0	47.0	23.0	101.9
63-5	打製石斧	SK21	フォルンフェルス	83.0	46.0	18.0	83.7
63-6	鏃 器	SK33	砂 岩	70.0	86.0	41.0	318.2
63-7	打製石斧	SK9-1	砂 岩	53.0	58.0	23.0	96.0

図版番号	器種	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重さ
63-8	打製石斧	SK31	フォルンフェルス	39.0	50.0	21.0	58.6
63-9	鏃	SK24	フォルンフェルス	97.0	68.0	49.0	377.5
63-10	鏃	SK32	フォルンフェルス	76.0	67.0	22.0	147.4
63-11	鏃	SK27	フォルンフェルス	52.0	53.0	25.0	104.4
63-12	鏃	SK24	フォルンフェルス	86.0	102.0	54.0	588.5
63-13	鏃	SK26-10	粘板岩	46.0	71.0	18.0	56.4
63-14	磨石	SK30	閃緑岩	59.0	73.0	39.0	231.1
64-15	磨石	SK17-6	閃緑岩	88.0	76.0	46.0	426.3
64-16	磨石	SK1-39	砂岩	90.0	63.0	40.0	242.4
64-17	スタンプ形石器	SK33-1	閃緑岩	104.0	73.0	51.0	628.8
64-18	磨石	SK26-15	閃緑岩	95.0	79.0	32.0	361.1
64-19	敲石	SK1-38	砂岩	73.0	32.0	25.0	95.8
64-20	スタンプ形石器	SK24	閃緑岩	129.0	78.0	62.0	987.5
70-1	敲石	SJS-8	緑泥片岩	112.0	36.0	24.0	163.6
70-2	打製石斧	SJS-42	フォルンフェルス	91.0	75.0	16.0	121.6
70-3	打製石斧	SJS-14	フォルンフェルス	36.0	60.0	8.0	26.8
70-4	打製石斧	SJS-68	凝灰岩	154.0	66.0	29.0	341.6
70-5	敲石	SJS-26	砂岩	96.0	31.0	29.0	139.8
70-6	砥石	SJS-31	砂岩	40.0	45.0	18.0	41.1
70-7	磨石	SJS-22	閃緑岩	87.0	75.0	46.0	370.3
74-1	磨製石斧	SJ6-53	凝灰岩	42.0	29.0	25.0	32.7
74-2	磨製石斧	SJ6-26	緑泥片岩	85.0	69.0	24.0	108.6
74-3	打製石斧	SJ6-9	フォルンフェルス	96.0	57.0	15.0	89.2
74-4	打製石斧	SJ6	フォルンフェルス	138.0	59.0	25.0	145.0
74-5	打製石斧	SJ6-34	フォルンフェルス	56.0	56.0	15.0	58.4
74-6	打製石斧	SJ6-80	凝灰岩	66.0	40.0	24.0	54.4
74-7	鏃	SJ6	フォルンフェルス	60.0	69.0	19.0	69.3
74-8	敲石	SJ6-40	緑泥片岩	110.0	32.0	21.0	103.6
74-9	砥石	SJ6-76	砂岩	42.0	63.0	14.0	47.3
74-10	スタンプ形石器	SJ6	砂岩	102.0	77.0	39.0	407.1
74-11	磨石	SJ6-83	砂岩	136.0	70.0	40.0	549.3
74-12	磨石	SJ6-1	砂岩	134.0	93.0	73.0	1,197.4
74-13	磨石	SJ6-8	閃緑岩	118.0	99.0	39.0	529.6
77-1	鏃	SJ7	フォルンフェルス	46.0	86.0	10.0	39.1
77-2	砥石	SJ7	砂岩	70.0	43.0	17.0	75.1
77-3	磨石	SJ7-1	砂岩	93.0	68.0	32.0	334.3
77-4	磨石	SJ7	砂岩	93.0	65.0	47.0	342.0
77-5	磨石	SJ7-14	閃緑岩	93.0	123.0	45.0	615.1
85-1	磨石	SJS-2	砂岩	97.0	74.0	52.0	674.2
85-2	石皿	SJ3-1	緑泥片岩	337.0	301.0	51.0	3,960.0
90-1	磨製石斧	SJ4-4	安山岩	152.0	65.0	45.0	663.2
90-2	砥石	SJ4-6	砂岩	62.0	51.0	12.0	51.8
152-1	石鏃	F1J1-1546	チャート	10.0	9.0	3.0	0.1
152-2	石鏃	F4J0-619	チャート	11.0	11.0	3.0	0.2
152-3	石鏃	F3J2-598	チャート	13.0	11.0	4.0	0.2
152-4	石鏃	F3J1-1545	チャート	11.0	11.0	4.0	0.3
152-5	石鏃	F3J0-855	チャート	11.0	11.0	4.0	0.3
152-6	石鏃	F3J0-312	チャート	14.0	12.0	4.0	0.4
152-7	石鏃	F0J1-420	黒曜石	25.0	17.0	7.0	0.5
152-8	石鏃	F2J1-1791	チャート	17.0	14.0	5.0	0.9
152-9	石鏃	F1J1-739	黒曜石	23.0	12.0	7.0	1.3
152-10	石鏃	F3J2-448	チャート	15.0	14.0	5.0	0.5
152-11	石鏃	F2J1-2768	チャート	12.0	14.0	4.0	0.5
152-12	石鏃	F3J2-206	チャート	23.0	20.0	4.0	1.0
152-13	石鏃	F3J0-781	チャート	24.0	13.0	5.0	1.0
152-14	石鏃	F2J1-1493	安山岩	21.0	17.0	6.0	1.5
152-15	石鏃	F3J0-670	安山岩	18.0	15.0	5.0	0.9

図版番号	器種	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重さ
152-16	石 鏃	F2J1-1767	黒曜石	17.0	16.0	4.0	0.6
152-17	石 鏃	F1J1-2568	チャート	20.0	16.0	5.0	0.9
152-18	石 鏃	F3J0-45	黒曜石	15.0	16.0	4.0	0.5
152-19	石 鏃	F2J2-277	チャート	16.0	21.0	4.0	0.5
152-20	石 鏃	F2J2-251	チャート	30.0	16.0	5.0	1.6
152-21	石 鏃	F2J2-424	チャート	33.0	17.0	5.0	1.5
152-22	石 鏃	F1J1-2155	黒曜石	19.0	7.0	5.0	0.7
152-23	石 鏃	F4J2-193	チャート	22.0	15.0	3.0	0.9
152-24	石 鏃	F1J1-2693	チャート	22.0	11.0	6.0	0.7
152-25	石 鏃	F3J1-1078	チャート	18.0	15.0	5.0	0.7
152-26	石 鏃	F4I4-73	安山岩	13.0	16.0	3.0	0.6
152-27	石 鏃	F2J2-1442	チャート	19.0	21.0	7.0	1.5
152-28	石 鏃	F2J2-232	チャート	20.0	17.0	6.0	1.4
152-29	石 鏃	F2J2-1207	チャート	18.0	14.0	4.0	1.1
152-30	石 槍	F2J0-161	粘板岩	29.0	19.0	4.0	1.1
153-1	掘器	F3J0-1044	凝灰岩	83.0	40.0	18.0	58.2
153-2	掘器	F0J1-329	凝灰岩	61.0	46.0	17.0	41.9
153-3	掘器	G0I4-147	安山岩	69.0	29.0	14.0	18.6
153-4	掘器	F1J1-155	フォルンフェルス	50.0	76.0	14.0	50.8
153-5	掘器	F2J1-1116	チャート	32.0	41.0	11.0	14.6
153-6	掘器	F1J1-1672	チャート	31.0	34.0	9.0	7.1
153-7	掘器	F2J2-283	フォルンフェルス	72.0	49.0	13.0	64.5
153-8	掘器	F1J1-1950	チャート	41.0	54.0	14.0	23.4
153-9	掘器	F1J2-95	粘板岩	47.0	70.0	10.0	30.3
153-10	掘器	F3J0-1569	チャート	51.0	67.0	24.0	53.2
153-11	掘器	F4J1-906	フォルンフェルス	35.0	57.0	10.0	19.8
153-12	掘器	F1J1-2185	フォルンフェルス	47.0	50.0	8.0	24.2
153-13	掘器	F4J0-1159	フォルンフェルス	41.0	49.0	10.0	28.0
154-1	掘器	F2J1-2743	結晶片岩	44.0	46.0	9.0	27.8
154-2	掘器	F1J1-1838	フォルンフェルス	45.0	64.0	18.0	44.7
154-3	掘器	F0J0-49	フォルンフェルス	39.0	52.0	16.0	35.9
154-4	掘器	F3J1-1217	フォルンフェルス	42.0	58.0	16.0	47.7
154-5	掘器	F2J1-2583	フォルンフェルス	42.0	56.0	14.0	32.8
154-6	掘器	F2J2-529	フォルンフェルス	60.0	56.0	16.0	68.4
154-7	掘器	F3J0-1756	フォルンフェルス	46.0	64.0	13.0	58.1
154-8	掘器	F2J1-60	結晶片岩	32.0	59.0	8.0	14.9
154-9	掘器	F2J1-2628	フォルンフェルス	25.0	58.0	9.0	12.9
154-10	掘器	F3J1-388	フォルンフェルス	67.0	64.0	20.0	101.8
154-11	掘器	F1J2-68	粘板岩	44.0	88.0	21.0	83.1
154-12	掘器	F4J2-246	フォルンフェルス	56.0	73.0	19.0	80.4
154-13	掘器	F2I4-42	フォルンフェルス	60.0	62.0	23.0	75.8
155-1	掘器	F3J1-1578	フォルンフェルス	65.0	86.0	11.0	63.1
155-2	掘器	F3J1-984	フォルンフェルス	69.0	82.0	22.0	136.6
155-3	掘器	F1J1-1821	フォルンフェルス	58.0	79.0	18.0	96.2
155-4	掘器	F2J1-25	フォルンフェルス	50.0	90.0	11.0	79.8
155-5	掘器	F4J2-643	フォルンフェルス	53.0	92.0	18.0	69.9
155-6	掘器	F4J0-1768	フォルンフェルス	57.0	97.0	20.0	116.7
156-1	掘器	F2J2-394	粘板岩	52.0	98.0	18.0	89.0
156-2	掘器	F3I1-495	フォルンフェルス	60.0	104.0	17.0	152.4
156-3	掘器	F3I3-24	フォルンフェルス	52.0	115.0	11.0	81.7
156-4	掘器	F2J1-1610	安山岩	60.0	88.0	22.0	131.3
156-6	掘器	F2J1-1336	安山岩	55.0	68.0	13.0	54.0
157-1	石 鏢	F3J0-1134	砂岩	50.0	40.0	15.0	35.9
157-2	石 鏢	F3J0-1092	砂岩	45.0	33.0	12.0	19.6
157-3	石 鏢	F3J0-1830	安山岩	56.0	40.0	8.0	23.9
157-4	石 鏢	F0J2-228	凝灰岩	53.0	42.0	9.0	27.8
157-5	石 鏢	F2J0-452	砂岩	152.0	103.0	44.0	853.7

図版番号	器種	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重さ
157-6	有溝砥石		安山岩	69.0	60.0	13.0	49.1
157-7	有溝砥石	F3J1-1006	安山岩	72.0	61.0	20.0	91.1
158-1	有溝砥石	F3J1-1631	安山岩	95.0	61.0	16.0	92.2
158-2	有溝砥石		安山岩	52.0	49.0	9.0	20.6
158-3	有溝砥石	F2J2-825	安山岩	52.0	25.0	10.0	26.5
158-4	有溝砥石		砂岩	57.0	40.0	24.0	16.0
158-5	有溝砥石	F4I4-44	安山岩	57.0	40.0	24.0	54.2
158-6	有溝砥石	F2J1-1938	砂岩	48.0	51.0	12.0	28.7
158-7	有溝砥石	F1J1-734	安山岩	92.0	66.0	19.0	140.4
158-8	有溝砥石	F0J1-370	安山岩	78.0	52.0	14.0	69.8
158-9	有溝砥石	F3J0-1243	安山岩	60.0	52.0	9.0	48.8
158-10	有溝砥石	F3J1-403	安山岩	53.0	73.0	11.0	57.9
160-1	局部磨製石斧		フォルンフェルス	84.0	40.0	12.0	57.3
160-2	局部磨製石斧	F3J0-441	フォルンフェルス	76.0	40.0	11.0	59.5
160-3	局部磨製石斧	F4J1-1158	粘板岩	87.0	44.0	11.0	95.2
160-4	局部磨製石斧	F3J0-1167	フォルンフェルス	86.0	44.0	17.0	105.4
160-5	局部磨製石斧	F3I4-162	フォルンフェルス	78.0	30.0	15.0	46.1
160-6	局部磨製石斧	F3J0-1691	凝灰岩	90.0	23.0	14.0	41.4
160-7	局部磨製石斧	F3J1-902	安山岩	70.0	30.0	16.0	59.4
160-8	局部磨製石斧	F4J1-466	粘板岩	57.0	35.0	10.0	36.9
160-9	局部磨製石斧	F3J2	結晶片岩	36.0	36.0	13.0	63.6
161-1	局部磨製石斧	F2J1	砂岩	59.0	38.0	11.0	34.1
161-2	局部磨製石斧	F3J0-1049	凝灰岩	67.0	61.0	29.0	155.0
161-3	磨製石斧	F4J0-848	結晶片岩	89.0	36.0	30.0	116.5
161-4	打製石斧	F3J0-584	フォルンフェルス	131.0	42.0	31.0	176.3
161-5	打製石斧	F3J0-1512	フォルンフェルス	68.0	35.0	13.0	49.0
161-6	打製石斧	F24J18	フォルンフェルス	82.0	34.0	12.0	43.1
161-7	打製石斧	F3J0-1886	フォルンフェルス	50.0	33.0	14.0	40.9
161-8	打製石斧	F2I4-78	粘板岩	119.0	50.0	18.0	148.7
162-1	打製石斧	G0J2-66	粘板岩	119.0	47.0	30.0	235.2
162-2	打製石斧	F3J1-1178	フォルンフェルス	107.0	53.0	23.0	196.6
162-3	打製石斧	F3J0-1860	フォルンフェルス	110.0	47.0	22.0	171.6
162-4	打製石斧	G0J1-534	フォルンフェルス	114.0	46.0	24.0	167.8
162-5	打製石斧	F3J0-1857	フォルンフェルス	90.0	38.0	18.0	98.7
162-6	打製石斧	F3J0-1875	粘板岩	141.0	61.0	32.0	325.9
163-1	打製石斧	F3J1-1878	砂岩	157.0	61.0	23.0	275.1
163-2	打製石斧	F2J1-2852	フォルンフェルス	83.0	55.0	17.0	121.8
163-3	打製石斧	F0J2-139	安山岩	60.0	47.0	16.0	45.1
163-4	打製石斧	F3I4-136	フォルンフェルス	76.0	51.0	25.0	122.4
163-5	打製石斧	F1J1-1302	結晶片岩	102.0	54.0	27.0	114.9
163-6	打製石斧	F4I4-278	フォルンフェルス	105.0	61.0	34.0	235.1
163-7	打製石斧	F1J1-2348	フォルンフェルス	45.0	63.0	19.0	78.2
164-1	打製石斧	F0J1-74	フォルンフェルス	75.0	73.0	22.0	132.3
164-2	打製石斧	F2I3-9	フォルンフェルス	80.0	66.0	33.0	177.7
164-3	打製石斧	F2I3-25	フォルンフェルス	116.0	73.0	29.0	191.4
164-4	打製石斧	F1J1-1557	フォルンフェルス	57.0	61.0	17.0	73.9
165-1	礮器	G0J1-752	フォルンフェルス	64.0	75.0	27.0	156.3
165-2	礮器	F1J1-1496	安山岩	84.0	61.0	44.0	276.7
165-3	礮器	F3J2-662	フォルンフェルス	85.0	104.0	30.0	356.4
165-4	礮器	F3J2-495	スフォルンフェルス	80.0	62.0	27.0	139.1
165-5	礮器	F1J1-808	フォルンフェルス	96.0	79.0	36.0	332.5
165-6	礮器	F2J2-736	フォルンフェルス	84.0	67.0	34.0	216.9
165-7	礮器	F1J1-100	砂岩	68.0	65.0	36.0	180.2
165-8	礮器	F0J1-374	フォルンフェルス	81.0	66.0	25.0	167.7
165-9	礮器	G0J1-312	フォルンフェルス	91.0	89.0	45.0	501.4
165-10	礮器	F0J1-448	フォルンフェルス	77.0	74.0	20.0	153.2
165-11	礮器	F4J0-1952	フォルンフェルス	79.0	98.0	43.0	411.6

図版番号	器種	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重さ
165-12	雑器	F1J1-2721	フォルンフェルス	74.0	57.0	27.0	141.2
166-1	雑器	F2J1-2823	フォルンフェルス	80.0	90.0	30.0	234.1
166-2	雑器	F2J1-2502	フォルンフェルス	77.0	68.0	24.0	155.7
166-3	雑器	F4J1-574	フォルンフェルス	66.0	77.0	24.0	142.9
166-4	雑器	F1J0-263	フォルンフェルス	57.0	78.0	33.0	201.3
166-5	雑器	F4J0-1978	フォルンフェルス	94.0	136.0	27.0	387.9
166-6	雑器	F2J1-1807	砂岩	63.0	115.0	29.0	227.4
166-7	雑器	F4J1-708	フォルンフェルス	123.0	88.0	31.0	390.6
166-8	雑器	F1J1-1365	フォルンフェルス	73.0	46.0	34.0	147.8
166-9	雑器	F3J1-5	フォルンフェルス	70.0	59.0	27.0	146.7
166-10	雑器	F0J1-359	フォルンフェルス	91.0	83.0	32.0	442.7
166-11	雑器	F0J1-410	フォルンフェルス	93.0	62.0	30.0	275.5
167-1	雑器	F4J4-393	フォルンフェルス	142.0	36.0	88.0	585.7
167-2	雑器	F2J2-389	フォルンフェルス	102.0	65.0	42.0	451.9
167-3	雑器	F3J0-1879	フォルンフェルス	101.0	74.0	67.0	436.4
167-4	雑器	F3J0-1015	フォルンフェルス	98.0	78.0	47.0	440.4
167-5	雑器	F2J1-2359	フォルンフェルス	55.0	80.0	29.0	184.9
167-6	雑器	F3J1-963	フォルンフェルス	110.0	81.0	49.0	542.2
167-7	雑器	F4J0-260	フォルンフェルス	91.0	89.0	33.0	396.0
167-8	雑器	G0J1-632	フォルンフェルス	73.0	76.0	22.0	196.6
167-9	雑器	F4J0-1846	フォルンフェルス	103.0	121.0	43.0	737.3
167-10	雑器	F3J0-408	砂岩	70.0	89.0	25.0	234.6
168-1	雑器	F3I4-59	フォルンフェルス	96.0	121.0	46.0	717.8
168-2	雑器	G0J1-399	フォルンフェルス	90.0	100.0	51.0	647.3
168-3	雑器	F0J0-44	フォルンフェルス	101.0	101.0	35.0	485.4
168-4	雑器	F4J0-151	フォルンフェルス	91.0	103.0	32.0	431.2
168-5	雑器	F4J1-1137	フォルンフェルス	88.0	102.0	35.0	406.2
168-6	雑器	F3J1-460	フォルンフェルス	86.0	93.0	27.0	314.1
168-7	雑器	F3I4-47	フォルンフェルス	89.0	85.0	30.0	341.9
168-8	雑器	F3J1-118	フォルンフェルス	70.0	104.0	37.0	369.1
169-1	雑器	F3J2-831	フォルンフェルス	84.0	84.0	34.0	312.7
169-2	雑器	F4I4-34	フォルンフェルス	75.0	78.0	37.0	329.7
169-3	雑器	F4J1-769	フォルンフェルス	68.0	82.0	34.0	223.8
169-4	雑器	F0J1-166	フォルンフェルス	92.0	71.0	50.0	464.5
169-5	雑器	F2J1-1551	フォルンフェルス	81.0	88.0	39.0	289.9
169-6	雑器	F4J0-468	フォルンフェルス	59.0	70.0	26.0	161.7
169-7	雑器	F1J1-2144	フォルンフェルス	91.0	86.0	41.0	629.0
169-8	雑器	F2J1-2831	フォルンフェルス	85.0	66.0	33.0	299.4
169-9	雑器	F4J0-1587	フォルンフェルス	87.0	101.0	53.0	550.8
169-10	雑器	F3J1-92	フォルンフェルス	109.0	83.0	57.0	751.2
169-11	雑器	F4J0-1326	フォルンフェルス	104.0	91.0	55.0	827.0
169-12	雑器	F2J2-1602	フォルンフェルス	76.0	105.0	45.0	513.9
170-1	雑器	F3J2-714	砂岩	108.0	39.0	26.0	154.8
170-2	雑器	F3J0-880	砂岩	108.0	43.0	38.0	274.1
170-3	雑器	G0J0-337	砂岩	116.0	48.0	30.0	277.1
170-4	雑器	F2J1-1377	砂岩	117.0	35.0	31.0	187.1
170-5	雑器	F3J0-1227	砂岩	128.0	41.0	28.0	212.9
170-6	雑器	F3J2-871	結晶片岩	139.0	45.0	31.0	238.9
170-7	雑器	G0J0-190	閃緑岩	128.0	56.0	38.0	419.3
170-8	雑器	F3J1-366	砂岩	115.0	49.0	29.0	196.4
170-9	雑器	F4J0-2014	砂岩	154.0	54.0	31.0	390.8
170-10	雑器	F4J1-362	砂岩	162.0	59.0	30.0	405.6
170-11	雑器	F2J2-562	砂岩	179.0	45.0	24.0	287.5
170-12	雑器	F4J3-2	砂岩	192.0	60.0	30.0	535.1
170-13	雑器	F1J1-67	結晶片岩	158.0	31.0	21.0	159.4
170-14	雑器	F3J2-921	砂岩	151.0	49.0	39.0	371.6
170-15	雑器	F4I4-286	砂岩	136.0	54.0	41.0	370.7

図版番号	器種	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重さ
172-1	スタンプ形石器	F3J2-899	砂岩	129.0	77.0	42.0	535.1
172-2	スタンプ形石器	F3I4-185	砂岩	118.0	80.0	54.0	572.6
172-3	スタンプ形石器	F3J0-149	砂岩	117.0	95.0	48.0	668.3
172-4	スタンプ形石器	F4J0-387	砂岩	113.0	95.0	41.0	592.8
173-1	スタンプ形石器	G0J1-1625	安山岩	130.0	90.0	50.0	799.7
173-2	スタンプ形石器	G0J0-272	凝灰岩	117.0	92.0	48.0	541.4
173-3	スタンプ形石器	G0J0-446	砂岩	129.0	105.0	58.0	916.7
173-4	スタンプ形石器	F2J1-1824	閃緑岩	103.0	87.0	44.0	542.4
174-1	スタンプ形石器	F4J0-1867	結晶片岩	146.0	76.0	61.0	1,072.8
174-2	スタンプ形石器	F3J1-553	閃緑岩	138.0	58.0	87.0	705.2
174-3	スタンプ形石器	F3J1-1887	フォルフエルス	106.0	72.0	67.0	565.8
174-4	スタンプ形石器	F3I4-140	砂岩	137.0	74.0	55.0	607.9
175-1	スタンプ形石器	F3J2-250	閃緑岩	127.0	92.0	63.0	849.9
175-2	スタンプ形石器	F2J1-1910	閃緑岩	132.0	80.0	52.0	704.9
175-3	スタンプ形石器	G0J1-556	閃緑岩	130.0	93.0	58.0	968.3
175-4	スタンプ形石器	F0J1-371	閃緑岩	81.0	71.0	54.0	451.4
176-1	スタンプ形石器	F0J1-378	砂岩	105.0	84.0	55.0	539.3
176-2	スタンプ形石器	F4J2-114	砂岩	74.0	40.0	35.0	137.9
176-3	スタンプ形石器	G0J2-19	砂岩	112.0	81.0	42.0	436.9
176-4	スタンプ形石器	F2J0-76	閃緑岩	105.0	100.0	50.0	721.0
176-5	スタンプ形石器	F4J0-4043	閃緑岩	133.0	100.0	59.0	1,113.8
177-1	スタンプ形石器	F3J0-1192	閃緑岩	105.0	85.0	49.0	619.2
177-2	スタンプ形石器	F3J0-1531	閃緑岩	119.0	72.0	54.0	608.1
177-3	スタンプ形石器	F3J1-1624	砂岩	115.0	63.0	50.0	366.6
177-4	スタンプ形石器	F4I4-47	砂岩	113.0	97.0	48.0	546.3
177-5	スタンプ形石器	F3I4-135	砂岩	86.0	91.0	42.0	374.2
178-1	スタンプ形石器	F3J1-962	閃緑岩	115.0	81.0	55.0	565.1
178-2	スタンプ形石器	F2J1-2643	閃緑岩	123.0	92.0	40.0	690.5
178-3	スタンプ形石器	F3J2-852	砂岩	110.0	77.0	67.0	677.3
178-4	スタンプ形石器	F4J0-1807	閃緑岩	106.0	88.0	52.0	637.8
179-1	スタンプ形石器	F3J1-983	閃緑岩	130.0	73.0	49.0	573.1
179-2	スタンプ形石器	G0J2-7	閃緑岩	126.0	74.0	53.0	620.5
179-3	スタンプ形石器	F0J1-45	閃緑岩	112.0	60.0	41.0	387.8
179-4	スタンプ形石器	F2J1-1487	砂岩	88.0	58.0	39.0	238.3
179-5	スタンプ形石器	F0J1-434	砂岩	108.0	50.0	37.0	292.7
179-6	スタンプ形石器	F4I4-275	閃緑岩	98.0	63.0	40.0	347.8
179-7	スタンプ形石器	F3I1-77	砂岩	102.0	71.0	56.0	579.6
180-1	スタンプ形石器	F3J1-731	閃緑岩	109.0	70.0	42.0	456.2
180-2	スタンプ形石器	G0J1-66	閃緑岩	94.0	68.0	31.0	367.2
180-3	スタンプ形石器	F2J1-2439	砂岩	104.0	57.0	35.0	327.2
180-4	スタンプ形石器	F1J0	閃緑岩	140.0	82.0	69.0	1,289.5
180-5	スタンプ形石器		閃緑岩	65.0	64.0	54.0	380.6
180-6	スタンプ形石器	F3J2-88	砂岩	84.0	61.0	37.0	271.4
180-7	スタンプ形石器	F1J0-81	砂岩	91.0	44.0	29.0	137.5
180-8	スタンプ形石器	F2J1-911	砂岩	68.0	83.0	37.0	322.9
181-1	スタンプ形石器	F2I3-30	砂岩	120.0	80.0	44.0	753.5
181-2	スタンプ形石器	F0J1-28	砂岩	115.0	61.0	56.0	515.2
181-3	スタンプ形石器	F3I1-519	閃緑岩	123.0	63.0	38.0	489.8
181-4	スタンプ形石器	F3J0-131	閃緑岩	109.0	70.0	56.0	794.4
181-5	スタンプ形石器	F4J1-359	砂岩	140.0	105.0	54.0	966.6
181-6	スタンプ形石器	F3J0-1328	閃緑岩	101.0	52.0	28.0	257.4
182-1	スタンプ形石器	F2J1-1431	閃緑岩	118.0	89.0	55.0	880.1
182-2	スタンプ形石器	F3J0-1218	閃緑岩	107.0	87.0	47.0	579.6
182-3	スタンプ形石器	F3J0-1292	砂岩	108.0	77.0	34.0	331.7
182-4	スタンプ形石器	F4J2-658	閃緑岩	102.0	80.0	48.0	563.6
182-5	スタンプ形石器	F2J1-2060	砂岩	113.0	54.0	43.0	422.5
182-6	スタンプ形石器	F4J2-363	閃緑岩	67.0	44.0	31.0	151.3

図版番号	器 種	出土地点	石 質	長 さ	幅	厚 さ	重 さ
183-1	スタンプ形石器	F0J1-46	閃 緑 岩	110.0	82.0	53.0	770.1
183-2	スタンプ形石器	F3J1-1116	砂 岩	108.0	77.0	40.0	509.5
183-3	スタンプ形石器	F3J0-892	閃 緑 岩	109.0	73.0	35.0	373.2
183-4	スタンプ形石器	F2J1-612	閃 緑 岩	115.0	89.0	42.0	619.7
183-5	スタンプ形石器	G0I4-57	閃 緑 岩	95.0	56.0	50.0	313.6
183-6	スタンプ形石器	F4J0-1789	閃 緑 岩	81.0	47.0	40.0	252.7
184-1	スタンプ形石器	F3J1-961	閃 緑 岩	122.0	75.0	58.0	630.5
184-2	スタンプ形石器	F3J0-1684	砂 岩	73.0	36.0	26.0	76.7
184-3	スタンプ形石器	F4I4-397	閃 緑 岩	72.0	58.0	34.0	190.7
184-4	スタンプ形石器	F2I4-64	閃 緑 岩	135.0	59.0	40.0	400.9
184-5	スタンプ形石器	F2J1-2429	閃 緑 岩	97.0	56.0	41.0	291.6
184-6	スタンプ形石器	F3J1-123	閃 緑 岩	86.0	63.0	29.0	263.6
184-7	スタンプ形石器	F3J0-1067	閃 緑 岩	91.0	68.0	33.0	231.8
184-8	スタンプ形石器	G0J1-67	砂 岩	94.0	48.0	40.0	230.1
185-1	スタンプ形石器	F1J1-2266	閃 緑 岩	135.0	92.0	61.0	863.9
185-2	スタンプ形石器	F3J0-1006	閃 緑 岩	154.0	123.0	50.0	1,284.0
185-3	スタンプ形石器	F3J2-947	閃 緑 岩	144.0	78.0	63.0	1,067.0
186-1	磨 石	F3J1-1634	閃 緑 岩	126.0	94.0	42.0	747.9
186-2	磨 石	F2J1-2636	閃 緑 岩	96.0	104.0	48.0	658.5
186-3	磨 石	F4J0-1823	閃 緑 岩	95.0	78.0	53.0	546.5
186-4	磨 石	F3J1-1310	閃 緑 岩	96.0	70.0	40.0	377.5
186-5	磨 石	F3J0-689	閃 緑 岩	109.0	77.0	47.0	555.1
186-6	磨 石	F3J2-86	閃 緑 岩	109.0	74.0	36.0	492.3
186-7	磨 石	F4J1-1069	閃 緑 岩	75.0	71.0	38.0	301.3
186-8	磨 石	F3J2-882	閃 緑 岩	101.0	80.0	55.0	571.7
186-9	磨 石	F3J1-972	閃 緑 岩	88.0	69.0	40.0	362.4
186-10	磨 石	F4I4-301	閃 緑 岩	114.0	77.0	52.0	708.7
186-11	磨 石	F3J1-793	閃 緑 岩	100.0	65.0	33.0	390.1
187-1	磨 石	F3I4-174	閃 緑 岩	120.0	79.0	47.0	701.4
187-2	磨 石	F2J1-2197	閃 緑 岩	71.0	64.0	38.0	289.5
187-3	磨 石	G0J1-74	閃 緑 岩	82.0	59.0	38.0	263.0
187-4	磨 石	G0I4-98	閃 緑 岩	116.0	83.0	42.0	600.1
187-5	磨 石	F3J0-1858	閃 緑 岩	107.0	83.0	44.0	585.7
187-6	磨 石	F3J1-484	閃 緑 岩	91.0	80.0	37.0	377.9
187-7	磨 石	F0J1-57	閃 緑 岩	90.0	83.0	41.0	439.8
187-8	磨 石	F4J1-808	閃 緑 岩	146.0	120.0	47.0	1,234.8
188-1	磨 石	F3I4-63	閃 緑 岩	121.0	100.0	45.0	789.7
188-2	磨 石	F3J1-206	閃 緑 岩	83.0	72.0	44.0	400.5
188-3	磨 石	F2J1-2709	閃 緑 岩	101.0	82.0	53.0	663.2
188-4	磨 石	F2J1-2112	閃 緑 岩	111.0	82.0	47.0	696.0
188-5	磨 石	F2J1-1115	安 山 岩	87.0	90.0	26.0	203.1
188-6	磨 石	F3I4-193	閃 緑 岩	142.0	93.0	42.0	989.7
189-1	磨 石	F3J1-154	閃 緑 岩	91.0	92.0	43.0	518.3
189-2	磨 石	F4J3-25	閃 緑 岩	97.0	90.0	38.0	526.9
189-3	磨 石	F2J1-56	砂 岩	83.0	96.0	37.0	434.8
189-4	磨 石	F2I3-6	閃 緑 岩	102.0	87.0	45.0	496.4
189-5	磨 石	F2J2-368	閃 緑 岩	109.0	87.0	41.0	641.3
189-6	磨 石	F1J2-111	閃 緑 岩	124.0	107.0	41.0	810.7
190-1	磨 石	G0J2-48	閃 緑 岩	76.0	48.0	28.0	157.6
190-2	磨 石	F3J2-238	閃 緑 岩	75.0	62.0	26.0	190.0
190-3	磨 石	F3J0-1217	閃 緑 岩	85.0	76.0	30.0	264.3
190-4	磨 石	F3J0-783	閃 緑 岩	93.0	61.0	44.0	377.8
190-5	磨 石	F3J0-1126	砂 岩	90.0	73.0	48.0	472.3
190-6	磨 石	F0J1-41	閃 緑 岩	93.0	78.0	55.0	566.3
190-7	磨 石	F4J1-1151	閃 緑 岩	95.0	67.0	41.0	371.4
190-8	磨 石	G0J1-77	閃 緑 岩	96.0	85.0	55.0	583.6
190-9	磨 石	F2J1-2218	閃 緑 岩	95.0	78.0	53.0	485.0

図版番号	磨 種	出土地点	石 質	長 さ	幅	厚 さ	重 さ
190-10	磨 石	G0J2-80	閃 綠 岩	118.0	80.0	42.0	545.2
190-11	磨 石	F3J2-892	閃 綠 岩	111.0	70.0	47.0	578.1
190-12	磨 石	F3J2-44	閃 綠 岩	120.0	78.0	48.0	641.2
190-13	磨 石	F3J0-1199	閃 綠 岩	101.0	86.0	54.0	679.1
190-14	磨 石	F2J0-438	閃 綠 岩	114.0	78.0	55.0	668.3
190-15	磨 石	F3J2-773	閃 綠 岩	110.0	82.0	56.0	652.6
190-16	磨 石	F4J0-212	閃 綠 岩	107.0	73.0	30.0	373.1
191-1	磨 石	F2J2-1093	閃 綠 岩	101.0	69.0	63.0	626.0
191-2	磨 石	F3J0-1727	閃 綠 岩	97.0	71.0	49.0	566.6
191-3	磨 石	G0J0-467	閃 綠 岩	107.0	66.0	49.0	468.0
191-4	磨 石	F4J4-221	閃 綠 岩	105.0	66.0	41.0	474.7
191-5	磨 石	F3J0-1189	閃 綠 岩	100.0	80.0	58.0	694.0
191-6	磨 石	F3J2-25	閃 綠 岩	80.0	92.0	40.0	440.7
191-7	磨 石	F2J0-586	閃 綠 岩	100.0	71.0	39.0	391.9
191-8	磨 石	F1J1-1722	閃 綠 岩	114.0	86.0	60.0	830.1
191-9	磨 石	F3J1-1698	閃 綠 岩	101.0	94.0	42.0	556.3
191-10	磨 石	F3J0-1343	閃 綠 岩	111.0	94.0	48.0	664.0
191-11	磨 石	F2J1-912	閃 綠 岩	110.0	71.0	45.0	511.0
191-12	磨 石	F0J1-255	閃 綠 岩	103.0	76.0	48.0	502.8
191-13	磨 石	F4J1-407	閃 綠 岩	123.0	100.0	46.0	793.1
191-14	磨 石	G0J0-405	閃 綠 岩	114.0	91.0	46.0	660.4
191-15	磨 石	F3J4-208	砂 岩	109.0	75.0	36.0	427.4
192-1	磨 石	F2J1-175	閃 綠 岩	143.0	82.0	50.0	811.2
192-2	磨 石	F1J2-171	閃 綠 岩	124.0	90.0	48.0	795.6
192-3	磨 石	F0J0-43	閃 綠 岩	149.0	93.0	31.0	615.9
192-4	磨 石	F1J1-1489	閃 綠 岩	124.0	86.0	32.0	565.0
192-5	磨 石	F2J1-1855	閃 綠 岩	140.0	90.0	45.0	876.4
192-6	磨 石	F3J0-528	閃 綠 岩	112.0	89.0	47.0	676.8
192-7	磨 石	F2J1-2261	閃 綠 岩	138.0	100.0	35.0	710.1
192-8	磨 石	F3J0-1230	閃 綠 岩	124.0	103.0	54.0	972.9
192-9	磨 石	F2J1-126	安 山 岩	117.0	55.0	50.0	385.0
192-10	磨 石	F2J2-761	閃 綠 岩	154.0	99.0	39.0	845.3
192-11	磨 石	F2J1-1439	閃 綠 岩	148.0	106.0	49.0	1,097.1
193-1	磨 石	G0J2-79	閃 綠 岩	148.0	81.0	58.0	1,114.5
193-2	磨 石	F4J4-122	閃 綠 岩	129.0	115.0	41.0	892.0
193-3	磨 石	F2J1-2191	閃 綠 岩	115.0	105.0	46.0	824.9
193-4	磨 石	F4J1-535	砂 岩	132.0	97.0	75.0	1,179.6
193-5	磨 石	F2J4-19	閃 綠 岩	124.0	106.0	60.0	1,159.9
193-6	磨 石	F3J0-132	閃 綠 岩	123.0	90.0	46.0	827.1
193-7	磨 石	F2J1-2871	閃 綠 岩	102.0	83.0	41.0	421.1
193-8	磨 石	F4J0-1815	閃 綠 岩	67.0	95.0	43.0	358.2
193-9	磨 石	F1J1-304	閃 綠 岩	97.0	85.0	47.0	573.4
193-10	磨 石	F2J1-2832	閃 綠 岩	83.0	77.0	40.0	352.4
193-11	磨 石	F4J3-32	閃 綠 岩	79.0	67.0	42.0	322.2
194-1	石 皿	F1J2-132	閃 綠 岩	132.0	163.0	51.0	1,415.0
194-2	石 皿	F2J0-210	閃 綠 岩	129.0	119.0	25.0	593.2
194-3	石 皿	F3J1-1863	閃 綠 岩	185.0	164.0	47.0	1,917.0
194-4	石 皿	F2J1-1730	砂 岩	130.0	119.0	30.0	639.9
194-5	石 皿	F3J1-1780	閃 綠 岩	224.0	181.0	48.0	2,590.0
194-6	石 皿	G0J1-125	閃 綠 岩	153.0	114.0	35.0	802.4
194-7	石 皿	F4J1-1186	閃 綠 岩	136.0	117.0	36.0	793.9
195-1	石 皿	F4J1-1292	閃 綠 岩	191.0	173.0	49.0	2,100.0
195-2	石 皿	F4J2-709	閃 綠 岩	167.0	106.0	37.0	1,024.4
195-3	石 皿	F2J1-2255	閃 綠 岩	195.0	124.0	43.0	1,479.1
195-4	石 皿	F3J4-65	閃 綠 岩	179.0	177.0	35.0	1,765.4
195-5	石 皿	F4J3-10	閃 綠 岩	163.0	192.0	45.0	2,160.0
195-6	石 皿	F4J1-1201	閃 綠 岩	154.0	120.0	32.0	845.8

図版番号	器 種	出土地点	石 質	長さ	幅	厚さ	重さ
196-1	石 皿	G0J1-124	閃 緑 岩	236.0	135.0	72.0	3,600.0
196-2	石 皿	F3I4-154	閃 緑 岩	104.0	140.0	40.0	802.0
196-3	石 皿	F4J1-1293	閃 緑 岩	133.0	153.0	40.0	1,071.6
196-4	石 皿	F2J1-1862	砂 岩	274.0	248.0	57.0	6,060.0
197-1	石 皿	F1J1-1069	結 晶 片 岩	337.0	206.0	42.0	4,500.0
197-2	石 皿	F1J1-1487	閃 緑 岩	105.0	106.0	32.0	491.6
197-3	石 皿	F3J1-1285	砂 岩	114.0	96.0	16.0	273.8
197-4	石 皿	F2J1-1861	閃 緑 岩	175.0	169.0	38.0	1,338.2
198-1	石 皿	F3J0-1982	結 晶 片 岩	269.0	220.0	47.0	4,200.0
198-2	石 皿	F3J1-1286	閃 緑 岩	111.0	112.0	31.0	495.7
198-3	石 皿	F3J1-62	緑 泥 片 岩	137.0	174.0	24.0	949.8
206-1	石 皿	SJ4-1	閃 緑 岩	303.0	217.0	86.0	8,150.0
206-2	石 皿	SJ4-7	閃 緑 岩	231.0	174.0	56.0	3,350.0
206-3	磨 石	SJ4-6	砂 岩	100.0	48.0	50.0	375.5
235-1	石 鏃	E36132	チ ャ ー ト	27.5	19.5	5.5	2.0
235-2	石 鏃	E44J09	チ ャ ー ト	16.0	11.0	3.0	0.3
235-3	石 鏃	E39143	チ ャ ー ト	19.0	15.0	2.5	0.4
235-4	石 鏃	E38149	黒 曜 石	16.5	10.5	4.5	0.6
235-5	石 鏃	E10J10	黒 曜 石	14.0	10.0	3.0	0.3
235-6	石 鏃	E37138	チ ャ ー ト	12.0	13.0	3.0	0.3
235-7	撻 器	E37139	安 山 岩	50.0	86.0	13.0	60.7
235-8	撻 器	F00J10	凝 灰 岩	46.0	83.0	9.0	41.2
235-9	撻 器	F00148	フォルンフェルス	56.0	69.0	13.0	65.7
235-10	撻 器	F00146	凝 灰 岩	77.0	45.0	14.5	40.6
235-11	打製石弁	F04147	砂 岩	87.0	55.0	11.0	75.2
235-12	打製石弁	F17142	フォルンフェルス	152.0	65.0	33.0	240.6
235-13	打製石弁	E36147	フォルンフェルス	112.0	68.0	33.0	238.9
235-14	打製石弁	F02136	フォルンフェルス	101.0	46.0	21.0	113.4
235-15	打製石弁	E45J21	フォルンフェルス	46.0	56.0	30.0	75.1
235-16	打製石弁	E38133	フォルンフェルス	85.0	42.0	30.0	99.8
235-17	打製石弁	E39J01	フォルンフェルス	98.0	60.0	48.5	254.5
235-18	打製石弁	E34138	フォルンフェルス	94.0	69.0	35.0	196.2
236-19	撻 器	E36135	閃 緑 岩	144.0	36.0	39.0	1,227.3
236-20	撻 器	E34138	フォルンフェルス	93.0	87.0	42.0	327.7
236-21	撻 器	E45J07	フォルンフェルス	91.0	100.0	43.0	401.1
236-22	撻 器	F06135	フォルンフェルス	85.0	98.0	36.0	371.7
236-23	撻 器	E40146	フォルンフェルス	88.0	83.0	31.0	327.3
236-24	撻 器	E36J01	フォルンフェルス	69.0	78.0	45.0	207.7
236-25	磨 石	F2I30	閃 緑 岩	102.0	100.0	54.0	823.0
236-26	磨 石	E40141	砂 岩	108.0	100.0	44.0	652.1
236-27	有溝砥石	F4J0	凝 灰 岩	36.0	32.0	13.0	11.8
236-28	有溝砥石	E48J12	凝 灰 岩	54.0	43.0	19.0	24.9
237-29	磨 石	E48J16	閃 緑 岩	117.0	93.0	46.0	669.4
237-30	磨 石	E03149	閃 緑 岩	107.0	78.0	50.0	670.7
237-31	磨 石	E37147	閃 緑 岩	100.0	91.0	37.0	456.7
237-32	磨 石	E35138	閃 緑 岩	117.0	99.0	52.0	970.6
237-33	磨 石	F17J02	閃 緑 岩	136.0	98.0	51.0	874.9
237-34	磨 石	F06J02	閃 緑 岩	118.0	81.0	34.0	438.2
237-35	磨 石	E48147	閃 緑 岩	114.0	92.0	47.0	669.8
237-36	磨 石	F18143	閃 緑 岩	114.0	73.0	43.0	533.3
237-37	磨 石	E43149	閃 緑 岩	107.0	84.0	47.0	748.2
238-38	石 皿	E32138	閃 緑 岩	130.0	126.0	33.0	911.8
238-39	石 皿	F05I29	緑 泥 片 岩	187.0	128.0	38.0	1,394.3
238-40	石 皿	F18140	砂 岩	269.0	156.0	40.0	2,865.8
238-41	石 皿	E45J06	閃 緑 岩	165.0	161.0	43.0	2,110.1
238-42	石 皿	F14148	閃 緑 岩	100.0	106.0	25.0	426.1
239-43	スタンプ形石器	E38143	閃 緑 岩	115.0	100.0	44.0	709.4

図版番号	器種	出土地点	石質	長さ	幅	厚さ	重さ
239-44	スタンプ形石器	E35I34	閃緑岩	107.0	88.0	41.0	563.8
239-45	スタンプ形石器	E40I42	砂岩	72.0	60.0	27.0	160.4
239-46	スタンプ形石器	E36I35	閃緑岩	127.0	84.0	56.0	761.7
239-47	スタンプ形石器	E42I29	閃緑岩	92.0	61.0	26.0	227.8
239-48	スタンプ形石器	E40I43	閃緑岩	78.0	78.0	40.0	368.0
239-49	スタンプ形石器	E36I46	砂岩	113.0	75.0	44.0	466.5
240-50	スタンプ形石器	F03J08	閃緑岩	97.0	76.0	36.0	426.7
240-51	スタンプ形石器	E46J18	閃緑岩	83.0	78.0	39.0	445.2
240-52	スタンプ形石器	F06J44	閃緑岩	94.0	84.0	53.0	546.2
240-53	スタンプ形石器	E49J14	閃緑岩	75.0	63.0	31.0	199.7
240-54	スタンプ形石器	E42I37	砂岩	91.0	74.0	42.0	471.3
240-55	スタンプ形石器	E42I44	閃緑岩	67.0	43.0	27.0	117.7
240-56	スタンプ形石器	E41I49	閃緑岩	85.0	70.0	40.0	355.1
240-57	スタンプ形石器	F07J05	閃緑岩	106.0	77.0	36.0	412.3
246-1	石皿	SJ5-6	安山岩	214.0	224.0	61.0	2046.5
246-2	石皿	SJ5-2	閃緑岩	183.0	197.0	41.0	2256.3
246-3	石器	SJ-1	フォルンフェルス	26.0	61.0	9.0	15.0
246-4	磨石	SJ5-1	閃緑岩	92.0	85.0	41.0	444.3
246-5	砥石	SJ-1	凝灰岩	46.0	31.0	12.5	11.1
246-6	石錘	SJ-1	フォルンフェルス	33.0	22.0	8.0	9.9
263-1	石鏃	E18J12	黒曜石	16.5	12.0	5.0	0.9
263-2	石鏃		黒曜石	17.5	11.5	4.0	0.4
263-3	石鏃	E17J11	チャート	16.5	18.0	3.0	0.7
263-4	石鏃	E17J9	黒曜石	17.0	13.0	4.5	0.6
263-5	石器		頁岩	26.5	20.5	5.5	2.0
263-6	石器	E17J11	フォルンフェルス	45.0	93.0	8.5	60.4
263-7	石器	E17J12	チャート	30.5	43.5	11.0	10.6
263-8	打製石斧	SJ5-3	フォルンフェルス	130.0	96.0	31.0	317.2
263-9	打製石斧	E16J07	フォルンフェルス	101.0	45.0	36.0	176.6
263-10	打製石斧	F14J17	フォルンフェルス	99.0	51.0	20.0	103.4
263-11	打製石斧	E13J22	フォルンフェルス	169.0	97.0	44.0	724.4
263-12	打製石斧	E15J12	フォルンフェルス	48.0	53.0	17.0	55.8
263-13	打製石斧	E17J11	フォルンフェルス	85.0	81.0	27.0	271.2
263-14	打製石斧	E27J26	フォルンフェルス	82.0	68.0	22.0	180.8
263-15	打製石斧	E14J08	フォルンフェルス	49.0	50.0	27.0	74.0
263-16	打製石斧	E17J11	フォルンフェルス	66.0	73.0	25.0	114.2
264-17	打製石斧	E15J12	フォルンフェルス	79.0	67.0	25.0	152.0
264-18	石器	E15J12	フォルンフェルス	73.0	79.0	32.0	189.9
264-19	石器	E13J16	フォルンフェルス	83.0	76.0	42.0	279.5
264-20	石器	E16J09	フォルンフェルス	80.0	48.0	36.0	138.5
264-21	石器	E17J12	フォルンフェルス	64.0	50.0	30.0	132.7
264-22	石器	E25J16	フォルンフェルス	60.0	94.0	38.0	239.9
264-23	石器	E14J08	フォルンフェルス	86.0	82.0	48.0	391.0
264-24	石器	E15J22	フォルンフェルス	83.0	80.0	39.0	336.3
264-25	石器	E22J14	フォルンフェルス	88.0	73.0	55.0	461.7
264-26	石器	E15J19	砂岩	123.0	87.0	36.0	465.8
264-27	磨石	E13J08	閃緑岩	112.0	99.0	42.0	516.7
264-28	磨石	E15J13	フォルンフェルス	112.0	93.0	48.0	682.6
265-29	磨石	E19J30	フォルンフェルス	85.0	69.0	41.0	339.4
265-30	磨石	E12J11	フォルンフェルス	116.0	94.0	44.0	673.5
265-31	磨石	E29J25	フォルンフェルス	159.0	74.0	53.0	808.0
265-32	スタンプ形石器	E13J22	フォルンフェルス	100.0	100.0	46.0	679.7
265-33	スタンプ形石器	E12J16	砂岩	94.0	64.0	43.0	388.0
265-34	スタンプ形石器	E15J17	閃緑岩	103.0	70.0	43.0	468.6
265-35	スタンプ形石器	E16J17	閃緑岩	104.0	96.0	39.0	605.6

Ⅶ. 四反歩遺跡出土土器胎土分析

1. X線回折試験及び電子顕微鏡観察

晩第四紀 地質研究所 井上 巖

(1) 実験条件

[1] 試料

分析に供した資料は第3表胎土性状表に示す通りである。X線回折試験に供する遺物資料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m/m}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスバタリング装置で定着した。

[2] X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu、Filter: Ni、Voltage: 40Kv、Current: 30mA、ステップ角度: 0.02度、計数時間: 0.5SEC。

[3] 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の割合についての観察は電子顕微鏡によって行った。観察には日本電子製T-20を用い、倍率は、35、350、750、1500、5000の5段階で行い、写真撮影をした。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

(2) 実験結果の取扱い

実験結果は第3表胎土性状表に示す通りである。第3表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)をm/m単位で測定したものである。

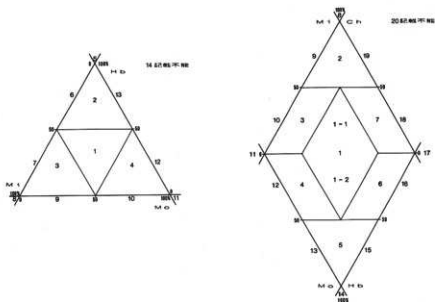
電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバライト(Cristobalite)等の組成上の組み合わせとによって焼成ランクを決定した。

[1] 組成分類

1) Mo-Mi-Hb 三角ダイアグラム

第266図左に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Hbの3成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイ



第266図 三角・菱形ダイアグラム位置分類図

アグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、の X 線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント (%) で表示する。モンモリロナイトは $Mo / (Mo + Mi + Hb) \times 100$ でパーセントとして求め、同様に Mi、Hb も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の 1~4 は Mo、Mi、Hb の 3 成分を含み、各辺は 2 成分、各頂点は 1 成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第266図に示す通りである。

2) Mo-Ch、Mi-Hb 菱形ダイアグラム

第266図右に示すように菱形ダイアグラムを 1~19 に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は 20 として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) のうち、a) 3 成分以上含まれない、b) Mont、Ch の 2 成分が含まれない、c) Mi、Hb の 2 成分が含まれない、の 3 例がある。

菱形ダイアグラムは Mont-Ch、Mica-Hb の組み合わせを表示するものである。Mont-Ch、Mica-Hb のそれぞれの X 線回折試験のチャートの高さを各々の組み合わせ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $Mo / (Mo + Ch) \times 100$ と計算し、Mi、Hb、Ch も各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある 1~7 は Mo、Mi、Hb、Ch の 4 成分を含み、各辺は Mo、Mi、Hb、Ch のうち 3 成分、各頂点は 2 成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第266図に示す通りである。

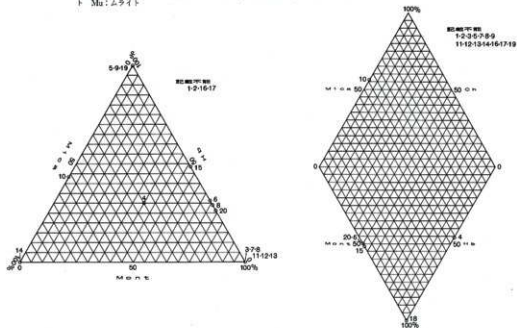
[2] 焼成ランク

焼成ランクの区分は X 線回折試験による鉱物組成と電子顕微鏡観察によるガラス量によって行

第3表 胎土性状表

試料No.	タイプ分類	焼成ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物													ガラス	備 考	
			Mo	Cr	Mica	Hb	Ch	Ka	Hy	Qtz	Pl	Cr	Mu	Albite	Qtz	Pl	Cr			Mu
四反歩-1	J	Ⅲ	14	20												2464	422	99	中粒	細粒砂を混入した砂質性粘土
2	J	Ⅲ	14	20											2369	508	90	中粒	中粒砂を混入した砂質性粘土	
3	F	Ⅲ~Ⅳ	11	20	207										4746	342		中粒	粗粒砂を混入した砂質性粘土	
4	A	Ⅲ	1	16	199	133	112								963	425	103	中粒	細粒砂を混入した砂質性粘土	
5	C	Ⅲ	5	20			192								2841	1069		中粒	粗粒砂を混入した砂質性粘土	
6	G	Ⅲ	12	12	237		106	238							872	330		中粒	中粒砂を混入した砂質性粘土	
7	F	Ⅲ	11	20	300										2109	654		中粒	粗粒砂を混入した砂質性粘土	
8	F	Ⅲ	11	20	214										3031	424		中粒	細粒砂を混入した砂質性粘土	
9	C	Ⅲ	5	20			86								3392	385		中粒	細粒砂を混入した砂質性粘土	
10	D	Ⅲ	7	9		142	106	238							1185	358		中粒	細粒砂を混入した砂質性粘土	
11	F	Ⅲ	11	20	276										1984	326		中粒	中粒砂を混入した砂質性粘土	
12	F	Ⅲ	11	20	252										3265	240		中粒	中粒砂を混入した砂質性粘土	
13	F	Ⅲ	11	20	226										2429	247		中粒	粗粒砂を混入した砂質性粘土	
14	E	Ⅲ	8	20		167									3768	567		中粒	中粒砂を混入した砂質性粘土	
15	H	Ⅲ	12	13	193		173	190							3817	414		中粒	中粒砂を混入した砂質性粘土	
16	J	Ⅲ	14	20											2129	767		中粒	中粒砂を混入した砂質性粘土	
17	J	Ⅲ	14	20			260								2503	454		中粒	粗粒砂を混入した砂質性粘土	
18	I	Ⅲ	12	14	277		110								2930	532		中粒	粗粒砂を混入した砂質性粘土	
19	B	Ⅲ	5	11			260	209							2099	873		中粒	粗粒砂を混入した砂質性粘土	
20	G	Ⅲ	12	12	222		80	225							2723	968		中粒	粗粒砂を混入した砂質性粘土	

焼成ランク Mu: I MuCr: II Cr-glass: III glass: IV 原土: V Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 Ka: カ Hy: 葉綠輝石 Qtz: 石英 Pl: 斜長石 Cr: クラストバーライト Mu: ムライト



第267図 三角・菱形ダイアグラム

った。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度で、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI~Vの5段階に区分した。

- a) 焼成ランクI: ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。

- b) 焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランクⅢ：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- e) 焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組み合わせといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第3表胎土性状表の右端の備考に理由を記した。

【3】タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類による組み合わせによって行った。同じ組成をもった土器胎土は、位置分類の数字組み合わせも同じはずである。タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいもの組み合わせから作られるもので、便宜上、アルファベットの大字を使用し、同じ組み合わせのものは同じ文字を使用し、表現した。

例えば、三角ダイアグラムの1と菱形ダイアグラムの1の組み合わせはA、三角ダイアグラムの2と菱形ダイアグラムの15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA、B、Cなどは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加に伴って統一した分類名称を与える考えである。

(3) 分析結果

【1】タイプ分類

土器胎土は第3表胎土性状表に示すように、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Jの10タイプに分類された。20個の分析に対して9タイプというのはいくつも見受けられる。

電子顕微鏡によるガラスの分析では、土器胎土中に生成したガラスは中粒で、焼成ランクはⅢと幾分高い状況にある。

Aタイプ…四反歩—4

Mont, Mica, Hbの3成分を含み、Ch1成分に欠ける。

Bタイプ…四反歩—19

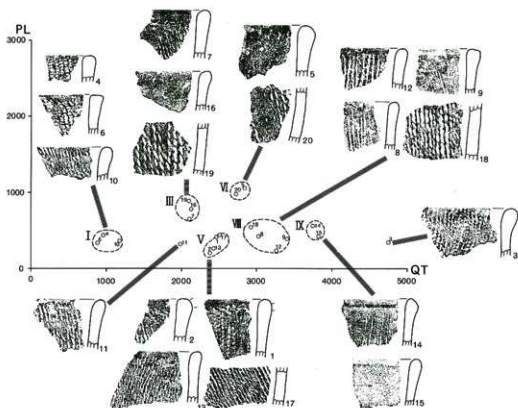
Hb, Chの2成分を含み、Mont, Micaの2成分に欠ける。

Cタイプ…四反歩—5、9

Hb1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。

Dタイプ…四反歩—10

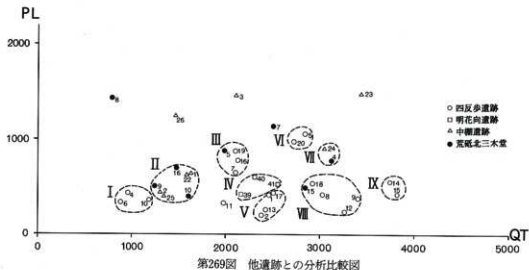
Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont1成分に欠ける。



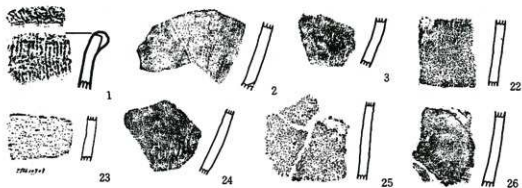
第268図 Qt・Pl 相關圖

第4表 分析土器一覽表

番号	出土地点	分類	原体	番号	出土地点	分類	原体
1	F2J1-1567	第1類第4種	R L	11	G0J1-767	第2類第5種	R
2	F1J1-2392	第1類第4種	R L	12	F0J1-2824	第2類第11種	R
3	F4J2-19	第1類第6種	R L	13	F1J0-6	第2類第6種	R
4	F3J1-1023	第1類第6種	R L	14	F3J2-769	第2類第14種	R
5	F2J1-465	第1類第8種	R L	15	G0J1-2	第4類第4種	無文
6	G0J1-246	第1類第10種	R L	16	F3J0-874	第4類第2種	無文
7	F1J1-353	第2類第15種	L	17	F2J1-989	第2類第18種-a	R
8	G0J1-211	第3類第3種	条線文	18	F4J0-1951	第2類第18種-d	R
9	F3J1-1536	第3類第8種	条線文	19	F1J1-618, 771	第2類第18種-e	R
10	F4J0-1655	第2類第5種	R	20	F2J2-242	第2類第18種-f	R



第269図 他遺跡との分析比較図



第270図 群馬県中棚遺跡の分析土器

Eタイプ…四反歩—14

Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。

Fタイプ…四反歩—3、7、8、11、12、13

Mont 1成分を含み、Mica, Hb, Chの3成分に欠ける。個体数は6個と最も多く、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

Gタイプ…四反歩—6、20

Mont, Hb, Chの3成分を含み、Mica 1成分に欠ける。

Hタイプ…四反歩—15

Mont, Hb, Chの3成分を含み、Mica 1成分に欠ける。組成的にはGタイプと類似するが検出強度が異なるために、位置分類が違っている。

Iタイプ…四反歩—18

Mont, Hbの2成分を含み、Mica, Chの2成分に欠ける。

Jタイプ…四反歩—1、2、16、17

Mont, Mica, Hb, Ch の 4 成分に欠ける。

主に、アルミナゲル ($n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$) で構成される。個体数は 4 個で、個体数の多いことから判断して、在地あるいは在地近傍の可能性がある。

以上の結果から明らかなように、F タイプと J タイプは検出された個体数が多く、在地あるいは在地近傍の可能性が高いが、他のタイプは 1 個または 2 個程度で、多種にわたるのが特徴である。

〔2〕石英 (Qt) — 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域に置ける砂は各々固有の石英—斜長石比を有しているといえる。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは、前記のように各々の集団の有する固有の技術の一端である。

第269図 Qt—Pl 相関図には四反歩遺跡の土器と既分析の縄文時代早期の燃糸文系及び無文系の土器を埼玉県明花向遺跡、群馬県中棚遺跡の土器より抽出し、記載した。

第269図に示すように、土器は I ～ IX の 9 グループとその他に分類された。

I グループ…四反歩—4、6、10

四反歩—4 と 6 は縄文施文、10 は燃糸文施文で構成される。個体数は 3 個で、集中度も比較的いい。

II グループ…中棚—1、2、22、25

中棚—1 は燃糸文施文、中棚—2、22、25 は無文の土器で構成される。

III グループ…四反歩—7、16、19

四反歩—7、19 は燃糸文施文、四反歩—16 は無文。個体数は 4 個で、集中度もいい。

IV グループ…明花向—39、40、41

明花向—39、40、41 の 3 個は燃糸文施文

V グループ…四反歩—1、2、13、17

四反歩—1 と 2 は縄文施文、13 と 17 は燃糸文施文。四反歩—1、2、17 はいずれも J タイプの胎土で構成される。

VI グループ…四反歩—5、20

四反歩—5 は縄文施文、20 は燃糸文施文。

VII グループ…中棚—24

中棚—24 は無文。

VIII グループ…四反歩—8、9、12、18

四反歩—8 と 9 は条線文施文、12 と 18 は燃糸文施文。

IXグループ…四反歩—14、15

四反歩—14は燃糸文施文、15は無文。

「その他」…四反歩—3、11、中棚—3、23、26

四反歩—3は縄文施文で、石英の強度が高く異質である。四反歩—11は燃糸文施文で、IIIとVの2つの四反歩グループとは離れており、異質である。中棚—3、23、26は無文で、斜長石の強度が高く異質である。これらの土器は各々が1つのグループを代表しているものであろう。

以上の結果から明らかなように、四反歩遺跡の土器と明花向遺跡、中棚遺跡の土器は明らかに異なるグループを形成している。

明花向遺跡の土器はIVグループにだけ属し、独自のグループを形成している。

中棚遺跡も独自グループを形成している。

四反歩遺跡の土器はI、III、V、VI、VIII、IXの6つのグループに分かれて分布する。

これら各々のグループの中では縄文と燃糸文、無文と燃糸文が共存しており、燃糸文、縄文、無文の各々が独自のグループを形成するという事はない。四反歩遺跡の土器の各グループは明らかに離れており、各グループが各々の集団を代表しているものと推察される。

(4)まとめ

1) 土器胎土は20個の分析に対してA～Jの10タイプに分類された。20個に対して10タイプというのは多すぎる。しかし、石英と斜長石の相関でも6グループと「その他」に分かれており、土器が多種にわたっているために生じた現象ではなかろうか。

2) 埼玉県の中棚、明花向の各遺跡の胎土と群馬県の中棚遺跡の土器の胎土は組成的な相違が認められる。中棚遺跡の土器はMica、Hbの2成分を含むタイプが多く検出されるが、四反歩、明花向等の土器ではMont、Hbが多く検出されている。

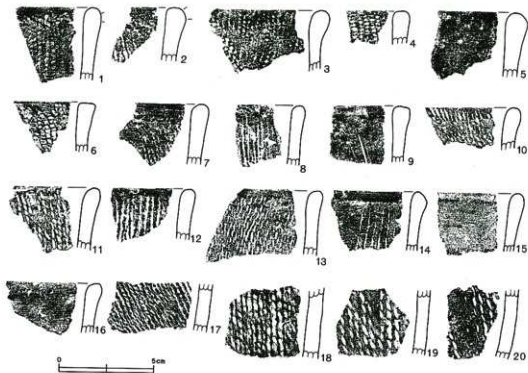
3) 電子顕微鏡によるガラスの分析では、ガラスは中粒で、焼成ランクはIIIと幾分高い。

4) 石英と斜長石の相関ではI～IXのグループと「その他」に分類された。四反歩遺跡の土器はI、III、V、VI、VIII、IXの6グループを形成し、明花向遺跡の土器はIV、群馬県の中棚遺跡はIIとVIIIの2グループというように各遺跡の土器は明瞭に分かれているのが特徴である。四反歩遺跡の各グループでは燃糸文と無文、燃糸文と縄文が共存しており、燃糸文、縄文、無文の各々が独自のグループを形成しているものは認められない。

四反歩遺跡の土器は20個分析したが、6グループと「その他」に分かれ、各々が1つの集団を代表しているとすると8つの集団ということになる。この多種にわたる集団の可能性は20個の土器に対して10タイプに分かれたこととよく対比されるものである。

2. 土器分類と胎土分析について

胎土分析に供した土器片は20片であったが、数の制限もあり多くの分類の中から代表的なものを選択して分析にあたった。各々の属性は次の様である。



第271図 胎土分析資料

1、2は丸頭状口唇部が肥厚して外反する器形を呈し、口唇外端部から口縁部にかけて異方向施文を行うものである。整形と施文の関係は、胴部の縄文と口唇部整形の関係は不明であるが、口唇部を整形した後に、最後に口端部への異方向施文を施している。異方向施文は幅の狭いものであり、両者とも単節RLを施文する。器形と異方向施文の位置関係から、第1群第1類第4種に分類される。

3は肥厚する丸頭状口唇部が大きく外反する器形を呈し、口端部から縄文を施文するものである。整形と施文の関係は、口唇部を整形した後に縄文を施文するものであり、縄文は単節RLを施文する。4は肥厚度合の少ない丸頭状口唇部が立ち気味に開き、3と同様に口唇部整形の後に口端部から縄文を施文するものである。施文の特徴から両者とも第1類第6種に分類される。

5は丸頭状口唇部が大きく肥厚し、口唇外端部から縄文を施文するものである。縄文は単節RLであるが、薄く施文されることを特徴とする。第1類第8種に分類される。

6は肥厚角頭状口唇部が外反する器形を呈し、口端部から縄文RLを施文するものである。整形と施文の関係は、口唇部整形後口端部からの縄文施文である。第1類第10種に分類される。

7はやや肥厚する丸頭状口唇部が開く器形を呈し、口縁部にやや無文部を設けて撚糸Lを施文するものである。口唇部整形は無文部まで及び、横位に撫えられる。第2類第15種に分類される。

8、9は条線文を施文するもので、8は無肥厚丸頭状口唇部がやや開く器形を呈し、口端部から条線文を施文する第3類第3種で、9は口縁部に無文帯を持つ第3類第8種である。

10、11はあまり肥厚しない丸頭状口唇部が開く器形を呈し、口端部から撚糸文を施文するもので

ある。整形と施文の関係は、口端部からの捺糸文施文後、口唇部への撫で整形を行うものであり、両者とも第2類第5種に分類される。

12は無肥厚丸頭状口唇部が開く器形を呈し、口端部から捺糸文を施文した後、口唇部に撫で整形を施すものである。第2類第11種に分類される。13は12と整形施文を同じくして、口唇部が肥厚するものであり、第2類第6種に分類される。両者とも原体は捺糸Rである。

14は肥厚口唇部が外反する器形を呈し、口端部に捺糸文施文後、面取り状の強い整形を施すものである。胴部には間隔の開いた捺糸Rを帯状に施文する。非常に特徴的な整形であり、第2類第14種に比定される。

15、16は文様の施文されない無文土器で、15が無肥厚丸頭状口唇部が開く器形を呈し、第4類第4種に分類される。16は肥厚丸頭状口唇部が外反する器形を呈し、第4類第2種に分類される。

17～20は捺糸文を施文する胴部破片で、原体及び施文手法で分類される。17は細密の捺糸文を施文する第2類第18種 a、18は太密の捺糸文を施文するもので第2類第18種 d、19は太くて間隔の開いた捺糸文を施文する第2類第18種 e、20は捺糸文を帯状に施文する第2類第18種 f にそれぞれ分類される。

以上の土器群は分析の結果、次の様な集合関係にある。

[胎土分析] では

[石英—斜長石の相関分析] では

Aタイプ…4 (第1類第6種)	Iグループ…4 (第1類第6種)
Bタイプ…19 (第2類第18種 e)	6 (第1類第10種)
Cタイプ…5 (第1類第8種)	10 (第2類第5種)
9 (第3類第8種)	IIIグループ…7 (第2類第15種)
Dタイプ…10 (第2類第5種)	19 (第2類第18種 e)
Eタイプ…14 (第2類第14種)	16 (第4類第2種)
Fタイプ…3 (第1類第6種)	Vグループ…1、2 (第1類第4種)
11 (第2類第5種)	13 (第2類第6種)
13 (第2類第6種)	17 (第2類第18種 a)
12 (第2類第11種)	VIグループ…5 (第1類第8種)
7 (第2類第15種)	20 (第2類第18種 f)
8 (第3類第3種)	VIIグループ…12 (第2類第11種)
Gタイプ…6 (第1類第10種)	18 (第2類第18種 d)
20 (第2類第18種 f)	8 (第3類第3種)
Hタイプ…15 (第4類第4種)	9 (第3類第8種)
Iタイプ…18 (第2類第18種 d)	IXグループ…14 (第2類第14種)
Jタイプ…1、2 (第1類第4種)	15 (第4類第4種)
17 (第2類第18種 a)	「その他」…3 (第1類第6種)
16 (第4類第2種)	11 (第2類第5種)

上記の集合関係から、胎土分析ではFタイプとJタイプに集中するものの、土器分類において

は個別的なバラエティーが多いものと思われる。中でも、個体は異なるが異方向施文の1、2はJタイプに含まれ、細密な燃糸文である17も同様の胎土組成であることから、土器分類と胎土タイプ別分類とが、対応関係にあるものと思われる。Fタイプは胎土組成が類似するものの、土器分類においてバラツキがみられる。

また、石英—斜長石の相関分析では、6グループに分けられているが、IグループとIIIグループに特徴的な纏まり方をみせている。

Iグループは土器分類では口唇部整形後に縄文や燃糸文を施文する土器群が集中しており、角頭や丸頭という口唇部の形態や、縄文、燃糸文という原体の相違を越えて、整形から施文の手法が共通する纏まりのある1群として把握されるものである。

IIIグループは口縁部に無文部を設けるものや、口唇外端部に面取り状の整形を施すもの、太くて間隔の開く燃糸文を施文するものが含まれており、燃糸文系土器群の中にあっても、比較的後出的な要素を持つ土器群が纏まっている。やはり、纏まりのある1群として把握されよう。

また、Vグループは口縁部異方向施文の土器を2個体含む一方で、燃糸文施文後口唇部に整形を施すものが含まれている。燃糸文土器双方では細密な燃糸文を施すことで共通するが、異方向施文の縄文土器としては1群として認識されるかは、疑問の残るところである。仮に同じ群として把握されるとすれば、異方向施文土器が燃糸文施文後に整形を施す土器群に伴うことは興味深い事実となろう。

Ⅵグループは括られる範囲も広いもので、含まれる土器群にもバラエティーが窺える。また、他のグループや「その他」でも比較的バラツキが認められるものの、要素が類似する土器群が集まる傾向にある。

この様な自然化学的分析結果を安直に考古学的な分析結果に結び付けるのは非常に危険な行為ではあるが、有る種の目的を持った分析で、客観的な比較データを得ることは時として有効な場合も多い。今回も、同じ埼玉県内の明花向遺跡出土のほぼ同時期の燃糸文土器や、群馬県の中棚遺跡の燃糸文系土器群との分析結果を比較したが、それぞれの遺跡は独自の存在として纏まる傾向にあり、四反歩遺跡出土土器と大きく混じらないことが理解された。中棚遺跡の土器群は燃糸文系土器群終末期の無文土器を中心とする点で四反歩遺跡と異なることは容易に理解されるが、逆にその組成等が同じ群馬県内の遺跡と纏まりをみせる傾向にある点が興味深い。

四反歩遺跡出土の燃糸文系土器群が他の遺跡と混じることが少なく独自生を持ちつつも、何タイプかに分離され、バラエティーを持つことは、その作り手が多いこと、換言すればこの地域において長いこと土器作りが続けられたことを暗示しているものと判断される。数少ない点数の分析からでは憶測と成らざるを得ない点が多く、比較試料の増加を待たなければならないが、過大評価はできないものの、考古学的型式学的な分類分析と自然化学的な分析結果が整合性を持つ傾向にある点は、型式学的方法論においてその傍証として受け止められるべきものと思われる。四反歩遺跡出土土器群の型式学的な検討から得られた土器群の新旧の要素は、厳密ではないにしても胎土分析等からも、古い要素のものは古いものどうして、新しい要素のものは新しいものどうして纏まる傾向にあることが確信ながらも理解されたのである。

VIII. 発掘調査の成果と課題

1. 燃糸文系土器群の検討

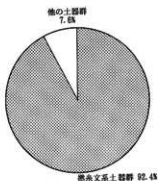
四反歩遺跡では、縄文時代草創期から後期にかけて20000点に近い土器群が出土している。特に、四反歩遺跡南地区では燃糸文系土器群を主体として12000点余りの土器群が出土しており、ここでは南地区出土の土器群を中心にして、燃糸文系土器群について分析してみたい。

四反歩遺跡南地点では包含層に多量の遺物が包含されていたため、遺構を調査する前に遺物のドット処理を行い、その結果11460点の土器群をカウントした。しかし、表面採集やグリッド単位及び遺構単位で取り上げている遺物も多く、合わせると1万数千点を数える土器群を出土したことになる。その9割以上が燃糸文系土器群である。従って、検討は例外を除いてカウントした土器群に対象を絞って行うことにした。

〔統計処理〕

南地区からは、草創期から後期までの土器群が出土しており、内訳は以下の通りである。

燃糸文系土器群	10594点		92.4%
沈線文系土器群	100点		0.9%
条痕文系土器群	384点		3.4%
関山式	62点	前期	2.8%
黒浜式	27点		
諸磯 a 式	225点		
諸磯 b 式	8点	中・後期	0.5%
勝坂式	24点		
堀之内式	36点		
計	11460点		100.0%



燃糸文系土器群は10594点で全体の92.4%を占めており、本遺跡が燃糸文系を主体とした遺跡であることが理解される。燃糸文系土器群は井草Ⅰ式から終末の所謂東山式までを含み、一括的分類は有効性を欠くが、単純な施文別の内訳と口縁部の含有率、総体からの割合を第5表に示した。

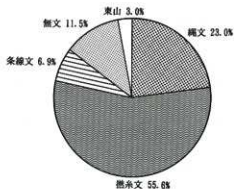
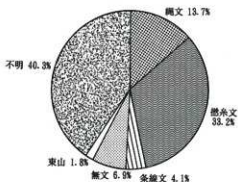
〔燃糸文系土器群の分類〕

燃糸文系土器群の分類はグリッド出土土器の項で詳説してあるが、多岐にわたるためここでもう一度、簡潔に纏めることにする。分類は口縁部破片を中心とする。

燃糸文系土器群は第Ⅰ群土器として纏められ、第1類～第5類に分類された。さらに各々種に細別されるが、類、種を略記する。種の分類は口唇部肥厚度合、口唇部形態、器形の相違を主な要素として行った。その組み合わせは以下の様である。また、口唇部整形と施文の関係も重要な要素となる。

第5表 施文別分類表

施文原体	口縁／(全体)	胴部	合計	合計／(10594)	合計／確定数 (6317)
縄文	293(20.1%)	1160	1453	13.7%	23.0%
燃糸文	426(12.1%)	3086	3512	33.2%	55.6%
条線文	63(14.4%)	375	438	4.1%	6.9%
無文	106(14.6%)	621	727	6.9%	11.5%
東山	37(19.8%)	150	187	1.8%	3.0%
不明	257(6.0%)	4020	4277	40.3%	
総計	1182(11.2%)	9412	10594	100.0%	



口縁部要素の組み合わせ



口唇部整形と施文の関係

1. 整形→施文



2. 施文→整形



3. 施文→全面整形



1類は縄文施文土器である。

- 1-1…口唇部文様帯+口縁部文様帯+胴部文様帯の3文様帯構成。
- 1-2…口唇部文様帯+胴部文様帯の2文様帯構成。
- 1-3…口端部異方向施文。
- 1-4…口縁部異方向施文。
- 1-5…口縁部幅広異方向施文。
- 1-6…肥厚・丸頭・外反口唇、口唇部整形→口端部からの縄文施文。
- 1-7…肥厚・丸頭・外反口唇、口端部からの縄文施文→口唇部整形。

- 1—8…大肥厚・丸頭・外反口唇、口唇部からの縄文施文→口唇部整形、非常に浅い施文。
- 1—9…肥厚・丸頭・外反口唇、口縁部からの縄文施文→口唇部全面整形。
- 1—10…肥厚・角頭・外反口唇、口唇部整形→口端部からの縄文施文。
- 1—11…肥厚・角頭・外反口唇、口端部からの縄文施文→口唇部整形。
- 1—12…肥厚・丸頭・直立口唇、口縁部に凹帯を持つ。
- 1—13…無肥厚・丸頭・外反口唇、口唇部整形→口端部からの縄文施文。
- 1—14…無肥厚・丸頭・直立口唇、口唇部整形→口端部からの縄文施文。
- 1—15…無肥厚・丸頭・直立口唇、口端部からの縄文施文→口唇部整形。
- 1—16…無肥厚・丸頭・内彎口唇、口縁部からの縄文施文→口唇部整形。
- 1—17…口縁部無文部設置、胴部整形→縄文施文→口唇部整形または口縁無文部ナデ整形。

第2類は燃糸文施文土器である。

- 2—1…口唇部文様帯+胴部文様帯の2文様帯構成で、口縁部に側面圧痕文あり。
- 2—2…口端部異方向施文、口縁部に側面圧痕文あり。
- 2—3…口唇部文様帯+胴部文様帯の2文様帯構成。
- 2—4…口縁部異方向施文。
- 2—5…肥厚・丸頭・外反口唇、口唇部整形→口端部からの燃糸文施文。
- 2—6…肥厚・丸頭・外反口唇、口端部からの燃糸文施文→口唇部整形。
- 2—7…肥厚・丸頭・外反口唇、口縁部からの燃糸文施文→口唇部全面整形。
- 2—8…肥厚・角頭・外反口唇、口端部からの燃糸文施文→口唇部整形。
- 2—9…肥厚・丸頭・直立口唇、口縁部に凹帯を持つ
- 2—10…無肥厚・丸頭・外反口唇、口端部からの燃糸文施文→口唇部整形。
- 2—11…無肥厚・丸頭・直立口唇、口端部からの燃糸文施文→口唇部整形。
- 2—12…無肥厚・角頭・直立口唇、口端部からの燃糸文施文→口唇部整形。
- 2—13…無肥厚・角頭・内彎口唇、口縁部無文部設置。
- 2—14…肥厚・丸頭・外反口唇、口縁部からの燃糸文施文→口端部面取り状整形。
- 2—15…口縁部無文部設置、胴部整形→燃糸文施文→口唇部整形または口縁部ナデ整形。
- 2—16…口縁部無文部設置、胴部整形→燃糸文施文→口縁部ナデ整形による燃糸文の磨消。
- 2—17…燃糸文帯状施文、口唇部にバラエティー有り。

第3類は条線文施文土器である。

- 3—1…口縁部異方向施文。
- 3—2…肥厚・丸頭・外反口唇、口端部からの条線文施文→口唇部整形。
- 3—3…無肥厚・丸頭・外反口唇、口端部からの条線文施文→口唇部整形。
- 3—4…無肥厚・丸頭・内彎口唇、口縁部からの条線文施文→口唇部整形、若干無文部設置。
- 3—5…無肥厚・角頭・直立口唇、口縁部からの条線文施文→口唇部全面整形。
- 3—6…無肥厚・角頭・内彎口唇、口縁部若干無文部設置。
- 3—7…無肥厚・角頭・外反口唇、口縁部無文部設置。

3-8…口縁部無文帯設置、側面圧痕による口縁部無文帯区画。

第4類は無文土器である。

4-1…肥厚・丸頭・外反口唇。

4-2…肥厚・丸頭・外反口唇、口端部面取り状整形。

4-3…肥厚・角頭・外反口唇。

4-4…無肥厚・丸頭・外反口唇。

4-5…無肥厚・丸頭・直立、口縁部横位のナデ整形。

4-6…無肥厚・丸頭・内彎、口縁部に凹帯を持つ。

4-7…無肥厚・角頭・直立。

第5類は口縁部に沈線文を巡らす土器である。

5-1…1本の沈線文を巡らす。

5-2…2本の沈線文を巡らす。

以上の分類は特徴的な型式学的特徴を抽象化した分類であるため、土器群が厳密な規定で分類されていないものも存在する。また、非常に似通った土器群でもあるため、概念化した分類からでは分類を誤認している可能性もある。

しかし、以上の様に細かく分類された土器群も、共通する器形や、施文手法等で次のA～Pにグループングすることが可能である。各々の対応関係は第6表に纏めてある。

Aグループ…1-1

3文様帯構成の井草Ⅰ式土器である。1点のみの出土である。

Bグループ…1-2、2-1・2-3

口唇部上端面に施文があり、井草Ⅱ式に比定される土器群で、12点出土している。

Cグループ…1-3、2-2

口縁部上面から口縁部にかけての変換点である口唇外端部に、幅狭の異方向施文を行うものである。11点出土している。

Dグループ…1-4、2-4、3-1

口縁部の最上端部に幅狭の異方向施文を行うものである。34点出土している。

Eグループ…1-5

口縁部に幅広の異方向施文を行うもので、口縁部に無文部を設けるものも存在する。6点出土している。

Fグループ…1-6・1-10・1-13・1-14、2-5

口唇部を整形した後に、口端部から原体を施文するグループである。器形に対応関係にあるものは、肥厚・丸頭・外反の1-6・2-5である。123点出土している。

Gグループ…1-7・1-11・1-15、2-6・2-8・2-10・2-11・2-12、3-2・3-3、4-1・4-3・4-4・4-5・4-7

口端部から原体を施文した後に、口唇部に整形を施すグループで、無文土器に関しては口唇部形態で分類したため、全てこのグループに属するかは不確定要素がある。器

第6表 土器群のグルーピング表

主な型式表徴		1類-種 (a)	2類-種 (a)	3類-種 (a)	4類-種 (a)	5類-種 (a)	合計/総数(%) (B5/a)
A	3文様帯構成	1(1)					1(0.1%)
B	2文様帯構成	2(9)	1(1) 3(2)				12(1.3%)
C	口縁部異方向施文	3(9)	2(2)				11(1.2%)
D	口縁部異方向施文	4(24)	4(8)	1(2)			34(3.7%)
E	口縁部幅広異方向施文	5(6)					6(0.7%)
F	口唇整形	肥厚・丸頭・外反 6(49)	5(39)				88(9.5%)
	↓	肥厚・角頭・外反 10(9)					9(1.0%) 123
	施文	無肥厚・丸頭・外反 13(10)					10(1.1%) (13.3%)
		無肥厚・丸頭・直立 14(16)					16(1.7%)
G	施文	肥厚・丸頭・外反 7(71)	6(125)	2(12)	1(28)		236(25.4%)
	↓	肥厚・角頭・外反 11(13)	8(14)		3(6)		33(3.6%) 424
	口唇整形	無肥厚・丸頭・外反 15(30)	10(8)	3(20)	4(15)		43(4.6%) (45.7%)
		無肥厚・丸頭・直立 11(40)	11(40)		5(8)		78(8.4%)
H	施文→	肥厚・丸頭・外反 8(14) 9(17)	7(65)				96(10.4%) 107
	口唇全面整形	無肥厚・角頭・直立		5(11)			11(1.2%) (11.6%)
I	肥厚・丸頭・外反 口唇面取状整形		14(8)		2(21)		29(3.1%)
J	肥厚・丸頭・直立 口縁部回帯	12(6)	9(9)		6(7)		22(2.4%)
K	無肥厚・丸頭・内湾	16(4)		4(3)			7(0.8%) 17
	無肥厚・角頭・内湾		13(5)	6(5)			10(1.1%) (1.9%)
L	口縁無文部設置	17(5)	15(35)	8(7)			47(5.1%)
M	口縁無文帯設置		16(10)	7(3)			13(1.4%)
N	燃糸帯状施文		17(42)				42(4.5%)
O	横走燃糸文		18-h(3)				3
P	東山式					(37)	37(4.0%)

形で各類の対応関係を見ると、次の様である。合計424点出土している。

肥厚・丸頭・外反…1—7・2—6・3—2・4—1

肥厚・角頭・外反…1—11・2—8・4—3

無肥厚・丸頭・外反…2—10・3—3・4—4

無肥厚・丸頭・直立…1—15・2—11・4—5

無肥厚・角頭・直立…2—12・4—7

Hグループ…1—8・1—9、2—7、3—5

口縁部から原体を施文した後に、口唇部全面に磨き状の整形を施すものである。器形との対応関係は、肥厚・丸頭・外反の1—8・1—9、2—7である。107点出土している。

Iグループ…2—14、4—2

肥厚・丸頭・外反の器形で、口唇外端部に面取り状の強い整形を施すものである。29点出土している。

Jグループ…1—12、2—9、4—6

肥厚・丸頭・直立の器形で、口縁部に凹帯が巡るもの。22点出土している。

Kグループ…1—16、2—13、3—4・3—6

口縁部が内彎する器形を呈し、口縁部に若干の無文部を持つものである。対応関係は

無肥厚・丸頭・内彎…1—16・3—4

無肥厚・角頭・内彎…3—13・3—6

であり、合計17点出土している。

Lグループ…1—17、2—15、3—8

口縁部に無文部を設ける土器群である。47点出土している。

Mグループ…2—16、3—7

口縁部に無文部を設置する土器群である。13点出土している。

Nグループ…2—17

燃糸文を帯状に施文するものである。器形には各種が存在し、42点出土している。

Oグループ…2—18—h

横走燃糸文を施文するものである。3点出土している。

Pグループ…第5類

口縁部に沈線文を巡らす土器群で、所謂東山式である。37点出土している。

〔施文原体の検討〕

四反歩遺跡南地区出土の燃糸文系土器群に施文される原体には、1段の無節縄文、2段の単節縄文、3段の複節縄文、0段の燃糸文、1段の燃糸文、燃糸文を原体とする絡条体条線文がそれぞれ存在する。

縄文

縄文は1段の無節縄文、2段の単節縄文、3段の複節縄文が存在する。無節縄文は141点を数えたが、0段の燃糸文との関係から、明瞭に無節縄文と判断されるものを指摘できなかった。同様な理由で、0段の燃糸文も識別が困難な状況であった。通常は無節縄文より条間が開いていたり、0段の燃糸文より条が湾曲している等の状況から、どちらとも判断し兼ねたのが実情である。また、2段の単節縄文は0段と1段にあまり強い燃りを加えずに2段目を強く燃ると、節の輪郭が不明瞭となり、繊維痕のみが強調されて、無節縄文に類似する軌跡を残す。しかし、この場合、良く観察すると条の太さに変化があり、細いところと太いところが交互に現れているのが観察される。無節縄文規規則正しく繊維の圧痕が現れていないことから、識別される場合が多い。従って、無節縄文は存在してはいるが、自信をもってカウントできない。

2段の単節縄文は上述したものと、比較的節が細かく明瞭な縄文と、節が大きく節の圧痕が不明瞭なものが存在する。感覚的な比較であるため正確な比率は出し得ないものの、細かくて明瞭な縄文が6割、節の大きい縄文が3割、節の不明瞭な縄文が1割程度であると思われる。

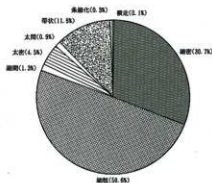
3段の複節縄文は、同一個体と思われる破片が3点出土している。原体はRLRである。

縄文の原体は最終段階がR燃りのものが圧倒的に多く、1段の無節縄文と思われるものはR、2段の単節縄文ではRL、3段の複節縄文ではRLRが多いことは、大変興味を持たれる点である。後に触れるが、燃糸文では1段Rが圧倒的に多いことを考慮すると、最終段階をR燃りにすることに拘っていることが理解される。単節LRは148点を数え、10.1%を占める。

燃糸文

燃糸文は上述の0段及び1段、2段の原体の存在が想定されるが、2段の燃糸文は存在しない様である。また、0段の燃糸文は54点を数えることができたが、不明瞭な点が多い。1段Lの燃糸文は415点を数え、11.8%を占めている。燃糸文は1段Rが圧倒的に多い。施文による燃糸文の分類は、次の様である。

種類	点数	／合計
a 細密燃糸文	1180	30.7%
b 細粗燃糸文	1779	50.6%
c 細間燃糸文	46	1.3%
d 太密燃糸文	159	4.5%
e 太間燃糸文	31	0.9%
f 带状燃糸文	406	11.6%
g 条線化燃糸文	8	0.3%
h 横走燃糸文	3	0.1%
合計	3512	100.0%

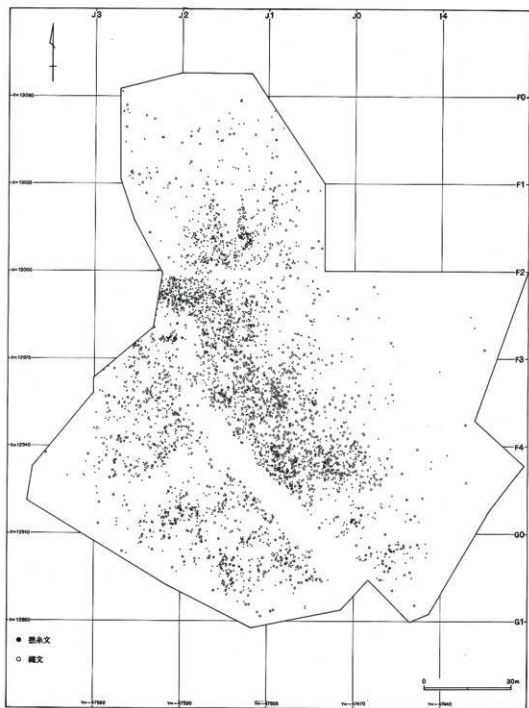


細密、細粗、带状施文の燃糸文を合わせるとおよそ全体の9割を占め、細密が3割、細粗が5割と圧倒的に多く主体を占めている。他の燃糸文も細い原体が多く、太い原体はおよそ5分程度である。燃糸文は口縁部から縦位に垂下することを常とするが、やや斜位に垂下施文されるものも多く認められる。また、条線化する燃糸文が存在することは、条線文が燃糸文の絡条体を原体としていることの証左ともなる。さらに、3点ではあるものの横走燃糸文が出土していることは重要な意味を持つものであり、それらが所属時期を決定する重要な鍵となる。

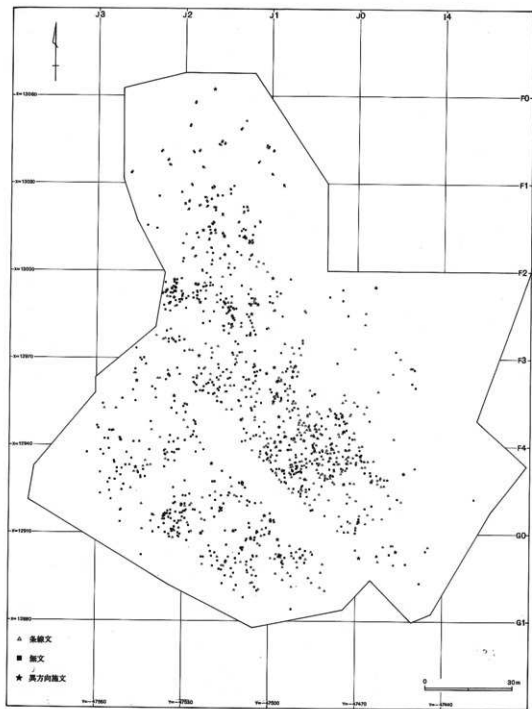
条線文

上述の如く、燃糸文の絡条体原体を使用して条線文を施文している可能性が高い。条線文にはおよそ細く密なもの、細く間隔の開くもの、太く密なもの、太く間隔の開くもの、带状に施文するものが存在し、それぞれが燃糸文の施文手法に対応するものである。従って、条線文土器の所属時期は、燃糸文施文手法の所属時期に準拠する可能性が高い。

以上、燃糸文系土器群にみられる縄文、燃糸文、条線文、無文、及び口縁部異方向施文の土器群の分布を第272図と第273図に示した。分布ではそれぞれが渾然一体となった様相がみられ、F3J0区にやや縄文が目立つ程度で、際立った偏在傾向はみられない。裏を返せば、それぞれが親密な関係にあることを物語っているものと判断される。なお、無文土器でも東山式は明らかに分布が異なり(第99図参照)、この分布図の中からは省いている。



第272図 縄文・弥生文施文土器分布図



第273図 条線文・無文・異方向施文土器分布図

〔四反歩遺跡における撚糸文系土器群の変遷〕

四反歩遺跡出土の撚糸文系土器群に対して、口縁部を中心にした器形と施文原体について型式学的なグルーピングを行ってきたが、ここではそれぞれの土器群の縦の繋がりにある型式学的な変遷を検討したい。

先に、A～Pにグルーピングされた土器群や原体別に検討した土器群は、段階的なステージを形成するものとして、即ち型式を構成する要素として大局的に統合される。また、それらの上下に連なる要素を型式学的に解釈することによって、変遷関係を把握することが可能となる。

四反歩遺跡の撚糸文系土器群は、次のⅠ～Ⅷ期の段階に統合して変遷付けられる。以下、順次段階を追って検討したい。なお、口縁部の点数によって土器群の占める割合を、傾向的に示した。また、土器群の変遷図は第274図から第276図に示した。

第Ⅰ期

Aグループの段階で、井草Ⅰ式に比定される段階である。土器は1-1の1点のみの出土であるため、詳細な内容は不明である。口唇部が若干肥厚して、大きく外反する器形を呈し、口唇部上端面と外端面の2段に単節RLを施文するもので、口縁部文様帯を比較的幅広く設定し、同じく単節RLを横位施文して斜縄文帯を構成する。3文様帯で構成される第1様式で、典型的な井草Ⅰ式の段階である。

第Ⅱ期

Bグループの段階で、井草Ⅱ式に比定される段階である。土器群は口唇部上端面と胴部に縄文を施文する1-2と、撚糸文を施文する2-1・2-3で構成される。1-2は肥厚する丸頭状口唇部が外反する器形を呈し、縄文施文は口唇部を整形した後に口端部への施文を行い、最後に口端部から胴部にかけての施文を行う破片が多い。また、撚糸施文の2-1では口唇部上端面施文の他に、口縁部に原体の側面圧痕を行っている。撚糸文施文の第2類土器では、口端部へ撚糸文を施文するため、角頭状口唇のものが多い。施文原体では、縄文が細かく節の明瞭なもの、撚糸文では細密なものが多い。

第Ⅲ期

CとFのグループで構成される段階である。この第Ⅲ期は、口唇部への施文がなくなる段階であるが、第Ⅱ期の系統的要素を受け継ぐ段階でもある。第Ⅱ期の1-2にみられた口唇部上端面の施文は、口唇部と胴部の境目である口唇外端部へと移動し、器形には殆ど変化はみられないが、微妙な施文帯の変化が窺える。同様なことは撚糸文土器にも言える。2-2は口縁部に原体の側面圧痕文を施文する点は2-1からの系統的な要素を受け継ぐが、口唇部上面への施文がなくなり、口縁部への異方向施文へと変化する。側面圧痕文より上の口縁部は、口唇部と想定すれば異方向施文する部分は口唇外端部に相当し、そこへの施文は縄文施文である1-3と相同的関係といえる。従って、型式学的な根拠から1-3、2-2は第Ⅱ期からの微妙な変遷と、相互の同時性が証明されることになる。

上記の継承要素を含むものの第Ⅲ期の最大の特徴は、口唇部文様帯を払拭する点にある。大半の土器群が口唇部への施文を行わない代りに、口唇部形態にバリエーションが生じる。そして、口縁

部への施文は、口唇部整形の後に口端部から縄文等を施文する手法へと変化する。この場合の施文は口唇部にかかる部分から行われるものも存在し、第Ⅱ期の口縁部施文からの系統性であることが容易に理解される。つまり、口端部からの縄文施文は第Ⅱ期の1—2の縄文施文手法と全く同様の手法であり、1—2の口唇部上端面の施文が1—3の口端部施文へと変遷すると仮定すれば、第Ⅲ期の1—3、1—6は第Ⅱ期の1—2を母体として分岐しながら生成されたものと解釈することが可能となる。故に、1—3、1—6の同時性も、型式学的に保証される。

口唇部上端面の施文から解放された口唇部は、肥厚丸頭状の1—6、肥厚角頭状の1—10、無肥厚丸頭で外反傾向の強い1—13、直立する1—14等の形状が揃い、肥厚丸頭状で燃糸文を施文する2—5も出現する。口唇部形態にバラエティーが認められるものの、口唇部を整形した後に口端部から施文を開始する点で共通する。第Ⅲ期では縄文施文が圧倒的に多く、2—5は縄文施文土器の器形に燃糸文を施文しているものと思われる。原体では縄文は節が小さく明瞭なもの、燃糸文は細密なものが多い。

第Ⅲ期は口唇部文様帯を払拭し、新たなる土器群の成立期であり、燃糸文系土器群の中にあって1つの大きな変革期として位置付けられる。夏島式の古い段階に相当する。

第Ⅳ期

DとGのグループで構成される段階である。第Ⅲ期からの大きな変化は無く、緩やかな変化を遂げている段階で、基本的には第Ⅲ期の口唇部形態を踏襲し、縄文等の施文手法が変革する段階である。つまり、口唇部整形後の原体施文が、口端部から施文した後に口唇部を整形する手法へと変化するものである。この手法は各類に共通してみられる変革である。



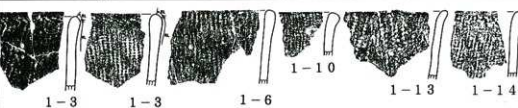
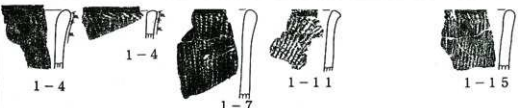

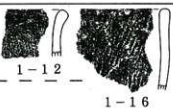

この段階でも、口縁部に異方向施文を行う土器群が存在する。縄文施文土器では第Ⅲ期の口端部異方向施文1—3が、やや施文位置が下がり、口縁部の最上部に施文する1—4へと変化する。微妙な変化であるが、口唇部の整形には他の土器群と同じ様相が窺われる。また、燃糸文施文土器は、2—2の側面瓦痕文部分に横位の燃糸文を施文した2—4へと変遷する。縄文、燃糸文土器とも丸頭状の肥厚する口唇部が外反する器形を呈しており、縄文施文土器は第Ⅲ期からの器形的な変化が少なく、燃糸文施文土器は器形が縄文施文土器により類似してくる。また、各種の口唇部形態の土器群は殆どそのまま継承され、口唇部の整形が前段階と変わってきている。感覚的ではあるが、幾分口縁部が立ち気味になり、口唇部が丸く肥厚度合が小さくなる傾向にある。

また、燃糸文施文土器の占める割合が大きくなり、前段階ではみられない口唇部形態の燃糸文施文土器が増えている。これらは、縄文施文土器の器形を燃糸文施文土器が受け継いでいるものと判断される。第Ⅲ期にみられた縄文土器の燃糸文土器化傾向が、助長されているものと判断される。

燃糸文施文土器の増加に伴って、燃糸文を原体とする絡条体条線文土器が出現するものこの段階の特徴である。条線文施文土器でも、口縁部への異方向施文土器が少数存在する。条線文も燃糸文と対応するものであり、細密な条線文が多い。

更に、明確な伴出関係を型式学的には証明できないが、他の有文土器の口縁部と類似する無文土器が、この段階から増えてくるものと思われる。

第Ⅳ期は燃糸文施文土器の増加、条線文施文土器の出現、無文土器の増加が大きな特徴として挙

		1類 (繩文)	
I期	井草 I		1-1
II期	井草 II		1-2
III期	夏島古		1-3 1-3 1-6 1-10 1-13 1-14
IV期	夏島新		1-4 1-4 1-7 1-11 1-15
V期	稻荷台古		1-5 1-5 1-8 1-9
VI期	稻荷台新		1-12 1-16
	稲荷台古		1-17
VII期	稻荷原新		
VIII期	東山		

第274図 四反歩遺跡土器変遷図 (1)

2類 (摺糸文)

I 期	
II 期	
III 期	
IV 期	
V 期	
VI 期	
VII 期	
VIII 期	

第275图 四反步遺跡土器変遷図 (2)

	3類 (条線文)	4類 (無文)
I期		
II期		
III期		
IV期		
V期		
VI期		
VII期		
VIII期		5類 (東山)

第275図 四反歩遺跡土器変遷図 (3)

げられ、全体的には第Ⅲ期からの緩やかな変遷で捉えられる段階である。夏島式の新しい段階に相当する。

第Ⅴ期

EとHのグループで構成される段階である。第Ⅳ期と同様に、前段階からの緩やかな型式変化として捉えられる段階であり、口唇部形態が一様にやや肥厚した丸頭状を呈し、やや外反する器形になる段階で、バリエーションが乏しくなる段階である。第Ⅳ期からの大きな変化は、口唇部の整形が口唇部全面に及ぶことであり、その結果口唇部が丸頭状を呈し良く研磨された状態となることである。縄文等の施文は必然的に口唇部下の口縁部から施文するものが多くなり、口端部からの施文も、口唇部が全面整形されるため同様となる。中には、口唇部下にやや間隔を開けて施文するものも出現する。

この段階においても、口縁部異方向施文の1—5が存在するものと思われる。1—5は口唇部形態、器形等が他の土器群と同様であり、第Ⅳ段階の1—4よりは新しく位置付けられるものである。1—4と比較して、口縁部への異方向施文幅が広くなり、胴部の施文との間に無文部を設けるものも存在する。後者の土器に関しては井草Ⅱ式及びその直後の段階に、口縁部に無文部を設定する土器が存在するため、器形、口唇部形態、整形等をよく比較検討しないとこの段階の土器と誤認する可能性がある。

縄文施文土器はより割合を減じる方向に、燃糸文施文土器が増加する傾向にあるが、無文土器に関しては型式学的な変化が捉えずらく、明瞭に区分することができない。有文土器は器面の磨きが良く行われてから施文されるものが多く、縄文はやや浅い施文となる傾向にある。燃糸文は2—6に分類した中でも、条間隔が開くもの、やや太い燃糸文等がこの段階に相当するものと思われる。燃糸文が太くなることに呼応して、条線文も太いものが出現する。

第Ⅴ期は第Ⅳ期の系統を引くものの、総体的に齊一化の進んだ段階で、型的にも諸要素が飽和状態にある段階である。稲荷台式の古い段階に相当する。

第Ⅵ期

I・J・K・L・Nのグループで構成される段階である。第Ⅲ期から第Ⅴ期にかけて系統的に継承されて飽和状態を迎えた型式要素に、変化の兆がみられる段階である。口縁部異方向施文土器がなくなり、縄文施文土器が減少する傾向は増し、燃糸文施文土器がさらに増加する。口唇部が再び外側に肥厚し始め口縁部に凹帯の巡る1—12や、口唇外端部に面取り状の強い整形を施す2—14、4—2、口縁部が緩く括れて凹帯が巡る2—9、4—6、口唇部が無肥厚で内彎する器形を呈する1—16、2—13、3—6等が出現する。これらの土器群も第Ⅴ段階からの緩やかな変化として捉えられるが、次なる土器群への緩やかな胎動でもある。器形は口縁部の角頭化が進み、内彎気味に直立する傾向が強くなり、口縁部の括れ等が目立つ様になる。内彎化傾向が進んで、口唇外端部に強い削り状の整形が施されたり、口唇部外側が肥厚する器形となる。特に、口唇部外端面の整形は、この段階のメルクマールともなる特徴で有文土器のみならず、無文土器をも識別可能な特徴となっている。

器形的な変化だけでなく、施文にも変化が生じる。口縁部に無文部を設ける1—17、2—15、

2—16、3—8、帯状の燃糸文を施文する2—17、鋸歯状の条線文を施文する3—4等も出現する。口縁部に無文部を設ける土器群は、次の口縁部無文帯を設定する土器群の前身となる。縄文施文土器はさらに減少し、無文土器が増加するが地域的な様相も加味される。稲荷台式の新しい段階に比定される。

第Ⅶ期

MとOのグループで構成される段階である。土器群が大きく変革する段階であるが、本遺跡では極僅かの土器群が出土しているのみである。この段階の最大の特徴は口縁部無文帯を設定することであり、2—16では燃糸文を磨消して口縁部無文帯を形成する。3—7は条線文の上から結条体原体の側面圧痕文を口縁部に1状施文して、無文帯を区画する。口唇部は無肥厚の角頭状を呈し、直立する器形を呈する。また、口縁部は存在しないが、横走燃糸文を施文する2—18—hが存在する。この横走燃糸文は、大浦山式土器の影響を受けて生成されたものと思われ、破片の一部には口縁部無文帯を区画する沈線文が現存している。稲荷原式の新しい段階である。

第Ⅷ期

Pのグループで構成される段階である。燃糸文系土器群最終末の段階で、口縁部に1～2本の沈線文を施文する段階である。所謂東山式及び花輪台Ⅱ式に比定される段階である。2本沈線文を有する土器の方が、若干新しくなる可能性が高い。

2. 夏島式及び稲荷台式土器の細分について

〔研究略史〕

前項では四反歩遺跡出土の燃糸文系土器群について型式学的な検討を経た後に、第Ⅰ期から第Ⅷ期にわたる変遷過程を検討してきた。その結果、本遺跡では型式学的な連鎖が認められるものの、所謂夏島式と稲荷台式を中心とすることが理解された。ここでは両型式を再検討しつつ、本遺跡の段階別に設定された土器群について編年的な位置付けを検討したい。

燃糸文系土器群がいかに型式設定され、現在の編年的位置付けが確定されてきたかについては、先にも触れたことがあり(金子1984a、1991)、諸氏の論考や報告書の考察にも詳細にわたる研究史が検討されているためここでは詳細は割愛し、夏島式と稲荷台式にまとを絞って論及したい。

燃糸文系土器群の研究は、1941年の白崎高保氏の稲荷台式の提唱(白崎1941)を嚆矢とする。その後、井草式(矢島1942)、栗原式(江坂1944)が提唱され、単純な稲荷台式から複雑な井草式への編年が考えられていた。今日の夏島式と同様な内容を持つ井草式も設定されたが(江坂1950)、やはり稲荷台式から井草式を繋ぐ位置付けが与えられていた。

この様な編年案は1950年神奈川県夏島貝塚(杉原・芹沢1957)、1951年同大丸遺跡(芹沢1957)の発掘調査によって一掃された。両遺跡の調査で井草式が下から、夏島、稲荷台式が上から層位的に出土したことから、複雑な井草式から単純な稲荷台式への変遷が明らかにされたのである。さらに、大丸遺跡における夏島式→稲荷台式という層位的な出土傾向や、夏島貝塚での単純様相の夏島式の検出等から、両者の型式的区分が可能とされ、今日的な井草・大丸→夏島→稲荷台→大浦山・花輪台Ⅰ→平坂・花輪台Ⅱという燃糸文系土器群の編年大綱が完成されたのである(芹沢1954)。

その後、小林達雄氏が燃糸文系土器群に対して様式論を展開し、研究法に新しい局面を迎えるが(小林1966)、編年の序列は今日でも不動のものとなっている。

夏島式は夏島貝塚における純粋な夏島式存在と、大丸遺跡の層位的な出土傾向によって確立されたかにみえたが、多分に型式学的な編年要素を残すために、後日稲荷台式との関係から存否論、細分論が展開される。1972年岡本孝之氏は、大丸遺跡の層位を検討し両型式の分布論を基本にして、夏島式と稲荷台式の分離を初めて否定した(岡本1972)。翌年、白石浩之氏は岡本氏の否定論を受けて、夏島古→夏島新・稲荷台古→稲荷台新という編年案を示し、夏島式と稲荷台式の一部併存説を唱えた(白石1973)。具体的な土器群の分析に欠け、各段階の土器群に不明瞭な部分を残すが、各遺跡における様相の違いを指摘するとともに、今日的な課題である夏島式から稲荷台式への緩やかな型式区分について、正面から問題提起した最初の論考であろう。その後、1974年鈴木道之助氏は榎峠遺跡の報分にて岡本説を支持して、時間的な差異を認めるもの夏島式、稲荷台式の型的な分離を否定した(鈴木1974)。

その後、燃糸文系土器群に関する多くの報告が刊行されるが、具体的な夏島式否定論はなく、むしろ、型式学的な見地から細分案が活発となる。1982年、井口直司氏は多聞寺前遺跡の報文(井口1982)で、井草Ⅱ式からの系統的な変遷過程を把握し、大丸遺跡のⅢ・Ⅳ類とⅤ・Ⅵ類土器とを参考にした上で、夏島式を口唇部文様を持たず大丸式との差異の少ない夏島Ⅰ式と、従来ある夏島式を夏島Ⅱ式として理解した。また、翌年の1983年、早川泉氏は池ノ上遺跡の報文で、夏島式や稲荷台式の単独遺跡の存在や、燃糸文施文手法の変遷等から夏島・稲荷台式土器分離論を展開し、夏島Ⅰ式→夏島Ⅱ式→稲荷台Ⅰ式→稲荷台Ⅱ式を設定したが、なお土器群の実態が十分に説明されるものではなかった。

一方、稲荷台式については、1966年の安岡路洋氏による稲荷原式の提唱(安岡1966)以降、稲荷原式との関連で検討されることが多く、10年後の1976年谷井彪氏は鶴ヶ丘遺跡の報文(谷井1976)にて、無文化傾向の強い鶴ヶ丘遺跡C区の燃糸文系土器群を稲荷台式と稲荷原式の間位に位地付け、具体的な細分案を示した。稲荷台式は無文化への方向と、口縁部付近における施文変化を基準とした新しい様相の指摘が、遺跡の報文で行われる様になる(今橋1977、伊藤1979)。

この様な動向の中、1981年宮崎朝雄氏は稲荷台式以降無文土器までの土器群の変化に視座をすえ、地域的な様相を段階別に整理し、燃糸文系土器群終末期の様相を総体的に整理した(宮崎1981a)。この中で、稲荷原式を古新に細分して、稲荷台式新と稲荷原式古を併存させる考えを示した。以後、宮崎氏の編年案を叩き台として、資料の検討が行われることになる。同年、木の根No.6遺跡が報告され(宮1981)、東部地域の夏島以降花輪台式までの様相が明かとなり、新しいタイプの土器群も明らかにされ、稲荷台式は古新に二分された。新しいタイプつまり沈線文施文土器は後に木の根Ⅰ式、木の根Ⅱ式として設定され、木の根Ⅰ式が稲荷台新式段階に比定された(池田1984)。

また、1983年東京天文台構内遺跡が報告され、今村啓爾氏は縄文、燃糸文、無文の構成比を比較する中で、それぞれの構成比の増減は地域的な傾向のみならず時間的な傾向もみられることから、夏島・稲荷台期の複雑な様相を指摘した(今村1983)。同年、大宮台地では前原遺跡が報告され、青木秀雄氏は土器群の分析から、稲荷台式から稲荷原式への変遷と稲荷原式の無文土器への変遷過

程を明らかにした（青木1983）。

1984年筆者は稲荷台式の新段階から稲荷原新段階の土器群を出土した明花向遺跡B区の報告を行い、口縁部形態の推移に主眼を置き、稲荷台遺跡及び稲荷原遺跡出土土器の口唇部形態の比較から、稲荷台式→稲荷台式新→稲荷原式古→稲荷原式新の4段階細分を行った（金子1984）。

これらの研究動向に対して、1986年以降戸田哲也氏は夏島式、稲荷台式、稲荷原式について総合的な検討を行い、宮崎氏以来の大局的な編年案を呈示していく。まず、1986年には「ゆるやかな変化を持つ型式」として夏島式と稲荷台式をとりあげ、両極の土器群を呈示して口唇部形態の変化と施文の変化という観点から、夏島式と稲荷台式を厳然と区別すべきとした（戸田1986）。1987年には成瀬西No.2遺跡の住居跡出土土器の比較検討から、稲荷台式→稲荷原式古→稲荷原式新・花輪台Ⅰ式・大浦山式→花輪台Ⅱ式→平板式の編年案を示し（戸田1987）、翌年1988年に稲荷原式に対応する稲荷台式直系の土器を稲荷台Ⅱ式として型式設定した（戸田1988）。

その間、原田昌幸氏は「燃糸文系土器終末期の諸問題」と題して、「東山式」（原田1986）、「平板式」（原田1987）、「花輪台式」（原田1988）、「大浦山式」（原田1989）、「稲荷原式」（原田1990）をそれぞれ詳細に検討し細分案を呈示した。また、1991年にはそれまでの研究成果を教科書的に集大成し、時空的に広範な土器群に対して傾斜編年を基調とした編年案を完成させた（原田1991）。しかし、あまりにも細分されすぎた土器型式は、実態にそぐわない面も指摘されており（石井1991）、宮崎朝雄氏によって稲荷原新式段階の様相が地域ごとに検討された際に、先に戸田氏が指摘した稲荷原古式の内容とともに、批判が加えられている（宮崎1991b）。さらに、1992年原田氏は本町田上の山遺跡の報告を行い、住居跡出土土器を一括と捉え「若宮型土器」と「東山式c期・平板式d期」を同時期に認定し、傾斜編年の妙を披瀝している。

また、筆者は1991年小室上台遺跡の報告で、四反歩遺跡の燃糸文系土器群の分析とほぼ同様な分析方法で、稲荷台式を中心とする土器群を検討した（金子1991）。その結果、稲荷台式土器に3段階の変遷過程を把握し、従来の稲荷台式新が2段階に細分される可能性を示した。そして、一番新しい段階を稲荷原式古段階と併存する、戸田氏の提唱した稲荷台2式に相当させて考えた。一方、宮崎朝雄氏は氏の一連の研究の流れのなかで未検討であった、夏島式、稲荷台式土器を土器論として正面から検討し（宮崎1991a）、それぞれを古新に細分しつつも型式としては夏島→稲荷台古→稲荷台新・稲荷原古→稲荷原新・大浦山Ⅰ・花輪台Ⅰ→東山・平板古・花輪台Ⅱという編年体系を整備した。

以上、夏島式、稲荷台式に対して細分する考え方が大勢を占めているが、型式としての細分案つまり新型式の設定なのか、型式内での段階分けなのかを明確にしなければならない。細分型式を提唱するにはそれなりの手続きと、型式分けの明瞭なる根拠を必要とし、安易な新型式の提唱は混乱を招くのみである。段階細分においてもほぼ同様な手続きを経るが、継承要素が強く画期的な変化を指摘できない以上、Ⅰ式、Ⅱ式といった新名称を付けるよりは、新旧の要素で段階的に区分することの方が妥当と思われる。

〔夏島式・稲荷台式土器の段階別細分案〕

簡略ではあるが、近年の研究動向について夏島式と稲荷台式を中心に検討してきた。やはり、夏島式から稲荷台式への変遷は、戸田哲也氏や多くの研究者が説く様に「ゆるやかな変化を持つ型式」であることが再認識され、両型式に2段階の変遷過程を想定している場合が多い。しかし、明確な型式学的根拠が示されない場合が多く、全て緩やかな暫定的な変化という主観的な言葉に裏打ちされている。本遺跡で検討した段階別土器群の変遷推移も、まさしく同様の状況を物語っている。しかし、そうは言うものの、土器群は確実に変化しており、典型的な土器群を比較すれば夏島式と稲荷台式は容易に弁別されるのも事実である。

そこで、本報告ではこの様な土器群における微妙な変化を認識するため、可能な限りの分類を行い、それ等を統括する共通表徴を見出し、本来それらが組合わさって一時期を構成する段階の設定、つまり土器群が展開されるステージの設定を目標とした。文様帯構成、器形の変化、整形と施文の変化、施文手法の変化、施文原体の変化等を統合の基準とした結果、第Ⅰ期から第Ⅷ期の8段階の設定が可能となり、それぞれに対応する型式段階をも想定した。その結果、夏島式から稲荷台式に想定される段階は、微妙ではあるが着実に変化する段階として4段階が設定され、夏島式に相当する段階が2段階、稲荷台式に相当する段階が2段階に設定可能となった。それぞれ古新段階として認識したが、ここではその段階設定の当否を検討したい。

現在、夏島式を型式的な細分にせよ、段階的な細分にせよ2細分する考え方は、先に述べた様に井口直司氏(井口1982)、早川泉氏(早川1983)、原田昌幸氏(原田1991)、宮崎朝雄氏(宮崎1991a)等によって呈示されている。汎関東的に土器群を検討した宮崎氏は、段階的な細分の論拠を大丸遺跡の層位的な事実求めた。大丸遺跡の第Ⅴ層は稲荷台式を含まない夏島式が出土した層とされているが、実際には零細な資料である。また、大丸遺跡での第Ⅲ・Ⅳ類、第Ⅴ・Ⅵ類の型式学的な分類を以て古新の様相に当てる場合が多い。この大丸遺跡での検討が、後日夏島式の否定論、稲荷台式との一部併存説、夏島式の細分論へという三様の結論を導き出させるわけである。

井口氏は多聞寺前Ⅰ遺跡のE類土器を口唇部文様帯を持たないことから井草Ⅱ式と区別し、大丸遺跡の第Ⅲ・Ⅳ類に相当させて夏島式の古段階として夏島Ⅰ式を提唱した。そして、夏島貝塚出土土器と大丸遺跡の第Ⅲ・Ⅳ類土器との相違から、夏島貝塚出土土器を新様相として捉え夏島Ⅱ式を設定した。筆者が分析するに、夏島貝塚には井草Ⅱ式以降何段階かの土器群が少なからず含まれており、井草Ⅱ式直後の土器群で大丸第Ⅲ・Ⅳ式に相当する土器群もかなり含まれている。

宮崎氏は大丸遺跡と夏島貝塚出土土器を比較して、井口氏の細分を批判的に検証し、井草Ⅱ式直後の土器群を抽出して、夏島式古段階を想定した。そして、大丸遺跡の第Ⅲ・Ⅳ類と第Ⅴ・Ⅵ類を基本にして古新の様相を検討している。筆者も、宮崎氏の段階別細分案を支持するもの、把握する土器群に若干の違いがある。宮崎氏の古段階の土器群は、井草Ⅱ式からの系統性を重視することから口唇部の屈曲外反するものに主眼が置かれている。井草Ⅱ式段階の縄文施文土器と燃糸文施文土器の口唇部形態の相違や、地域的な土器群の相違も充分に加味されなければならない。

燃糸文系土器群は、口唇部から口縁部にかけて拘りを持つ土器群であり、「てぬきの方向性」により文様帯を減じて行くが、夏島式に至っても決して一樣な口唇部形態とはならず、稲荷台式の古

段階で齊一的となるものの整形法等に若干の系統性を残している。そして、新段階になって口縁部無文帯を獲得する方向性へと動き始めるが、常に口縁部に拘りを持ち続ける土器群である。従って、燃糸文系土器群の口縁部を読むことは、燃糸文系土器群を解説することへの最も有効な手段になるものと考えられる。

四反歩遺跡の第Ⅱ期は、縄文施文、燃糸施文の両者に、口唇部上面への施文を認める。故に、井草Ⅱ式に比定されるが、第Ⅲ期は第Ⅱ期からの微妙な変化を持つ土器群を含めた。口唇部文様帯を払拭する土器群が主体となるが、先に詳説したように口端部に異方向施文を持つ土器群も含まれる。これは縄文施文と燃糸文施文の両者に見られ、井草Ⅱ式から変革する要素として把握された。また、第Ⅱ期と第Ⅲ期の整形と施文手法の系統性から、これらの土器群が一つのステージを形成することが把握された。口唇部における異方向施文や側面瓦痕文等は、大丸遺跡では不明瞭であるが、夏島貝塚には存在しており、多聞寺前遺跡のD類に相当し、井草式を細分した篠原正氏のおよそ井草Ⅲ式(篠原1979)に相当する。口縁部付近に文様を持つものと持たないものがセットとなって、一つのステージを形成するものと思われる。この段階が夏島式の前段階として設定されるのである。口唇部整形後の口端部からの地文施文という特徴で統括した場合、口唇部形態にバラエティーがみられ、共に型式学的に1段階を構成する土器群として認識される。多聞寺前遺跡のD類・E類は本来一つの段階に存在していた可能性が高い。

口縁部に異方向施文を持つ土器と、胴部文様帯のみの土器群とを2本柱に据え、それぞれの変遷変遷を捉えることができる。口縁部異方向施文土器は、施文位置を若干ではあるが移動しており、口唇部や器形の変遷と合わせて、稲荷台式段階まで系統的に変遷を追うことが可能である。

また、胴部文様帯のみの土器群は、口端部からの地文施文→口唇部整形から、口縁部からの地文施文→口唇部全面整形へと変遷することが型式学的に追える。しかし、この両者を厳密に区別することは困難であり、器形、整形、地文施文の変化等、総合的な判断に委ねられる場合が多い。夏島式でも口唇部に若干無文部を設けるものがあり、口唇部整形の判断のみでは区分は難しい。

第Ⅲ期からの施文手法の変換期を第Ⅳ期として捉えたが、最も一般的な夏島式の段階であり、第Ⅲ期の構成をそのまま受け継ぐ段階である。そして、第Ⅴ期が稲荷台式の前段階であり、第Ⅳ期にみられたバラエティーが齊一的になる段階である。第Ⅳ期との識別が難しいが、やはり総合的な判断が必要とされる。そして、第Ⅵ期は土器群が口縁部無文帯を獲得する方向へと新しく胎動し始める稲荷台式の新段階であるが、四反歩遺跡では資料的に貧弱であり、その細分について言及できない。筆者は明花向遺跡(金子1984a)や小室上台遺跡(金子1991)の検討において、この時期は細分される可能性が高いことを既に指摘してきた。

第Ⅶ期は口縁部無文帯が確立する段階で、稲荷原式新段階、花輪台Ⅰ式、大浦山Ⅰ式に比定される段階である。四反歩遺跡からは大浦山式の影響と思われる横走燃糸文が出土しているが、稲荷原式新の土器は存在していない。燃糸文系土器群終末期の土器群を出土する近隣の遺跡には宮林遺跡があるが、東山式土器を出土するものの稲荷原式新の土器は出土していない。埼玉県西部の武蔵野台地では若干の稲荷原式土器が出土しているが(岡本1993)、北部においてはその実態が不明瞭である。また、群馬県の和田遺跡(若月1981)、中棚遺跡(富沢1985)、三室坊主林遺跡(原1989)で

は稲荷原式土器が出土していることから、この地域でもいずれ検出されるものと思われるが、稲荷原式の影響が少ない地域性を表しているものとも思われる。稲荷台式の系統を引く土器群が不明瞭で、認識されない様な形で残存している可能性もある。

第Ⅷ期は所謂東山式期であり、不明確ながらも4軒の住居跡を検出した。第8号住は東山式の新しい段階と思われる土器群が出土する第3号土壇に切られており、土壇の時期の土器群はグリッドからは検出されていない。原田氏のいう東山式C段階に比定され、東山段階の無文土器に新旧の様相の存在が看取される。しかし、原田氏の東山式a段階は、稲荷原式新段階の土器群との関係から承伏し難い。土器群の型式を考えた場合、系統性を持つ小型式と、ステージを構成する型式との関係を詰めなければならないであろう。埼玉県北西部は東山遺跡を始めとし、比較的東山式土器が目立つ地域であるが、その前段階との関係が不明瞭な地域でもある。現在、稲荷原式の系統変化で東山式までの変遷を説明付けることは可能であるが、東山式の中心は大宮台地ではなく、多摩丘陵から武蔵野台地を中心とすることは明瞭である。赤褐色で角頭状口唇を呈し、ドカンのような東山式土器が、何を母体として成立したか追究する必要がある。安易に稲荷原式のみ、その系統は求められないであろう。

四反歩遺跡での地文の変遷は、第Ⅲ期の夏島式古段階では縄文を主体とするが、第Ⅳ期の新段階で燃糸文が増加し、本来縄文系の土器群にも燃糸文が施文される様になり、燃糸文化が促進されるのが把握される。また、燃糸文の増加とともに条線文が出現し、無文土器も少量ではあるがそれに伴う。第Ⅴ期では主体を燃糸文土器とし、縄文土器は減少の一途を辿る。第Ⅶ期では燃糸文土器が大半を占める様になる。

本遺跡での夏島式、稲荷台式の分析が、汎関東的な分類基準足り得るかについては疑問が多く、特に井草式直後の夏島式古段階では東京湾沿岸地域と若干異なることは明らかである。しかし、少なくとも経験的、感覚的な分類よりも一つの目安になり得るものと思われ、胎土分析の結果も分類の統合に矛盾がないことを証明しており、今回の型式学的分類が基準の一つに成り得ることを間接的に証左している。

以上の分析を基にすると、本遺跡で検出された住居跡は出土遺物に混在が多く確定的な住居跡は少ないが、およそ第10号住、第15号住が第Ⅳ期に、第13号住、第14号住が第Ⅴ期に、第8号住、第9号住、第11号住、第12号住が第Ⅶ期に位置付けられる。

近隣の遺跡では、宮林遺跡第2号住(宮井1985)が第Ⅲ期に、立正大学熊谷校地内遺跡第1号住(野村1990)が第Ⅳ期に比定される内容を持つ。また、県内では第Ⅲ期に向原遺跡(金子1984b)、寿能泥炭層遺跡(大塚1984)、貝塚山遺跡(佐々木1985)、叭原遺跡(齊藤1985)、西大宮バイパスNo.4遺跡(山形1986)、第Ⅳ期に北通遺跡(佐々木1981)、東北原遺跡(安岡1981)、松木遺跡(青木1983)、鷲山遺跡(森下1983)、梅所遺跡(小倉1984)、第Ⅴ期に東中尾遺跡(安岡1964)、栗谷ツ遺跡(荒井1976)、駒前遺跡(宮崎1983)、明花向遺跡B区(金子1984a)、第Ⅵ期に鶴ヶ丘遺跡C区(谷井1976)、前原遺跡(青木1983)、井沼方遺跡(小倉1986)等の遺跡が挙げられる。

関東全体のこの時期の土器群については、宮崎氏の分析に詳しい(宮崎1991a)。各遺跡で新旧の継続的な土器群が混在している場合が多く、単一時期の遺跡を挙げるのは難しいが、およそ主体

となる土器群で分けると、第Ⅲ期に小山田No13遺跡（安孫子1983）、野山北公園内遺跡（高橋1991）、榎峠遺跡（鈴木1974）、第Ⅳ期に殿屋敷C遺跡（戸田1985）、大和田遺跡（岡部1983）、はけうえ遺跡（小田1980）、新東京国際空港No7遺跡A地点（西川1984）、第Ⅴ期に向原遺跡（佐々木1982）、東京天文台構内遺跡（今村1983）、中野木新山遺跡（今橋1977）、小室上台遺跡（金子1991）、第Ⅵ期に寺谷戸遺跡（鹿島1988）、成瀬西遺跡（戸田1990）、貫井遺跡（中西1978）、木の根遺跡（宮1981）等が挙げられる。

第Ⅲ期で新しい土器群を確立し、第Ⅵ期でさらに新しい土器群への胎動が始まり、第Ⅶ期で口縁部無文帯を持つ新しいスタイルの土器群を確立することを考慮すると、文様帯構成から捉えられる様式区分では、第Ⅲ期から第Ⅵ期を一つの様式として把握することが実態的であると考えられる。型式名称としての夏島式や稲荷台式を否定するものではないが、様式的な解釈の中では厳然と両者を区分する理由がない。両者を識別するのが困難な程似通っている土器群であればこそ、やたら型式名称に拘らず、実態としてのステージを細かく確立した後、改めて夏島式、稲荷台式の意義を問直す必要がある。今回の分析では夏島式、稲荷台式を一つの目安として分析しそれぞれに2段階の変遷を想定したが、細かく微妙な変革を捉えるには、細かい分析と大きな統合が必要なことを痛感した。本遺跡における夏島式と稲荷台式の細分案が、両型式の実態把握の叩き台になることを期待するとともに、燃糸文系土器群の研究を顧みれば、縄文土器研究のなかで進んでいるかの感を受けるが、その成立等を考える時、まだまだ奥深く研究の余地を多く残す土器群であることが実感されるのである。

なお、四反歩遺跡から検出された住居跡についても、様々な角度から検討する予定であったが、紙面の都合もあり、後日に期したい。

3. 燃糸文期の石器群の検討

〔燃糸文期の石器組成について〕

四反歩遺跡からは多量の燃糸文系土器群とともに、約8000点を越える石器群が出土している。これ等の石器群もほぼ燃糸文期に限定され得ることから、四反歩遺跡における燃糸文期の石器組成について検討してみたい。四反歩遺跡南地区の包含層からはドット処理した石器が7834点カウントされ、遺構やグリッド出土石器を加えると8000点を大きく越える。ここでは、カウントされた包含層出土の石器を中心として、分析を行いたい。

四反歩遺跡出土の石器群の内訳は第7表に示したが、大半が剥片及び礫類で全体の約9割弱を占める。製品に分類されるものは864点の約1割強であり、製品中の内訳は石鏃等の狩猟具が33点（3.8%）、石斧等の刃器が192点（21.7%）、敲石等の加工具が74点（8.3%）、磨石等の植物食加工具が565点（66.2%）であった。圧倒的に植物食加工具の割合が高いことが指摘される。

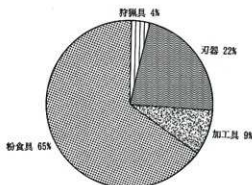
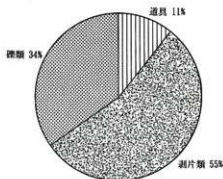
狩猟具

狩猟具は石槍、石鏃、石錘があり、動物質食料を獲得するのに必要な道具である。草創期から燃糸文期への道具の推移には著しい変化が看取される。

石槍は1点のみ検出されているが、粘板岩製で剥片の周縁部に調整刻離を施したのみのもので、

第7表 石器分類表

器種	点数	点数/小計 (%)	点数/合計 (%)	
石 槌	1	0.1		[打撃具] 33/864 (3.8%) [石錘]
石 鏟	27	3.1		
石 鏟	5	10.5		
鏟 器	37	4.3		
石 鏟	4	0.5	864/7834	
打 棒	22	2.5	(11.1%)	
磨 棒	15	1.7	192/864	
磨 器	114	12.7	(21.7%)	
磨 石	44	4.8		
有溝磨石	38	3.5	74/864 (8.31%)	
スタンプ	257	31.3		[加工具]
磨 石	243	27.6	565/864	[粉食具]
石 皿	65	7.3	(6.2%)	
小 計	864			
石 槌	87	1.3		[削片類]
フレイク	2815	56.7	8970/7834	
チップ	230	3.3	(28.9%)	
細 鏟	1983	28.2		
鏟	735	10.5	2048/8970 (28.7%)	
小 計	8970			
合 計	7834			



草創期の石槌とは基本的に異なる。石鏟は小型のものが多く、前期の遺構も検出されていることから、燃糸文期のものは若干少なくなるものと思われる。形状にバラツキがあり、特徴的なものは一様化されないが、小型の石鏟と、基部に抉り込みの少ないものが多い様に思われる。また、整然とした形を呈さなくとも、周縁加工を施しだけの不定形な石鏟も目立つ。

石鏟は遺跡全体からでは大小合わせて6点出土しており、燃糸文期で注目される石器である。その特徴は短軸側の側縁中央部に抉り込みを施すものである。あまり類例がないが、武藤康弘氏は堂ヶ谷戸遺跡出土のやや大形扁平で、短軸側縁部に抉りを入れる石鏟を燃糸文期に比定し、燃糸文期における網漁の存在と意義について指摘している(武藤1981)。また、四反歩遺跡に隣接する白草遺跡(川口1993)でも条痕文期の土壌から、短軸方向に抉りを入れる大形の石鏟が出土しており、早期に短軸方向に抉りを入れる石鏟が存在することは確かなことと思われる。前原遺跡(青木1983)でも燃糸文期の石鏟と思われるものが1点出土しており、やはり小形で短軸方向に抉りを入れている。また、常陸伏見遺跡においても燃糸文期の石鏟が大小2点出土しており、こちらは長軸方向に抉りを施している。さらに、平坂貝塚(岡本1953)からは長方形を呈する土器片鏟が1点出土しており、これは長軸方向に2箇所を紐掛の抉りを施すものである。一般的に土鏟、石鏟は長軸方向に抉りを施すものであり、短軸方向に抉りを施す石鏟が燃糸文期の1つのタイプであることは間違い

であろう。短軸方向の挟りが地域的なものなのか、または時期的なものなのかは類例を待って検討する必要がある。

刃器

刃器という言葉は適切なものではないが、搔器、石錐、打製石斧、磨製石斧、礫器等の刃部を持つ裁断加工具をまとめた。

搔器はノッチドスクレイパー、ラウンドスクレイパー、サイドスクレイパーがあり、素材はフォルンフェルスの剥片を主体とする。剥片には自然面を帯状に残すものと、片面に大きく残すものがある。前者については水村孝之氏が甘粕山遺跡群の報告の中で製作技法について言及しており(水村1980)、大方の剥片剥取技術が理解されるが、本遺跡では片刃状の礫器が多く出土しており、刃部形成の際に同種の剥片が得られていることから、この剥片も搔器の素材に成り得る可能性を指摘して置きたい。また、片面に大きく自然面を残す剥片は、第156図5の接合資料が存在することから、剥片剥取技法が理解される。先ず、扁平礫の周辺端部に打点を設け、打面に対して角度を付けて礫表を剥ぎ取る様に加撃を加える。何度か方向を変えて剥離を行うことによって、大きな剥片を得ることが出来るのである。接合はしないが、同種の扁平な母岩や、亀裂の入った扁平礫が数点存在するため、この種の剥片を取る一つの技法であることは間違いない。伊藤恒彦氏は三矢田遺跡の報文で、石斧における扁平礫の分割技法を指摘し、この種の技法が早期後半に遡る可能性を指摘しているが(伊藤1991)、本遺跡では石斧ではないにしても、早期前半の燃糸文期に既に扁平礫を素材とする分割剥片剥取技法の存在が確認されたのである。

石錐は刺突部分が短いもので、一見石錐の未製品の様子をうける。しかし、尖頭部に丁寧な整形を施しているものが、何点か存在することから石錐と認定されたものである。

打製石斧は長楕円形で礫端部に調整剥離を施しただけのものと、バチ形で背面に自然面をそのまま残すか大きく残すものとに分けられ、後者は形状と製作技法から条痕文期の石斧である可能性が高い。前者は燃糸文期の所産で、調整剥離の代りに磨きを施すと局部磨製石斧となる。扁平で長楕円形の形状は典型的な燃糸文期の石斧の形状であるが、大きいものには刃部を磨くものはない。小形の石斧には磨きを施し、大形の石斧には磨きを施さない傾向を指摘しておきたい。つまり、小形の局部磨製石斧が利器としての機能を有するとすれば、大形の石斧は利器と言うよりも土耕具としての機能が推察されるからである。

磨製石斧は前述した様に比較的小形のものが多い。磨製石斧の中には前期の乳棒状磨製石斧も含まれているが、扁平で礫の端部や周縁に研磨を施すものや、調整剥離で刃部を形成したのち研磨を施すものは燃糸文期の磨製石斧である。研磨によって良く形状を整えるものや、鑿状に刃部を磨き出すものも存在する。局部磨製石斧のソケット着装の可能性や機能の分化については前原遺跡で考察されているが(松村1983)、形状を整えている磨製石斧はソケット状の着装の可能性が高く、頭部に剥離痕を持つものが目立つ。この剥離が形状を整えるための調整剥離なのか、使用の際に付けられたものかは判断されないが、木製品の加工具としては木槌状の工具で頭部を叩いて使用する可能性も考えて置かなければならないだろう。実際、棒状の鑿状磨製石斧は頭部を叩く使用法が推測されるのである。

礫器は144点出土しており、刃器の中では最も出土量が多い。礫器は形状にバラエティーがあり、石斧状のもの、片面に全て剥離が及ぶもの、礫の形状を残し片側からのみ剥離を施すものがある。石斧状のものは周縁部からの調整剥離で石斧状に成形されるものであるが、刃角が大きくて石斧に分類されないもので、礫斧とも呼ばれるものである。この種の礫器の中には条痕文期の礫斧も含まれているものと思われる。片面に全て剥離が及ぶものは礫斧に近いが、周縁部から調整剥離が施されて長方形に成形されるものが多く、撻糸文期の所産と考えられる。礫の形状を残す礫器は撻糸文期の代表的な礫器であり、チョッパー状を呈するものである。刃部の作出法には、1側辺のみに調整剥離を施すもの、2側辺に調整剥離を施すもの、2側辺以上に調整剥離を施すものの3通りがある。1側辺のみに剥離を施すものは、扁平礫が多く、刃部も鋭く、充分に利器となるが、2側縁及びそれ以上に剥離を施すものは刃角が大きく、機能不明と言わざるを得ない。かつて、これらの礫器が石核として認識されたこともあるが、これらの剥片を素材とする剥片石器は明らかにされていない。本遺跡でも挿器の一部に、礫器製作上の剥片を利用した可能性を指摘したが、それらを主たる目的として礫器が存在しているものとは思われない。多数の剥片を検討したが、目的剥片は少ない様である。いずれにしても、礫器に分類した石器は、握りにすこぶ都合が良く、機能は不明瞭であるが握った状態での使用が考えられる石器なのである。

加工具

本来、刃器等は加工具であるが、ここでの加工具はそれ自身が利器として機能しないものである。つまり、道具を作り出す道具で、敲石、有溝砥石等を一括する。

敲石は、石器を作るためのハンマーを敲石とした。棒状の礫を使用し、端部を叩き面として使用している。本来、円形状のハンマーも存在するが、本遺跡からは検出されていない。棒状の敲石は、そのしなり等を良く利用して、力の最も加わる部分を叩き面として使用している。

有溝砥石は中央部に溝の通る矢柄研磨器状のものと、扁平礫の中央部や端部、側縁部等を使用したもの等が検出されており、点数も30点と比較的多く出土している。その機能については宮下健司氏によって検討されているが(宮下1983)、対象物の面を磨くのみでなく、先を尖らせる使用法が主となるものと思われる。特に、溝が鋭い「V」字状を呈するもの、角状を呈するもの等は力の加わった使用法が考えられ、側面を使用することからはこの石器を持って移動させながら対象物を研磨する使用法が推察されるのである。骨角器のみではなく、多様な対象物が想定される。

植物食加工具

いわゆる磨石、石皿等の粉食用の加工具である。ここにスタンプ形石器を含めたが、スタンプ形石器については別項を設けて検討した。

磨石は拳大の礫を使用しているものが多く、素材は閃緑岩を主としている。礫の両面を使用するものはやや扁平礫で、平坦面の多いものが素材として選ばれており、中央部に叩き状の痕跡を残すものもある。最も多いものは円形で、一部平坦面を持つ礫を使用するものであり、磨き面も面取り状の磨きを施しているものは少ない。243点程検出されているが、一部の使用面である光沢面を除けば、殆ど河原石と区別がつかない程である。

石皿は扁平礫の平坦面を使用するものが最も多く、大形のもの、小形のものが存在する。磨

石同様閃緑岩を主に使用するが、砂岩系の石材も多い。中期等の石皿と異なり、擦り面が窪みを持つ様なものではなく、平坦面を呈するものが殆どである。窪みを持つものでも浅い皿状の擦り面を呈する程度である。65点出土しており、磨石と共に多く検出されている。

剥片類

フレイク、チップ類を含めて4272点カウントした。1g以下=733点、1~10g=2036点、10~20g=550点、20~30g=285点、30~40g=188点、40~50g=121点、50~100g=256点、100~150g=65点、150~200g=25点、200g以上=14点で、重さを増すに連れて出土点数を減じて行く。20g以下が3322点で主体を占めるが、1~10gが2036点と最も多く、1g単位で分けても1g以下を頂点として、重さが増えるごとに確実に出土点数を減じて行くのが理解された。

また、剥片の縦幅と横幅の比率は、1g以下が平均1.80と最も比率が大きく、重さを増すに従って比率が小さくなり、150g以上の破片では平均1.40前後となる。全体の縦横比の平均は1.50前後である。大半がフォルンフェルスであることから、礫器の剥片が多いものと思われ、礫器を石核として得られた目的剥片としては剥取される剥片が小さい様である。やはり、礫器は礫器としての機能を有する石器であることを考慮した方がよいであろう。しかし、これは、礫器製作過程で剥取された大形剥片が石器の素材となることを否定するものではない。

本遺跡での以上のような石器組成は、燃糸文系期の典型的な石器組成を示すものであるが、器種の偏在性に特色がある。宮崎朝雄氏は石器組成の比率から燃糸文期の遺跡を局部磨製石斧・石斧・礫器等を主体とする「A」型と、スタンプ・磨石・石皿等を主体とする「B」型、石鏃を主体とする「C」型の3類型に分類し、すでに燃糸文期には石器組成の地域性があること、磨製石斧を中心とする「A」型は中葉期の東京湾沿岸地域に多いこと、大宮台地では中葉以降には石鏃、剥片石器等を中心とする「C」型の遺跡が増えること等、それぞれ地域的な差異と時間的な差異を検討した(宮崎1981b)。大方の傾向は捉えられているが、必ずしも合致しない遺跡が増えており、長期にわたる集落遺跡なのか、短期の遺跡なのか、製作址等の遺跡なのかといった複雑な要素が複合されている場合も考慮しなければならないだろう。その中でも本遺跡は典型的な「B」型となるが、それに多分に「A」型の要素を含むことも指摘しておきたい。これら植物食加工具を主体とすることは、四反歩遺跡が多摩丘陵から武蔵野台地の続きとしての地域性のみならず、関東山地を挟んで中部信州地方と隣接する地域であることも大きな要因になっているものと思われる。また、植物食加工具が多いことは長期的な定住集落を可能とし、利器等もそれなりに必要であったものと思われる。その結果が、四反歩遺跡においてこの様な石器組成として現れているものと判断される。

4. スタンプ形石器の検討

〔スタンプ形石器の分類〕

四反歩遺跡からは合計306点のスタンプ形石器が検出されている。埼玉県内では最も多い出土量であるとともに、現在までに報告されている遺跡でははけうえ遺跡(小田1981)の404次に次ぐ第2番目の出土量である。また、近年調査された武蔵台遺跡では、未報告ではあるが300点以上のスタンプ形石器の出土が報じられている(早川1992)。スタンプ形石器は何かと話題の多い石器で、

研究対象に取り上げられることが多かったが、基礎的なデータが少ないこともあってなかなか推測の域をでない石器でもあった。幸にも、四反歩遺跡から多量のスタンプ形石器が出土したため、細かい分析データを呈示しつつ従来の見解と比較検討してみたいと思う。

スタンプ形石器の分類は、素材となる原礫の形状までを対象とする分類が多いが、ここでは素材の形状にとらわれず、スタンプ形石器としての加工の相違によって次の様に分類した。

- a種…側面の全周に加工を施すもの（三角錐形石器に類似するもの）
- b種…2側縁に加工を施すもの（凡字形石器）
- c種…1側縁にのみ加工を施すもの
- d種…側縁に加工を施さないもの

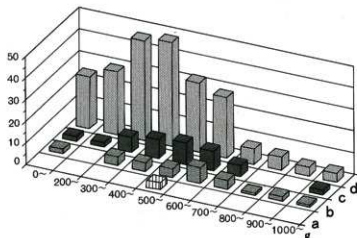
器種の分類とは別に、次の属性を抽出した。スタンプ形石器を弁別する際の最も基本的な属性と思われるものである。

- (1)底面整形…1度の打割で形成された底面に、調整剥離を施して平坦面を形成するものである。打割面が斜目の場合、平坦面を作出するために行われる整形である。
- (2)底側剥離…底面から側縁部に延びる垂直の小剥離痕である。使用の際に生じる使用痕と思われ、底面の使用度合との関係が目される。
- (3)底面摩耗…使用によると思われる底面の摩耗痕である。底面全面に認められるものから、剥離痕の稜線が潰れる位のものまで、使用の度合によって異なる。
- (4)被熱…熱を受けて赤色化しているものである。重要な要素の一つに成り得るものと思われたので、属性の一つとした。

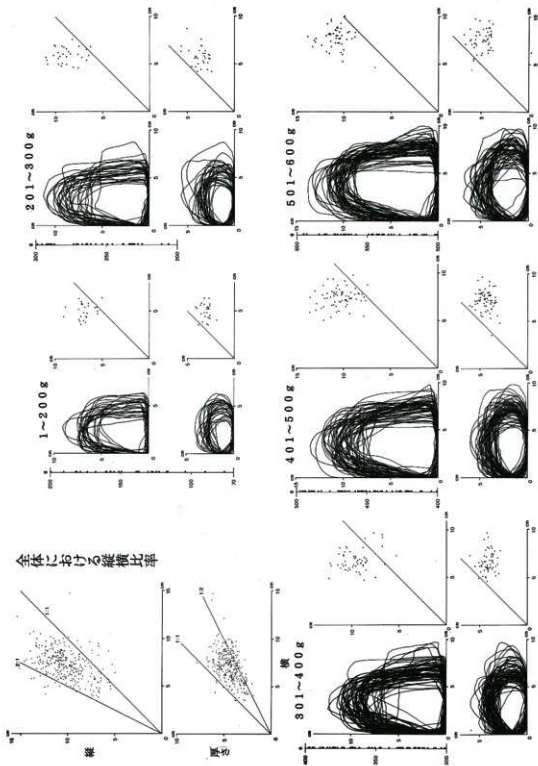
以上の分類項目でスタンプ形石器を検討するが、306点の中で31点の約1割が欠損品であった。底面を欠損するものはなく、全て分類の対象とした。分類値は第8表に示した。また、属性による分類は第10表に、諸関係をグラフ化したものは第280図に纏めた。

〔製作技法〕

第8表 スタンプ形石器分類表

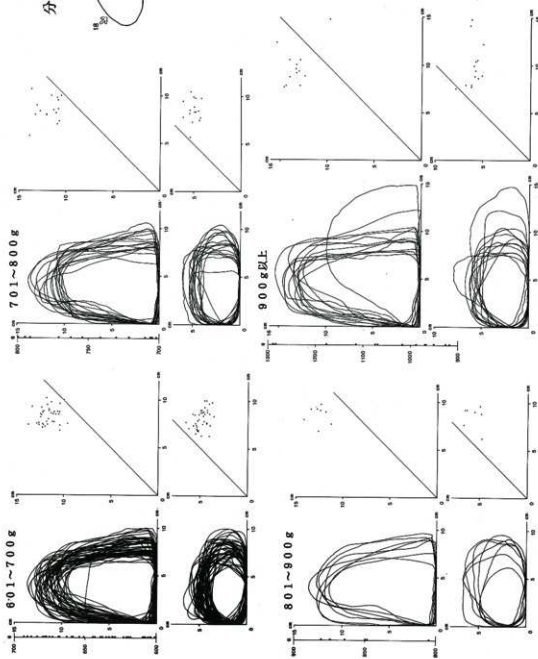
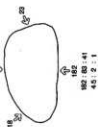


長さ	a	b	c	d	合計
1~200	0	2	3	24	28
201~300	0	0	7	29	31
301~400	0	4	7	46	57
401~500	0	4	9	48	61
501~600	3	4	10	32	49
601~700	0	7	9	28	44
701~800	0	4	5	7	16
801~900	0	1	0	6	7
901~1000	0	2	0	4	6
1001~	0	1	2	4	7
合計	3	29	46	228	306



第277図 スタンプ形石器形状図 (1)

分割打点統計



第278図 スタンプ形石器形状図 (2)

何を以てスタンプ形石器の完成品と認定するかは、大変難しい問題である。側縁部に調整剝離加工を施さなくても使用されているものもあれば、加工を施さずにただ打割されたままのものも存在する。ここでは、打割面が平坦面を呈し、スタンプ形石器の素材と成り得るものまでをスタンプ形石器として認定し、合わせて検討した。

まず、石器の形態であるが、原石の形状に大きく左右されることは明白であり、素材の選択もまた分類項目と成り得るが、繁雑となるためここでは有効性を考慮して割愛した。原石は比較的扁平な礫、三角形の礫、棒状・柱状の礫の3分類が可能となる。全てのスタンプ形石器の平面形と底面形のシルエットと、それぞれの縦横比率を第277図～第278図に示した。シルエット図は側面のうちで最も安定する面、最も広い面を下にして平面形を描いた。底面には打点の位置を示す予定であったが、繁雑となるため、統計的な概念図で打点位置を示すことにした。

〔形状〕306点の石器は80g前後から1300g前後まで存在し、纏まった集中傾向を持たずにまんべんなく存在するが、100g前後から700g前後を中心とする。その中でも300g～500gまでをピークとする。大半が底部に最大幅を持ち、縦横の比率は平面形では横幅に対して縦幅が1～2の値内にある。2以上の値を持つものは11点である。1以下の値を持つものは17を数える。これは胴部の半分以下を欠損している個体である。分布の中心は1.5前後に集中する。また、底面における横幅に対する厚さの比率は1～0.5前後のものが多いが、0.5に近い値で集中する。従って、四反歩遺跡におけるスタンプ形石器の平均的な形状は、底面幅の1.5倍程の長さを持ち、底面幅に対して厚さが1/2程のやや扁平な形状を想定できる。何等かの加工及び使用の痕跡が認められないものが、126点存在し、各重さのものが用意されている。スタンプ形石器の未製品である。

〔石材〕石材は閃緑岩が165点、砂岩が128点、フォルンフェルスが9点、結晶片岩が2点、安山岩が1点、凝灰岩が1点であり、閃緑岩と砂岩が圧倒的に多い。閃緑岩はやや扁平傾向が強く、砂岩は棒状傾向が強いため、閃緑岩を多く素材とすることから、結果として扁平傾向が強くなっているものと思われる。

第9表 スタンプ形石器石質分類表

	安山岩	閃緑岩	748/2728A	結晶片岩	砂岩	凝灰岩	合計
a	0	1	0	0	2	0	3
b	1	18	2	1	6	1	29
c	0	27	1	0	18	0	46
d	0	119	6	1	102	0	228
合計	1	165	9	2	128	1	306

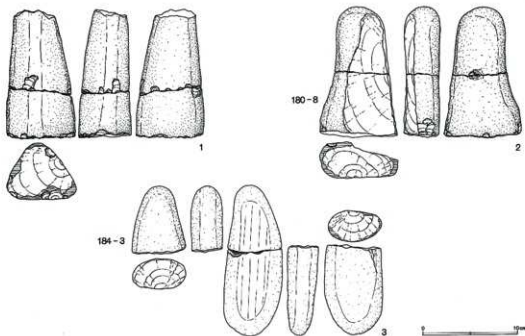
〔分割〕この様な礫をどの様に分割しているかは、底面に見られる打割痕を調べることによって理解される。第278図には三角形の底部を基本として、打点の場所を模式図的に統計化した図を掲載した。厳密には微妙な角度の相違があるが、ここでは傾向として押さえない。平面図は一番広い面及び安定する面を下にしているため、原石に対して打点が何処にあるのかの一般的な目安となる。つまり原石をどの様に割っているかの目安となる。

下側の最も広い面の中央部に打点が存在するものは182点、反対側の頂点付近が83点、両側の中

尖部が合わせて41点であった。その比率はおよそ4.5 : 2 : 1の割合である。底面が摩耗しているもの以外は、分割位置と方向が理解された。頂点部分は扁平礫では反対側の中央部となり、安定面と同様な意味を持つものもある。断面が三角形と扁平な石は、最も広い面の中央部を最終打割面としている。この部位が一番分割に適していたのであろうか。四角形状のものはコーナー付近を叩くものが多く、三角形のものではあまりコーナーは叩かない様である。礫を地面に置いて角があり重量のあるハンマーで叩いたか、細長い礫では手に持って角に叩き付けて分割したかは即断されないが、両者の可能性を指摘して置きたい。

【接合】 遺跡内での接合関係を試みたところ、3例の接合資料が得られた。第279図がそれであるが、1は底面を再生しているもので、2は欠損部分との接合であり、3はもと磨石として機能していたものを分割してスタンプ形石器に転用したものである。従って、2分割された河原石同志の接合が検出されないことから、大半は石材入手地で半割され、遺跡に持ち込まれて加工されたものと思われる。多くの未加工品が遺跡内から出土していることも、遺跡内で加工している証左となろう。

【底面整形】 底面に平坦面を形成するために施される調整剥離であるが、306点中115点に認められた。バルブを取り除く様に施されるものと、打点の対辺に出来ためくれを取り除くものが目立つが、後者を主体的とする。これは比較的細かい調整剥離の場合が多く、大きな剥離は各コーナーから施されているものが多い。また、明瞭に剥離面を形成しないが、コーナー部分に打点状のものを観察する場合がある。面取り状の剥離とも思われるが、主要剥離面に相殺されていて、確たる剥離と認定されないものである。打点と対向する部位に認められることが多く、石器を置いてハンマーで叩いた場合に生じる両極打法的な痕跡である可能性もある。一方、分割面が平坦面となる様に、最終



第279図 スタンプ形石器の接合例

第10表 スタンプ形石器属性性別分類表

底面整形	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	計
底側剝離	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	
底面摩耗	×	×	○	△	△	○	△	△	△	×	×	△	△	×	○	○	△	△	
被熱	×	○	×	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	×	×	○	△	
a	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	3
b	3	3	0	1	0	4	2	0	0	2	1	0	2	0	6	2	2	1	29
c	12	4	1	3	2	8	1	1	0	7	3	0	1	0	2	1	0	0	46
d	73	15	0	5	1	36	3	11	1	26	10	7	2	2	19	3	9	5	228
合計	88	22	1	9	3	48	7	12	1	35	14	7	5	3	27	6	12	6	306

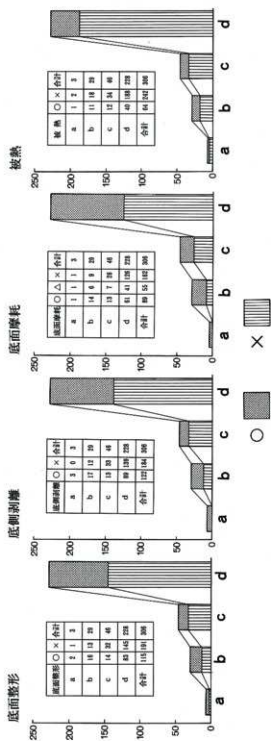
○ 認められる △ 若干認められる × 認められない

打点の対向部分にあらかじめ軽い打撃を加えて軽いひびを入れ、打割の際の割れ面における力の抜ける方向を導いている可能性もある。

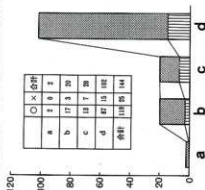
〔底側剝離〕底面から垂直に延びる剝離痕には、比較的長いものから短く潰れ状のものまであり、一様ではないが、306点中122点に認められた。底側剝離の著しいものは剝離痕が重複するものも存在する。底側剝離で打点付近に生じているものは、打割の際に生じたものであり、底側剝離の概念から外したい。これと同様に、底面整形の際に生じた剝離痕も底側剝離とは認められない。この様に整理すると、底面に摩耗が認められるものについて、底側剝離が顕著であることに気付く。使用と密接な関係にあることが理解される。

〔底面摩耗〕306点中144点に認められた。使用によって生じる摩耗痕であり、著しいものでは摩耗が底面全面に認められるものさえも存在する。しかし、大半は剝離痕の線縁が潰れる程度の摩耗であり、その点が使用頻度の少ない石器と言われる所以であろう。平坦な打割面でも凹凸が生じているため、様に摩耗痕は付かないが、周縁部に近い部分が帯状または環状に磨滅することが多い。この磨滅が認められる部分の底側縁との境である縁の部分には潰れていることが多く、この潰れの部分から底側剝離が延びている場合が多い。底面摩耗が認められる144点中、底側剝離が認められるものは119点存在し、8割以上の確立で現れている。底面摩耗が微量に認められるものが、144点中55点存在することから、明らかに使用の痕跡が認められるものには底側剝離が認められることになる。底側剝離が全周に認められる場合は、底面摩耗が全体に及んでいる。また、摩耗が若干観察されても、底側剝離が認められないものもある。従って、使用の頻度に応じて、底側剝離が進むものと思われ、底側剝離が使用痕であることが理解される。

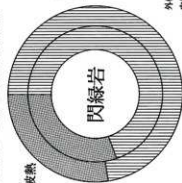
〔被熱〕スタンプ形石器には、被熱されて赤色化しているものも存在する。306点中64点(約21%)に被熱が認められた。全体ではおよそ2割であるが、閃緑岩と砂岩にのみ認められている。閃緑岩は165点中50点(約30%)が焼けており、使用の認められるもの87点中24点(約27%)が焼けている。一方、砂岩は全体128点中14点(約11%)が焼けており、使用されているもの50点中4点(8%)に被熱が認められた。使用されているものの中に占める被熱の割合は約20%であり、全体個数の中に占める割合とほぼ同じ割合となる。つまり、全体の中にも2割、使用されたものの中にも2割の確立で被熱痕が存在し、閃緑岩、砂岩にも割合こそ異なるが全体と使用したものの中にそれぞれ同



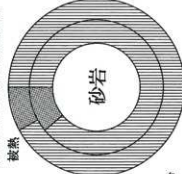
摩擦痕を有する物と底面剥離の関係



閃緑岩の全体と使用別被熱割合



砂岩の全体と使用別被熱割合



第280図 属性比較分類図

じ割合の被熱線が存在している。この分析の結果、被熱は使用後に行われているのではなく、スタンプ形石器の素材の段階で行われている可能性が高いと理解される。スタンプ形石器の素材の中には、当初より被熱線が2割の確立で含まれていたものと思われる。

また、閃緑岩では約3割、砂岩では約1割と被熱の割合が異なるのは、閃緑岩の方がより火との関わり合いが強いためと思われる。被熱の意義は、分割のためと、儀礼的なものとが考えられる。分割であるとなると、完全に被熱させなくても、少し過熱しただけで割り易くなるという見解があるが、実験的に試みたものではない。過熱し過ぎると閃緑岩は脆くなる。閃緑岩は砂岩の3倍の割合で過熱していることから、砂岩より割りずらく、過熱して分割する方法をより多く採用しているものと解釈される。一方、儀礼的なものと解釈すると、磨石、石皿等が多く被熱されるのと同じ意味合いを持つものと思われる。植物買食加工具にみられる、被熱と同様に解釈されるのであるが、その意味合いは推測の域を出ない。また、いわゆる未製品についても被熱が見られることは、分割の際に何等かの儀礼が行われていることを意味するものと思われる。いずれにしても興味深い事例であり、資料の増加を待って検討されるべき問題である。

〔スタンプ形石器の機能〕

スタンプ形石器は明らかに底面に摩耗痕が認められ、主たる機能面が底面にあることは確実である。また、摩耗痕と底側剥離の関係から、使用頻度によってエッジの潰れが強く、底側剥離が多くなる傾向が明らかとなった。底側剥離が発達する過程には、エッジにおける上下運動の増加が必要となる。また、エッジを主たる使用面とした場合、エッジの潰れはさらに著しいものとなり、底側剥離が大きく、欠損状のものが多くなるものと思われる。従って、使用の際徐々にエッジが当たる使用法が考えられる。上下に振り下ろす運動で、たまたまエッジが何かに当たる使用法が考えられる。それは、底面の摩耗痕がグランド運動で摩耗したものでないことから理解されるものであり、グランド用具としての磨石がスタンプ形石器以上に出土していることから、擦り潰すための道具ではないことが証明されよう。使用により時々エッジに剥離が入ることから、エッジがかなり硬いものに当たっているものと推定され、上下の運動で対象物に変形した際に、エッジが硬いものに当たる使用法が推測される最も妥当な使用法と考えられる。従って、硬い台の上に対象物を乗せて叩き潰す機能を有するものと推測される。つまり、堅果類を叩き潰す機能が考えられるが、物を叩いて潰すという行為全般に対して、万能な石器であったことが推察される。底面における微妙な凹凸は、丸い堅果類に対して滑りを止める役割を果たしていた可能性もあるのである。

〔まとめ〕

以上、スタンプ形石器について分類と諸属性の観察から、その機能面までを検討してきたが以下簡潔にまとめて置きたい。

スタンプ形石器が命名されたのは大丸遺跡(芹沢1957)の文献であり、それ以前から凡字形石器と言われていた石器(首藤1923)もその中に包括されていた。今日では凡字形石器もスタンプ形石器の1形態として認識されるのが一般的となっている。また、栗原文蔵氏等によって注目された三角錐形石器(栗原1959)も総体的な見直しが行われ(石坂・岩崎1988)、スタンプ形石器と機能的に共通する部分を持つが、別型式の石器として認識されるに至っている。スタンプ形石器は報告書

の考察（小田1980、山崎1982、西井1983）や総合的な論考（小田1983、早川1992）が加えられる様になり、研究史的な整理が行われ、今日では燃糸文期の代表的な石器として位置付けられる様になってきた。

本遺跡のスタンプ形石器には

1. 形状は採集される原石に左右されるが、調整の相違で4形態に分類が可能なこと
 2. 分割技法に特殊性がみられること
 3. スタンプ形石器の素材となる段階で被熱されるものがあること
 4. スタンプ形石器は石材入手地で分割されて、素材が遺跡内に持ち込まれていること
 5. 底側剝離は使用痕であること
 6. 機能は手に握り、上下運動を伴い、底面の平坦面を対象物を叩き潰すこと
 7. 磨石、石皿と共に出土量の多い石器であり、相互に綿密に関連する遺物であること
 8. 素材となる未製品が多く、完成品で未使用品があることから、集落内外を問わず流通品となる可能性があること
 9. 夏島期には確実に存在し、それ以前から存在する可能性の高い石器であること
- と言う特性が導き出せたのである。

これ等の特性がスタンプ形石器一般に共通する特性であるのか、四反歩遺跡独自のものは類例の増加を待って検討されなければならない問題である。特に、被熱された際が素材の段階で存在することは、製作上の問題にせよ、儀礼的な問題にせよ今後注目される特徴となろう。下里本邑遺跡（山崎1982）では、火の使用が認められる周囲に、分轄されたままの素材としての石器が集中しており、しかもその場が河床であるという示唆的な状況が検証されているのである。

また、スタンプ形石器はその形状はいずれにしても、底面に平坦面を持つことが最大の特徴であり、一度の加撃で平坦面を形成することが如何に困難であるかは、周知の通りである。しかし、当時の製作者にはいとも簡単なものであったかもしれない。それは簡単と成り得る製作技法があったからにほかならない。現在、分割面を観察しても明確に技術的なものを指摘し得ないが、最終分割の前に力の抜け道を方向付ける細工を施しているものと思われる。それがレンガ割り（早川1992）的な技法なのか、パイプラー的技法による経験的な結果的效果なのか、さらに細かい検証が必要となってきた。分割面には調整剝離と異なる剝離状の面と打点状のものを認めることがあるが、それ等が製作技法上の痕跡であると確信するまでには至らなかった。今後、実験的なものを踏まえた上で、検討を重ねたいと思う。（金子直行）

5. 奈良時代の土器と集落について

川本工業団地建設地内では、8世紀代を中心とした奈良時代の住居跡が、四反歩遺跡東地区で5軒、北地区で4軒、竹之花遺跡で8軒検出されている。ここでは、これらの住居跡から出土した土器の編年を試み、若干の問題点を提起しておきたい。

上記遺跡から出土した奈良時代の土器の変遷を第281図のように5段階に分ける。編年を行なう上では次の点にとくに留意した。

まず形態変化を明確にしやすい須恵器坏を基準にした。口径の縮小化や、口径と底径の比率の変化などから相対編年を行なったが、どの住居からも出土しているわけではなく、完形品がそれほど多くないことから、決定的資料とはならない。なお四反歩遺跡北・東地区で出土した須恵器は、ほとんどが南比企産と推定され、Ⅰ段階は鳩山Ⅰ期、Ⅱ段階は鳩山Ⅱ期、Ⅴ段階は鳩山Ⅴ～Ⅶ期に相当すると考えた。

土師器の坏は、口縁の形態によっておおそ4類に分けられる。すなわち①口縁部が体部との境で屈曲して外反して開くもの、②口縁部がほぼ直立またはやや開き気味に立ち上がるもの、③体部から口縁部にかけて丸みを帯びて境界が明瞭でないもの、またもっとも新しいⅥ段階であられる④平底で、口縁部がS字状に屈曲するものである。①は前時代の坏から継承する形態を示し、Ⅰ段階のものは、丁寧な放射状暗文が施され底部が丸みを帯びている。丸底から次第に底部が扁平化する。②も器高が扁平化する傾向を示し、口径も小型化するようである。Ⅳ段階ではほとんど平底のようになる。③は器高が高く鉢のような形態であったものが、次第に底部が扁平化するに従って、②との区別がほとんどつかなくなってしまふ。土師器壺は頸部が大きく外に屈曲するものから、く字形さらにコ字形に変化する跡を追うことができる。

以上の各点から第281図のような編年案を作成した。これは原則的にⅠ住居から出土した土器をⅠ段階の中に取めたため多少前後が重複する場合もあるだろうし、古い段階の形態を残した土器も共存することあろう。具体的な年代に関しては議論の余地もあるだろうが、各既論を考えあわせほぼ次のように比定した。

Ⅰ段階＝8世紀第1四半期、Ⅱ段階＝8世紀第2四半期、Ⅲ段階＝8世紀第3四半期、Ⅳ段階＝8世紀第4四半期、Ⅴ段階＝9世紀前半。

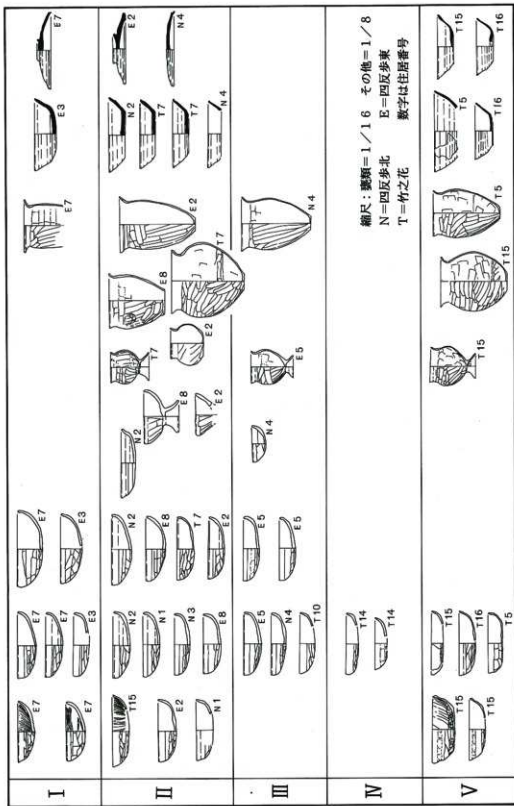
そして各段階に相当する住居跡は次のとおりである。

	I	II	III	IV	V
四反歩東	3	7・…・2	8・…・…・5		
四反歩北		1	2	3・…・4	
竹之花		7	8	17・…・10・…・…・14・…・5	15 16

周辺遺跡との関連

以上から上記3遺跡では、四反歩遺跡東地区でもっとも早く8世紀第1四半期に住居がつくられ、集落の範囲が北へ拡大するように、四反歩遺跡北地区、竹之花遺跡と順に住居がつくられるようになる。8世紀第2四半期を全盛期として住居の築造軒数は減少し、8世紀第3四半期をもって四反歩地域では集落は廃絶し、竹之花遺跡で9世紀前半くらいまで集落が営まれていた。

これらの遺跡が立地する台地の北側、やや低くなった河岸段丘上には、鹿島古墳群が分布する。この古墳群は6世紀末頃から8世紀初頭くらいまで築造が行なわれたと考えられている。また谷を挟んで東側にも清水山古墳群があり、埴輪も採集されている。権現堂遺跡や鹿島遺跡、川端遺跡などで、これらの古墳群が営まれていた時期（6～7世紀代）の住居跡が検出されている。そして古墳が築かれなくなった時期とほぼ期を同じくして、四反歩遺跡東地区では集落が営まれ始める。7



縮尺：鏡頸=1/16 その他=1/8
 N=四反歩北 E=四反歩東
 T=竹之花 数字は住居番号

第281図 四反歩・竹之花遺跡における土器編年図

世紀代に集落のあった遺跡において、その後8世紀代の住居がどれほどあるか詳細が不明なので、古墳を築いていた集団が古墳放棄とともに台地上に移住したとは言いきれないが、何かしらの関係があることは予想できる。その鍵を握るのは、四反歩と竹之花遺跡の中間に位置する詔光寺廃寺の比定地と、竹之花遺跡の東に位置する荷鞍ヶ戸瓦窯跡比定地である。

これらの遺跡は調査が行なわれておらず、その存在も明確ではないが、詔光寺廃寺では平安時代後半ごろと推定された小金銅仏が出土し、瓦窯跡と想定されるところでは、耕作中に模骨痕の残る布目瓦が出土しており、8世紀第1四半期に比定されている（トレンチ調査では窯跡は確認できなかった）。距離の至近性からみて詔光寺廃寺で使用された瓦が、この瓦窯で焼成された可能性は高い（ただし詔光寺廃寺では瓦は採集されていない）。これらの推定がいずれも真実とすれば、詔光寺廃寺は古墳廃絶期につづく8世紀前半ころに建造され、少なくとも平安時代全般にわたって存在していたことになる。この寺院の建立と共に四反歩、竹之花遺跡で集落が営まれるようになるのは偶然ではあるまい。また、これらの遺跡が位置する地域は『和名抄』の男会郡榎津郷に当たり、同郷内には江南町も含んでいると考えられている。このように古墳の廃絶と寺院の建立、郡郷の整備をはじめとする律令体制の浸透などの社会的な変化が、在地集団に及ぼした影響は小さなものではなく、集落の移動や拡散などの外面的な変化も多くもたらされたと考えられる。

四反歩、竹之花遺跡では8世紀後半から9世紀前半にかけて集落が営まれなくなった。その後台地上では、今のところ白草遺跡で10世紀代の住居が多く築かれるようになるまでの、約1世紀の間に相当する住居跡等は検出されていない。しかし上述のように、もし詔光寺廃寺が継続して存続しているとすれば、この時期の住居もいずれかの場所に作られていた可能性は高い。台地北側の河岸段丘上に位置する鹿島遺跡や川端遺跡などでは9世紀代の住居が検出されているが、詳細は不明である。白草遺跡は台地の北西斜面に10世紀中葉を中心とする62軒の住居が、ほとんど重複することなく集中して築かれている。報告書中では住居の分布を5群に分けている。8世紀の集落内では住居が散在している状況であったので、集落の景観自体に前時代との大きな差異が看取される。やがて畠山氏を代表とする武士の時代が訪れるが、これ以降の遺跡はほとんど知られていない。

以上、四反歩遺跡北・東地区を中心にして、奈良時代の土器の変遷および周辺遺跡との関連について考察してきた。しかし、周辺遺跡はほとんどが未調査で、また調査されても調査報告書が未刊のものがあり、多くを語ることはできない。また川本町だけではなく、より広い範囲での総合的な分析がさらに必要なことは言うまでもない。未だ筆者の力がそこまで及ばないのは、何とも歯痒い限りである。

（岡本健一）

参考文献

- 青木義脩 1983 「松木北・松木遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第23集
青木秀雄・西井幸雄・松村和男 1983 「前原遺跡」 宮代町文化財調査報告書第1集
赤熊浩一他 1987 「奈良時代前半の須恵器編年とその背景—前内出窯跡その後—」 埼玉考古別冊2
赤熊浩一 1988 「将監塚・古井戸」 歴史時代II 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
安孫子昭二 1983 「小山田No13遺跡」 小山田遺跡群II
荒井幹夫 1976 「栗谷ツ遺跡」 富士見市文化財報告第11集

- 井口直司 1982 「多聞寺前遺跡Ⅰ」 多聞寺前遺跡調査会
- 石井 寛 1991 「横浜市内の燃糸文終末期資料とその評価」 調査研究収録第8冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 石坂茂・岩崎泰一 1988 「燃糸文土器文化における石群の一樣相—スタンプ形石器と三角錐形石器を中心として—」 研究紀要5 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 池田大助 1984 「下総台地における沈線文土器群の出現」 研究紀要8 千葉県文化財センター
- 磯崎 一 1992 「白草遺跡Ⅱ」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第118集
- 伊藤恒彦 1991 「三矢田遺跡」 真光寺・広袴遺跡群Ⅵ 鶴川第二地区遺跡調査会
- 伊藤富治夫 1979 「貫井遺跡」 小金井市貫井遺跡調査会
- 今橋浩一 1977 「中野木新山遺跡」 中野木新山遺跡調査団
- 今村啓爾 1983 「東京天文台構内遺跡」 東京天文台構内遺跡調査団
- 江坂輝弥 1944 「回転押捺文土器の研究」 人類学雑誌第59巻第8号
- 江坂輝弥 1950 「縄文式文化について」 歴史評論第4巻第5号
- 大塚達朗 1984 「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書」 埼玉県教育委員会
- 岡部利和 1983 「大和田遺跡」 立川市遺跡調査会
- 岡本 勇 1953 「相模平坂貝塚」 駿台史学3
- 岡本孝之 1972 「燃糸文化の展開(一・二)」 古代文化第24巻第1・2号
- 岡本健一 1993 「谷津・二反田・下向山」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第131集
- 小倉 均 1984 「梅所遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第43集
- 小倉 均 1986 「井沼方遺跡(第8次)発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第59集
- 小田静夫 1980 「小金井市西之台遺跡B地点」 東京都埋蔵文化財調査報告第7集
- 小田静夫 1980 「はけうえ」 国際基督教大学考古学センター
- 小田静夫 1983 「スタンプ形石器」 縄文文化の研究7
- 鹿島保宏 1988 「寺谷戸遺跡発掘調査報告」 横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 金子直行 1984 a 「明花向・明花上ノ台・井沼方馬場・とうのこし」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
- 金子直行 1984 b 「向原・上新田・西浦」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第41集
- 金子直行 1991 「小室上台遺跡」 船橋市教育委員会
- 川口 潤 1993 「白草遺跡Ⅰ」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集
- 川本町 1989 「川本町史」 通史編
- 栗原文蔵 1959 「縄文中期に伴う特異な石器」 若木考古第54号
- 栗原文蔵他 1972 「鹿島古墳群」 埼玉県埋蔵文化財調査報告第1集
- 小林達雄 1966 「多摩ニュータウンNo.52遺跡の発掘調査」 多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ
- 斉藤悟郎 1985 「叭原遺跡(先土器・縄文時代編)」 川口市文化財調査報告書第23集
- 佐々木保俊 1981 「北通遺跡出土の縄文時代早期の土器」 富士見市遺跡調査会研究紀要第1号
- 佐々木保俊 1985 「貝塚山遺跡発掘調査報告書—第2地点—」 富士見市遺跡調査会調査報告第24集
- 佐々木藤雄 1982 「向原遺跡」 第1分冊 神奈川県埋蔵文化財センター調査報告1
- 篠原 正 1979 「北総台地における縄文時代草創期後半について」 千葉県の歴史7
- 白石浩之 1973 「南横浜バイパスNo.4遺跡」 神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告5
- 白崎高保 1941 「東京稲荷台先史遺跡」 古代文化第12巻第8号
- 首藤岩泉 1923 「凡字形石器について」 武相研究第3輯
- 杉原莊介・芹沢長介 1957 「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」 明治大学文学部研究報告考古学第2冊
- 鈴木道之助 1974 「櫻峠遺跡」 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
- 鈴木徳雄 1984 「いわゆる北武蔵系土器器形の動態—古代武蔵国における土器器生産と交易—」 土曜考古第9号
- 芹沢長介 1954 「関東及中部地方における無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」 駿台史

- 芹沢長介 1957 「神奈川県大丸遺跡の研究」 駿台史学 7
- 高橋和典 1991 「野山北公園内遺跡発掘調査報告書」 野山北公園内遺跡調査会
- 谷井 彪 1976 「鶴ヶ丘」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集
- 戸田哲也 1985 「殿屋敷遺跡群C地区発掘調査報告書」 殿屋敷遺跡群C地区発掘調査団
- 戸田哲也 1986 「縄文土器の型式学的研究と編年(前編)」 神奈川考古同人会10周年記念
- 戸田哲也 1987 「縄文土器の型式学的研究と編年(中編)」 神奈川考古第23号
- 戸田哲也 1988 「縄文土器の型式学的研究と編年(中編その2)」 神奈川考古第24号
- 戸田哲也 1990 「成瀬西遺跡群発掘調査報告書」 成瀬西地区画整理地内遺跡調査団
- 利根川章彦 1991 「竹之花・下大塚・円弥遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第105集
- 富沢敏弘 1985 「中標遺跡」 群馬県昭和村教育委員会
- 中西 克 1978 「貫井遺跡」 小金井市貫井遺跡調査会
- 西川博孝 1984 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ-№7 遺跡-1」 千葉県文化財センター
- 野村幸希 1990 「立正大学熊谷校地内遺跡の調査」 遺跡調査室年報V
- 早川 泉 1983 「調布市深大寺池ノ上遺跡」 調布市埋蔵文化財調査報告21
- 早川 泉 1992 「スタンブ形石器研究序説」 縄文時代第3号
- 原 雅信 1989 「三室坊主林遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第90集
- 原田昌幸 1986 「燃糸文系土器終末期の諸問題—無文土器「東山式」の設定—」 物質文化第46号
- 原田昌幸 1987 「燃糸文系土器終末期の諸問題(Ⅱ)「平板式土器」の再検討」 物質文化第48号
- 原田昌幸 1988 「花輪台式土器論」 考古学雑誌第74巻第1号
- 原田昌幸 1989 「燃糸文系土器終末期の諸問題(Ⅲ)「大浦山式土器」の検討」 物質文化第52号
- 原田昌幸 1990 「燃糸文系土器終末期の諸問題(Ⅳ)「稲荷原式土器」の検討」 物質文化第54号
- 原田昌幸 1991 「燃糸文系土器様式」 考古学ライブラリー-61
- 水村孝行 1980 「甘粕山」 埼玉県遺跡発掘調査報告第30集
- 宮 重行 1981 「木の根」 千葉県文化財センター
- 宮井英一 1985 「大林Ⅰ・Ⅱ・宮林・下南原」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集
- 宮崎朝雄 1981 a 「燃糸文系土器群の終末と無文土器」 土曜考古第3号
- 宮崎朝雄 1981 b 「燃糸文系土器の石器について」 なわ第19号
- 宮崎朝雄 1983 「中原前・駒前」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第30集
- 宮崎朝雄・金子直行 1989 「井草式土器及び周辺の土器群について」 研究紀要第5号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎朝雄・金子直行 1990 「燃糸文系土器群と押型文系土器群の関係(素描)」 縄文時代第1号
- 宮崎朝雄 1991 a 「夏島式土器及び稲荷台式土器について」 埼玉考古学論集
- 宮崎朝雄 1991 b 「燃糸文系土器群終末期の一樣相—稲荷原式新・大浦山Ⅰ式・花輪台式段階の土器群—」 埼玉考古第28号
- 宮下健司 1983 「有溝砥石」 縄文文化の研究 7
- 武藤康弘 1981 「堂ヶ谷戸遺跡Ⅰ」 世田谷区遺跡調査会
- 森下昌一郎 1983 「鷲山遺跡」 大宮市遺跡調査会報告第6集
- 矢島清作 1942 「東京市杉並区井草の石器時代遺跡」 古代文化第13巻第9号
- 安岡路洋 1964 「東中尾」 埼玉県立文化会館
- 安岡路洋 1966 「稲荷原」 大宮市教育委員会
- 安岡路洋 1981 「東北原遺跡—第5次調査—」 大宮市遺跡調査会報告第2集
- 山形洋一 1986 「西大宮バイパス№4 遺跡」 大宮市遺跡調査会報告第16集
- 山崎 文 1982 「下里本邑遺跡」 下里本邑遺跡調査会
- 若月省吾 1981 「笠縣村和田遺跡」 笠縣村教育委員会
- 渡辺 一 1990 「鳩山窯跡群Ⅱ」 鳩山町教育委員会